審査報告書

ブロフラニリド

令和3年4月1日 農林水産省消費·安全局農産安全管理課

独立行政法人農林水産消費安全技術センター

本審査報告書は、新規有効成分ブロフラニリドを含む製剤の登録に際して、申請者の提出した申請書、添付書類及び試験成績に基づいて実施した審査の結果をとりまとめたものです。

本審査報告書の一部には、ブロフラニリドの食品健康影響評価(食品安全委員会)、残留 農薬基準の設定(厚生労働省)並びに水産動植物被害防止及び水質汚濁に係る登録保留基 準の設定(環境省)における評価結果の一部を引用するとともに、それぞれの評価結果の 詳細を参照できるようリンク先を記載しています。これらの評価結果を引用する場合は、 各機関の評価結果から直接引用するようにお願いします。

なお、本審査報告書では、「放射性炭素(¹⁴C)で標識したブロフラニリド及び当該物質の代謝・分解により生じた¹⁴Cを含む物質」について「放射性物質」と表記していますが、他機関の評価結果の引用に際して、別の表現で記述されている場合は、用語の統一を図るため、意味に変更を生じないことを確認した上で、「放射性物質」に置き換えて転記しています。

食品健康影響評価(食品安全委員会)

(URL: http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026)

残留農薬基準の設定 (厚生労働省)

(URL: https://www.mhlw.go.jp/content/11130500/000604333.pdf)

水産動植物被害防止に係る農薬登録保留基準の設定(環境省)

(URL: http://www.env.go.jp/water/broflanilide.pdf)

水質汚濁に係る農薬登録保留基準の設定(環境省)

 $(URL: \underline{http://www.env.go.jp/water/var/www/html/\ iq\ import/water/dojo/noyaku/odaku\ kijun/rv/broflanilide.pdf})$

Most of the summaries and evaluations contained in this report are based on unpublished proprietary data submitted for registration to the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries, Japan. A registration authority outside of Japan should not grant a registration on the basis of an evaluation unless it has first received authorization for such use from the owner of the data submitted to the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries, Japan or has received the data on which the summaries are based, either from the owner of the data or from a second party that has obtained permission from the owner of the data for this purpose.

目次

				貝
I.	申請は	こ対	する登録の決定	1
	1. 登纪	録決	定に関する背景	1
	1.1	申請	清	1
	1.2	提出	出された試験成績及び資料の要件の確認	1
	1.3	基準	準値等の設定	1
	1.5	3.1	ADI 及び ARfD の設定	1
	1.5	3.2	食品中の残留農薬基準の設定	1
	1.5	3.3	水産動植物の被害防止に係る農薬登録保留基準の設定	2
	1.5	3.4	水質汚濁に係る農薬登録保留基準の設定	3
	1.5	3.5	農薬登録保留要件(旧農薬取締法第3条第1項)との関係	3
II.			· · · · · · · · · · · · · ·	
	1. 審	查報	告書の対象農薬及び作成目的	8
	1.1	審査	査報告書作成の目的	8
	1.2	有效	劝成分	8
	1.2	2.1	申請者	8
	1.2	2.2	登録名	8
	1.2	2.3	一般名	8
	1.2	2.4	化学名	8
	1.2	2.5	コード番号	8
	1.2	2.6	分子式、構造式、分子量	8
	1.2	2.7	農薬原体中の有効成分の含有濃度	9
	1.3	製剤	判	9
	1.9	2 1	由請者	c

1.3.2	名称及びコード番号9
1.3.3	製造者
1.3.4	剤型
1.3.5	用途
1.3.6	組成
1.4 農	薬の使用方法10
1.4.1	使用分野
1.4.2	適用害虫への効果
1.4.3	申請された内容の要約10
1.4.4	諸外国における登録に関する情報10
2. 審査結	5果11
2.1 農	薬の基本情報11
2.1.1	農薬の基本情報11
2.1.2	物理的・化学的性状11
2.1	.2.1 有効成分の物理的・化学的性状11
2.1	.2.2 製剤の物理的・化学的性状11
2.1	.2.3 製剤の経時安定性
2.1.3	使用方法の詳細13
2.1.4	分類及びラベル表示14
2.2 分	析法
2.2.1	原体
2.2.2	製剤
2.2.3	作物
2.2	.3.1 分析法
2.2	.3.2 保存安定性
2.2.4	土壤
2.2	4.1 分析法 21

2.2.4.2	保存安定性	22
2.3 ヒト及	び動物の健康への影響	23
2.3.1 ヒ	ト及び動物の健康への影響	23
2.3.1.1	動物代謝	23
2.3.1.2	急性毒性	32
2.3.1.3	短期毒性	33
2.3.1.4	遺伝毒性	38
2.3.1.5	長期毒性及び発がん性	38
2.3.1.6	生殖・発生毒性	43
2.3.1.7	生体機能への影響	45
2.3.1.8	その他の試験	45
2.3.1.9	代謝物及び原体混在物の毒性	51
2.3.1.10) 製剤の毒性	53
2.3.2 AD	DI 及び ARfD	54
2.3.3 水質	質汚濁に係る農薬登録保留基準	56
2.3.3.1	農薬登録保留基準値	56
2.3.3.2	水質汚濁予測濃度と農薬登録保留基準値の比較	57
2.3.4 使力	用時安全性	57
2.4 残留		59
2.4.1 残量	留農薬基準値の対象となる化合物	59
2.4.1.1	植物代謝	59
2.4.1.2	規制対象化合物	68
2.4.2 消费	費者の安全に関わる残留	69
2.4.2.1	作物	69
2.4.2.2	家畜	79
2.4.2.3	魚介類	79
2.4.2.4	後作物	80
2.4.2.5	暴露評価	80

2	.4.3	残留	習農薬基準値	81
2.5	環境	意動態	進	83
2	.5.1	環境	竟中動態の評価対象となる化合物	83
	2.5.1	1.1	土壤中	83
	2.5.1	1.2	水中	83
2	.5.2	土墳	忀 中における動態	83
	2.5.2	2.1	土壤中動態	83
	2.8	5.2.1	1.1 好気的土壤	84
	2.5.2	2.2	土壤残留	88
	2.5.2	2.3	土壤吸着	89
2	.5.3	水中	中における動態	90
	2.5.3	3.1	加水分解	90
	2.5.3	3.2	水中光分解	90
	2.5.3	3.3	水産動植物被害予測濃度	92
	2.5.3	3.4	水質汚濁予測濃度	93
2.6	標的	的外生	生物への影響	95
2	.6.1	鳥類	頁への影響	95
2	.6.2	水生	上生物への影響	95
	2.6.2	2.1	原体の水産動植物への影響	95
	2.6.2	2.2	水産動植物の被害防止に係る農薬登録保留基準	98
	2.0	6.2.2	2.1 登録保留基準値	98
	2.0	6.2.2	2.2 水産動植物被害予測濃度と農薬登録保留基準値の比較	99
	2.6.2	2.3	製剤の水産動植物への影響	99
	2.6.2	2.4	生物濃縮性	100
2	.6.3	節瓦	≧動物への影響	102
	2.6.3	3.1	ミツバチ	102
	2.6.3	3.2	蚕	102
	2.6.3	3.3	天敵昆虫等	103

2.7	薬効及び	『薬害	.104
2.7	7.1 薬効]	.104
2.7	7.2 対象	作物への薬害	.107
2.7	7.3 周辺	農作物への薬害	.109
2.7	7.4 後作	物への薬害	. 110
別添1 月	月語及び	咯語	. 111
別添2 付	代謝物等-	一覧	. 114
別添3 著	審査資料-	一覧	. 116

- I. 申請に対する登録の決定
- 1. 登録決定に関する背景

1.1 申請

農林水産大臣は、農薬取締法の一部を改正する法律(平成30年法律第53号)第1条の規定による改正前の農薬取締法(昭和23年法律第82号。以下「旧農薬取締法」という。)に基づき、平成30年2月27日、新規有効成分ブロフラニリドを含む製剤(ブロフレアSC(ブロフラニリド5.0%水和剤)及びブロフレア20SC(ブロフラニリド20.0%水和剤))の登録申請を受けた。

1.2 提出された試験成績及び資料の要件の確認

ブロフレア SC 及びブロフレア 20SC の申請に際して提出された試験成績及び資料は、以下の通知に基づく要求項目及びガイドラインを満たしていた。

- ・農薬の登録申請に係る試験成績について
- (平成12年11月24日付け12農産第8147号農林水産省農産園芸局長通知)
- ・「農薬の登録申請に係る試験成績について」の運用について (平成13年10月10日付け13生産第3986号農林水産省生産局生産資材課長通知)
- ・農薬の登録申請書等に添付する資料等について (平成14年1月10日付け13生産第3987号農林水産省生産局長通知)
- ・「農薬の登録申請書等に添付する資料等について」の運用について (平成14年1月10日付け13生産第3988号農林水産省生産局生産資材課長通知)

1.3 基準値等の設定

1.3.1 ADI 及び ARfD の設定

食品安全委員会は、食品安全基本法(平成 15 年法律第 48 号)に基づき、ブロフラニリドの食品健康影響評価の結果として、以下のとおりブロフラニリドの ADI(一日摂取許容量)及び ARfD(急性参照用量)を設定し、令和元年 10 月 8 日付けで厚生労働大臣に通知した。

ADI 0.017 mg/kg 体重/日 ARfD 設定の必要なし

(参照) 食品健康影響評価の結果の通知について(令和元年 10 月 8 日付け府食第 370 号食品 安全委員会委員長通知)

(URL: https://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026)

1.3.2 食品中の残留農薬基準の設定

厚生労働大臣は、食品衛生法(昭和22年法律第233号)に基づき、ブロフラニリドの食品 中の残留農薬基準を以下のとおり設定し、令和2年9月14日付けで告示した(令和2年厚生 ブロフラニリド - I. 申請に対する登録の決定

労働省告示第310号)。

基準値設定対象: ブロフラニリド

食品中の残留基準

食品名	残留基準値(ppm)
かんしょ	0.01
だいこん類(ラディッシュを含む。)の根	0.01
だいこん類(ラディッシュを含む。)の葉	9
かぶ類の根	0.04
かぶ類の葉	6
はくさい	1
キャベツ	0.4
ケール	10
こまつな	6
きょうな	5
チンゲンサイ	10
カリフラワー	2
ブロッコリー	2
その他のあぶらな科野菜	10
レタス(サラダ菜及びちしゃを含む。)	15
ねぎ (リーキを含む。)	3
えだまめ	0.8
その他のハーブ	10

(参照) 食品、添加物等の規格基準の一部を改正する件について(令和2年9月14日付け生 食発0914第1号厚生労働省大臣官房生活衛生・食品安全審議官通知)

(URL: https://www.mhlw.go.jp/content/000671445.pdf)

1.3.3 水産動植物の被害防止に係る農薬登録保留基準の設定

環境大臣は、旧農薬取締法に基づき、ブロフラニリドの水産動植物の被害防止に係る農薬 登録保留基準を以下のとおり設定し、令和元年 5 月 10 日に告示した(令和元年環境省告示第 2 号)。

農薬登録保留基準値 0.016 μg/L

(参照) 水産動植物の被害防止に係る農薬登録保留基準について

(URL: http://www.env.go.jp/water/sui-kaitei/kijun.html)

1.3.4 水質汚濁に係る農薬登録保留基準の設定

環境大臣は、旧農薬取締法に基づき、ブロフラニリドの水質汚濁に係る農薬登録保留基準を以下のとおり設定し、令和2年3月3日に告示した(令和2年環境省告示第23号)。

農薬登録保留基準値 0.045 mg/L

(参照) 水質汚濁に係る農薬登録保留基準について

(URL: http://www.env.go.jp/water/dojo/noyaku/odaku_kijun/kijun.html)

1.3.5 農薬登録保留要件(旧農薬取締法第3条第1項)との関係

ブロフレア SC 及びブロフレア 20SC について、以下のとおり旧農薬取締法第3条第1項各号に該当する事例は、認められなかった。

- (1) 申請書の記載事項に虚偽の事実はなかった(第3条第1項第1号)。
- (2)申請書に記載された使用方法及び使用上の注意事項に従い上記農薬を使用する場合、 対象作物、周辺作物及び後作物に薬害を生じるおそれはないと判断した(第3条第1項 第2号)。
- (3) 申請書に記載された使用方法及び使用時安全に係る注意事項に従い上記農薬を使用する場合、使用者に危険を及ぼすおそれはないと判断した(第3条第1項第3号)。
- (4) 申請書に記載された使用方法及び使用上の注意事項に従い上記農薬を使用する場合、 農薬の作物残留の程度及び食品からの摂取量からみて、消費者の健康に影響を及ぼすお それはないと判断した(第3条第1項第4号)。
- (5) 申請書に記載された使用方法に従い上記農薬を使用する場合、農薬の土壌残留の程度 からみて、後作物への残留が生じて消費者の健康に影響を及ぼすおそれはないと判断し た(第3条第1項第5号)。
- (6) 申請書に記載された使用方法、使用上の注意事項及び水産動植物に係る注意事項に従い上記農薬を使用する場合、農薬の公共用水域の水中における予測濃度からみて、水産動植物への被害が著しいものとなるおそれはないと判断した(第3条第1項第6号)。
- (7) 申請書に記載された使用方法及び使用上の注意事項に従い上記農薬を使用する場合、 農薬の公共用水域の水中における予測濃度及び魚介類中の推定残留濃度からみて、消費 者の健康に影響を及ぼすおそれはないと判断した(第3条第1項第7号)。
- (8) 上記農薬の名称は、主成分及び効果について誤解を生じるおそれはないと判断した (第3条第1項第8号)。
- (9) 申請書に記載された使用方法に従い上記農薬を使用する場合、薬効は認められると判断した(第3条第1項第9号)。
- (10) 上記農薬には、公定規格は定められていない(第3条第1項第10号)。

2. 登録の決定

農林水産大臣は、旧農薬取締法に基づき、ブロフレア SC(ブロフラニリド 5.0 %水和剤)及びブロフレア 20SC(ブロフラニリド 20.0 %水和剤)を令和 2 年 9 月 14 日に以下のとおり登録した。

ブロフレア SC

登録番号

第 24422 号

農薬の種類及び名称

種類 ブロフラニリド水和剤

名称 ブロフレアSC

物理的化学的性状

黄色水和性粘稠懸濁液体

有効成分の種類及び含有量

N-[2-ブロモ-4-(ペルフルオロプロパン-2-イル)-6-(トリフルオロメチル)フェニル]-2-フルオロ-3-(*N*-メチルベンズアミト゛)ベンス゛アミト゛

..... 5.0 %

その他の成分の種類及び含有量

水、界面活性剤等

..... 95.0 %

適用病害虫の範囲及び使用方法

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ブロフラニリト を含む 農薬の総使用回数
キャベツ	コナカ゛ アオムシ ハスモンヨトウ ヨトウムシ オオタハ゛コカ゛ ウワハ゛類 ハイマタ゛ラノメイカ゛	2000~	100~	収穫前日	3 回以内	散布	3 回以内
はくさい	コナカ゛ アオムシ ハスモンヨトウ ヨトウムシ オオタハ゛コカ゛ ハイマタ゛ラノメイカ゛	4000 倍	300 L/10 a	まで			

だいこん かぶ ブロッコリー カリフラワー 非結球薬類 レタス 非結球レタス ねぎ えだまめ	コトウムシ ハイマダ・ラノメイカ・ キスジ・ラハハ・チ アオムシ コナカ・ コナカ・ アオムショトウムシ オオタハ・コカ・ アオムショトウムシ オオタハ・コカ・ アオムショトウムション・ アオムション・ アオーション・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カワハ・コカ・ カロー カスモンヨトウ オオタハ・コカ・ オオタハ・コカ・ オオタハ・コカ・ オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オスショトウ オオタハ・コカ・ オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー オオタハ・コカ・ カロー カロー カロー カロー カロー カロー カロー カロー カロー カロー	2000~ 4000 倍	100∼ 300 L/10 a	収穫前日	3 回以内	散布	3 回以内
えだまめ	ハスモンヨトウ オオタハ゛コカ゛						
かんしょ	ハスモンヨトウ ナカシ゛ロシタハ゛ ハスモンヨトウ オオタハ゛コカ゛			発生初期			

使用上の注意事項

- 1) 使用前によく振ってから使用すること。
- 2) 使用量に合わせ薬液を調製し、使いきること。
- 3) 使用液量は対象作物の生育段階、栽培形態及び使用方法に合わせて調節すること。
- 4) みずかけな(水掛菜)に使用する場合は、ほ場内に水がない状態で使用すること。また、使用後14日間は入水しないこと。
- 5) 蚕に対して影響があるので、周辺の桑葉にはかからないようにすること。
- 6) ミツバチに対して影響があるので、以下のことに注意すること。
 - ①ミツバチの巣箱及びその周辺にかからないようにすること。
 - ②関係機関(都道府県の農薬指導部局や地域の農業団体等)に対して、周辺で養蜂が行われているかを確認し、養蜂が行われている場合は、関係機関へ農薬使用に係る情報を提供し、ミツバチの危害防止に努めること。
- 7) 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬害の有無を十分確認してから使用すること。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

人畜に有毒な農薬については、その旨及び解毒方法 通常の使用方法ではその該当がない。

水産動植物に有毒な農薬については、その旨

- 1) 水産動植物 (甲殻類) に影響を及ぼすおそれがあるので、河川、養殖池等に飛散、流入しないよう注意して使用すること。
- 2) 使用残りの薬液が生じないように調製を行い、使いきること。散布器具及び容器の洗 浄水は、河川等に流さないこと。また、空容器等は水産動植物に影響を与えないよう 適切に処理すること。

引火し、爆発し、又は皮膚を害する等の危険のある農薬については、その旨 通常の使用方法ではその該当がない。

貯蔵上の注意事項

直射日光をさけ、なるべく低温な場所に密栓して保管すること。

販売する場合にあっては、その販売に係る容器又は包装の種類及び材質並びに内容量 100 mL、250 mL、500 mL 各ポリエチレン瓶入り 1 L、5 L 各ポリエチレン缶入り

ブロフレア 20SC

登録番号

第 24423 号

農薬の種類及び名称

種類 ブロフラニリド水和剤 名称 ブロフレア20SC

物理的化学的性状

淡黄色水和性粘稠懸濁液体

有効成分の種類及び含有量

N-[2-ブロモ-4-(ペルフルオロプロパソ-2-イル)-6-(トリフルオロメチル)フェニル]-2-フルオロ-3-(*N*-メチルベソズアミト゛)ベソス゛アミト゛

その他の成分の種類及び含有量

..... 20.0 %

適用病害虫の範囲及び使用方法

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ブロフラニリト を含む 農薬の総使用回数
キャベツ	ハスモンヨトウ	8000~ 16000 倍	100∼ 300 L/10 a	収穫前日 まで	3 回以内	散布	3 回以内

使用上の注意事項

- 1) 使用前によく振ってから使用すること。
- 2) 使用量に合わせ薬液を調製し、使いきること。
- 3) 使用液量は対象作物の生育段階、栽培形態及び使用方法に合わせて調節すること。
- 4) 蚕に対して影響があるので、周辺の桑葉にはかからないようにすること。
- 5) ミツバチに対して影響があるので、以下のことに注意すること。
 - ①ミツバチの巣箱及びその周辺にかからないようにすること。
 - ②関係機関(都道府県の農薬指導部局や地域の農業団体等)に対して、周辺で養蜂が行われているかを確認し、養蜂が行われている場合は、関係機関へ農薬使用に係る情報を提供し、ミツバチの危害防止に努めること。
- 6) 本剤の使用に当っては使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

人畜に有毒な農薬については、その旨及び解毒方法

本剤は皮膚に対して弱い刺激性があるので皮膚に付着しないよう注意すること。付着した場合には直ちに石けんでよく洗い落とすこと。

水産動植物に有毒な農薬については、その旨

- 1) 水産動植物(甲殻類)に影響を及ぼすおそれがあるので、河川、養殖池等に飛散、流入しないよう注意して使用すること。
- 2) 使用残りの薬液が生じないように調製を行い、使いきること。散布器具及び容器の洗 浄水は、河川等に流さないこと。また、空容器等は水産動植物に影響を与えないよう 適切に処理すること。

引火し、爆発し、又は皮膚を害する等の危険のある農薬については、その旨 通常の使用方法ではその該当がない。

貯蔵上の注意事項

直射日光をさけ、なるべく低温な場所に密栓して保管すること。

販売する場合にあっては、その販売に係る容器又は包装の種類及び材質並びに内容量 100 mL、250 mL、500 mL 各ポリエチレン瓶入り

1L、5L 各ポリエチレン缶入り

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 1. 審査報告書の対象農薬及び作成目的

II. 審查報告

1. 審査報告書の対象農薬及び作成目的

1.1 審査報告書作成の目的

本審査報告書は、新規有効成分ブロフラニリドを含む製剤の登録に当たって実施した審査結果をとりまとめた。

1.2 有効成分

1.2.1 申請者 三井化学アグロ株式会社

1.2.2 登録名 ブロフラニリド

2-フルオロ-3-(*N*-メチルヘンス、アミト、)へ、ンス、アミト、

1.2.3 一般名 broflanilide (ISO)

1.2.4 化学名

IUPAC名: N-[2-bromo-4-(perfluoropropan-2-yl)-6-(trifluoromethyl)phenyl]-

2-fluoro-3-(N-methylbenzamido)benzamide

CAS名: 3-(benzoylmethylamino)-N-[2-bromo-4-[1,2,2,2-tetrafluoro-

1-(trifluoromethyl)ethyl]-6-(trifluoromethyl)phenyl]-2-fluorobenzamide

(CAS No. 1207727-04-5)

1.2.5 コード番号 MCI-8007、MLP-8607、BAS 450 I、LS5672774、Reg.No.5672774

1.2.6 分子式、構造式、分子量

分子式 C₂₅H₁₄BrF₁₁N₂O₂

構造式

分子量 663.29

1.2.7 農薬原体中の有効成分の含有濃度

990 g/kg 以上

(参照) ブロフラニリドの農薬原体の組成に係る評価報告書(令和2年6月23日 農業資材 審議会農薬分科会検査法部会(第8回))

(URL: https://www.maff.go.jp/j/council/sizai/kensahou/08/attach/pdf/summary-1.pdf)

1.3 製剤

1.3.1 申請者

三井化学アグロ株式会社

1.3.2 名称及びコード番号

名称 コード番号

ブロフレアSC MIE-1209フロアブル、RSA/FL-05E ブロフレア20SC MIE-1405フロアブル、RSA/FL-20B

1.3.3 製造者

三井化学アグロ株式会社

(製造場)

ブロフレア SC、ブロフレア 20SC

宇都宮化成工業株式会社 新城工場 宇都宮化成工業株式会社 船岡工場 宇都宮化成工業株式会社 宇都宮工場

1.3.4 剤型

水和剤

1.3.5 用途

殺虫剤

1.3.6 組成

ブロフレア SC

ブロフラニリド		5.0 %
水、界面活性剤	等	95.0 %

ブロフレア 20SC

ブロフラニリド		20.0 %
水、界面活性剤	等	80.0 %

1.4 農薬の使用方法

1.4.1 使用分野

農業用

1.4.2 適用害虫への効果

ブロフラニリドはチョウ目、コウチュウ目、ハチ目等の害虫に対して高い活性を示す殺虫剤であり、神経細胞の GABA 受容体に作用してクロライドイオンの神経細胞への流入を阻害することで殺虫効果を示すと考えられており、IRAC (Insecticide Resistance Action Committee) によりメタジアミド系 (30) に分類されている。

1.4.3 申請された内容の要約

ブロフレア SC (ブロフラニリド 5.0 %水和剤)

適用作物 適用害虫

キャベツ コナガ、アオムシ、ハスモンヨトウ、ヨトウムシ、オオタバ

コガ、ウワバ類、ハイマダラノメイガ

はくさい
コナガ、アオムシ、ハスモンヨトウ、ヨトウムシ、オオタバ

コガ、ハイマダラノメイガ

だいこん コナガ、ヨトウムシ、ハイマダラノメイガ、キスジノミハム

シ、カブラハバチ、アオムシ

かぶ コナガ

ブロッコリー コナガ、アオムシ、ハスモンヨトウ、ヨトウムシ、オオタバ

コガ

カリフラワー コナガ、アオムシ

非結球あぶらな科葉菜類 コナガ、アオムシ、キスジノミハムシ

 レタス
 ハスモンヨトウ、ヨトウムシ、オオタバコガ、ウワバ類

 非結球レタス
 ハスモンヨトウ、ヨトウムシ、オオタバコガ、ウワバ類

 ねぎ
 ネギコガ、シロイチモジョトウ

 えだまめ
 ハスモンヨトウ、オオタバコガ

 かんしょ
 ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ

 きく
 ハスモンヨトウ、オオタバコガ

ブロフレア 20SC (ブロフラニリド 20.0 %水和剤)

適用作物 適用害虫

キャベツ ハスモンヨトウ

1.4.4 諸外国における登録に関する情報

令和2年9月現在、韓国及びコロンビアで登録されている。

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

2. 審査結果

2.1 農薬の基本情報

2.1.1 農薬の基本情報

有効成分及び製剤の識別に必要な項目のすべてについて妥当な情報が提供された。

2.1.2 物理的·化学的性状

2.1.2.1 有効成分の物理的・化学的性状

表 2.1-1: 有効成分の物理的・化学的性状試験の結果概要

		試験項目	試験方法	試験結果		
色調・形状・臭気			官能法	白色・粉末・無臭(20 ℃)		
密度			OECD 109 比重びん法	1.66 g/cm ³ (23 °C)		
		融点 OECD 102 キャピラリー法		154∼156 ℃		
		沸点	OECD 103 Siwoloboff 法	測定不能 (約 180 ℃以上で分解するため)		
		蒸気圧	OECD 104 蒸気圧天秤法	9×10 ⁻⁹ Pa (25 °C)		
		熱安定性	OECD 113 DSC 法	150~160 ℃で融解		
	水		OECD 105 カラム溶出法	7.1×10 ⁻⁴ g/L (20 ℃、精製水) 2.8×10 ⁻⁴ g/L (20 ℃、pH 4) 5.1×10 ⁻⁴ g/L (20 ℃、pH 7) 3.6×10 ⁻³ g/L (20 ℃、pH 10)		
溶	有機溶	n-ヘプタン	フラスコ法	9.6×10⁻² g/L (20 °C)		
***		キシレン		6.0 g/L (20 °C)		
解		1,2-ジクロロエタン		110 g/L (20 °C)		
度		メタノール		>250 g/L (20 °C)		
	媒	アセトン		>250 g/L (20 °C)		
		酢酸エチル		>250 g/L (20 °C)		
		n-オクタノール		7.4 g/L (20 °C)		
	解離定数 (pKa)		as to the state of		OECD 112 分光光度法	8.8 (20 °C)
	オクタノール/水分配係数 OECD 107 (log Pow) フラスコ振とう法			5.2 (20 °C、pH 4) 5.2 (20 °C、pH 7) 4.4 (20 °C、pH 10)		
		加水分解性	12 農産第 8147 号	安定 (50℃、5日間、pH 4、7、9)		
	水中光分解性 12 農産第 8147 号		12 農産第 8147 号	34∼52 ∃ (pH 7、25 °C、44∼49 W/m²、300∼400 nm)		

2.1.2.2 製剤の物理的・化学的性状

ブロフレア SC (ブロフラニリド 5.0 %水和剤)

本製剤の代表的ロットを用いた試験結果を表 2.1-2 に示す。

	7 1 - 1	7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7
試験項目	試験方法	試験結果
外観	13 生産第 3987 号 官能検査	黄色粘稠懸濁液体
原液安定性	昭和 35 年 2 月 3 日 農林省告示第 71 号	室温、72 時間放置後、沈殿、分離は認められない。 -5 ℃、72 時間放置後、外観、性状に変化はない。
希釈液安定性	昭和 35 年 2 月 3 日 農林省告示第 71 号	沈殿、分離は認められない。
比重	比重びん法 (JIS K0061)	1.039 (20 ℃)
粘度	B 型粘度計 ローター No.2 30 rpm	504 mPa s (20 °C)
懸垂率	昭和 35 年 2 月 3 日 農林省告示第 71 号	99.3 % 15 分後懸濁液中には油状物、沈殿などは認められない。
pН	昭和 35 年 2 月 3 日 農林省告示第 71 号	6.78 (1 %水溶液)

表 2.1-2: ブロフレア SC の物理的・化学的性状試験の結果概要

ブロフレア 20SC (ブロフラニリド 20.0 %水和剤)

本製剤の代表的ロットを用いた試験結果を表 2.1-3 に示す。

表 2.1-3:フロ	ロフレア	20SC の物理的	• 11	2字的性状試験の結果概要

試験項目	試験方法	試験結果		
外観	13 生産第 3987 号 官能検査	淡黄色粘稠懸濁液体		
原液安定性	昭和 35 年 2 月 3 日 農林省告示第 71 号	室温、72 時間放置後、沈殿、分離は認められない。 -5 ℃、72 時間放置後、外観、性状に変化はない。		
希釈液安定性	昭和 35 年 2 月 3 日 農林省告示第 71 号	沈殿、分離は認められない。		
比重	比重瓶法 (JIS K0061)	1.128 (20 °C)		
粘度	B 型粘度計 ローター No.2 30 rpm	403 mPa s (20 °C)		
懸垂率	昭和 35 年 2 月 3 日 農林省告示第 71 号	99.7 % 15 分後懸濁液中には油状物、沈殿などは認められない。		
pН	昭和 35 年 2 月 3 日 農林省告示第 71 号	6.81 (1 %水溶液)		

2.1.2.3 製剤の経時安定性

ブロフレア SC

40 ℃における 3 か月間の経時安定性試験の結果、有効成分の減衰、製剤の外観及び容器の 状態に変化は認められなかった。40 ℃における 1 か月間は、室温における 1 年間と同等とし ており、本剤が室温において 3 年間は安定であると判断した。

ブロフレア 20SC

40 ℃における 3 か月間の経時安定性試験の結果、有効成分の減衰、製剤の外観及び容器の 状態に変化は認められなかった。40 ℃における 1 か月間は、室温における 1 年間と同等とし ており、本剤が室温において 3 年間は安定であると判断した。

2.1.3 使用方法の詳細

ブロフレア SC

表 2.1-4: ブロフレア SC の「適用病害虫の範囲及び使用方法」

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の	使用方法	ブロフラニリドを含む
1E-1937H		1117VIII 9X	区/川区里	(2/11/4/39)	使用回数	区/11/21公	農薬の総使用回数
	コナカ゛ アオムシ						
	ハスモンヨトウ						
キャベツ	ヨトウムシ						
	オオタハ゛コカ゛						
	ウワバ類						
	ハイマタ゛ラノメイカ゛						
	コナカ゛						
	アオムシ						
はくさい	ハスモンヨトウ						
14 / 6 /	ヨトウムシ						
	オオタハ゛コカ゛						
	ハイマタ゛ラノメイカ゛						
	コナカ゛						
	ヨトウムシ ハイマタ゛ラノメイカ゛						
だいこん	ハイマターフファイル キスシ゛ノミハムシ						
	カブラハバチ						
	アオムシ						
かぶ	コナカ゛						
	コナカ゛						
	アオムシ						
ブロッコリー	ハスモンヨトウ	2000~	100~	収穫前日	3回以内	散布	3 回以内
	ヨトウムシ	4000 倍	300 L/10 a	まで	9 E VI 1	HX-111	0 110111
	オオタハ゛コカ゛						
カリフラワー	コナカ゛						
	アオムシ コナカ゛						
非結球あぶらな科	コナル アオムシ						
葉菜類	ナスシ゛ノミハムシ						
	ハスモンヨトウ						
	ヨトウムシ						
レタス	オオタハ゛コカ゛						
	ウワバ類						
	ハスモンヨトウ						
非結球レタス	ヨトウムシ						
71 Marque 7	オオタハ゛コカ゛						
	ウワバ類						
ねぎ	ネキ゛コカ゛ シロイチモシ゛ ヨトウ						
えだまめ	ハスモンヨトウ						
んによめ	オオタハ゛コカ゛						
かんしょ	ハスモンヨトウ ナカシ゛ロシタハ゛						
	ハスモンヨトウ				1		
きく	オオタハ゛コカ゛			発生初期			

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

ブロフレア 20SC

表 2.1-5: ブロフレア 20SC の「適用病害虫の範囲及び使用方法」

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	ブロフラニリト を含む 農薬の総使用回数
キャベツ	ハスモンヨトウ	8000~ 16000 倍	100~ 300 L/10 a	収穫前日 まで	3回以内	散布	3回以内

2.1.4 分類及びラベル表示

ブロフラニリド

毒劇物:急性毒性試験の結果(2.3.1.2 参照)から、毒物及び劇物取締法(昭和25年法律第303号)による医薬用外劇物に該当しない。

ブロフレア SC

毒劇物:急性毒性試験の結果(2.3.1.10 参照)から、毒物及び劇物取締法による医薬用外劇物に該当しない。

危険物:消防法(昭和23年法律第186号)により危険物として規制されている品目の含有量からみて、危険物の除外規定を満たすことから、同法に規定する危険物に該当しない。

ブロフレア 20SC

毒劇物:急性毒性試験の結果(2.3.1.10 参照)から、毒物及び劇物取締法による医薬用外劇物に該当しない。

危険物:消防法により危険物として規制されている品目の含有量からみて、危険物の除外 規定を満たすことから、同法に規定する危険物に該当しない。

2.2 分析法

2.2.1 原体

ブロフラニリドの農薬原体をアセトニトリル/水に溶解し、オクタデシルシリル化シリカゲル (C₁₈) カラムを用いて高速液体クロマトグラフ (HPLC) によりアセトニトリル/リン酸二水素カリウム水溶液で分離し、紫外吸収 (UV) 検出器 (検出波長 226 nm) によりフロフラニリドを検出及び定量する。定量には内部標準法を用いる。

2.2.2 製剤

製剤中のブロフラニリドはオクタシリル化シリカゲル (C_8) カラムを用いて HPLC により分離し、UV 検出器 (検出波長 254 nm) により検出する。定量には内部標準法を用いる。

ブロフレア SC(ブロフラニリド 5.0 %水和剤) 及びブロフレア 20SC(ブロフラニリド 20.0 %水和剤) について、本分析法の性能は以下のとおりであり、製剤中のブロフラニリドの分析法として妥当であると判断した。

表 2.2-1: ブロフレア SC の分析法の性能

選択性	妨害ピークは認められない
直線性 (r)	1.000
精確性 (平均回収率 (n=5))	100.2 %
繰り返し精度 (RSD (n=5))	0.2 %

表 2.2-2: ブロフレア 20SC の分析法の性能

選択性	妨害ピークは認められない
直線性 (r)	1.000
精確性 (平均回収率 (n=5))	100.1 %
繰り返し精度 (RSD (n=5))	0.4 %

2.2.3 作物

2.2.3.1 分析法

ブロフラニリド、代謝物 B 及び代謝物 C の分析法

分析法①

分析試料をアセトニトリル/水(4/1(v/v))で抽出し、 C_{18} ミニカラムで精製後、液体クロマトグラフタンデム型質量分析計(LC-MS-MS)で定量する。

本分析法のバリデーション結果を表 2.2-3 に示す。作物中のブロフラニリド、代謝物 B 及 び代謝物 C の分析法として、本分析法は妥当であると判断した。

表 2.2-3:作物残留分析法①のバリデーション結果

分析対象	定量限界 (mg/kg)	分析試料	添加濃度 (mg/kg)	分析回数	平均回収率 (%)	RSDr (%)
ブロフラニリド	リド 0.01 かんしょ (塊根)	かんしょ	0.01	8	93	3.0
		0.5	8	96	1.6	

	1	T	1	1	ı	
	0.01	だいこん	0.01	6	93	4.5
	0.01	(根部)	0.5	6	101	1.9
		だい、 ファ	0.01	6	98	7.9
	0.01	だいこん (葉部)	0.5	6	96	2.2
		, ,	5	6	97	1.8
	0.01	かぶ	0.01	6	86	3.3
	0.01	(根部)	0.5	6	92	1.1
		,	0.01	6	105	5.7
	0.01	かぶ (葉部)	0.5	6	96	2.6
		(/NHP)	3	6	94	1.2
	0.01	はくさい	0.01	6	96	2.2
	0.01	(葉球)	0.5	6	95	3.0
	0.01	キャベツ	0.01	6	103	3.3
	0.01	(葉球)	0.5	6	97	3.9
ブロフラニリド		_	0.01	6	98	6.0
	0.01	こまつな (茎葉)	0.5	6	93	2.1
			5	6	107	2.1
	0.01	ブロッコリー (花蕾)	0.01	6	102	7.5
			0.5	6	93	1.8
			1	6	94	2.4
	0.01	レタス (葉球)	0.01	6	103	2.9
			0.5	6	93	1.6
			1	6	93	1.3
			2	6	90	2.2
			0.01	6	104	1.4
	0.01	ねぎ (茎葉)	0.5	6	99	3.9
		(全米)	2	6	95	2.0
	0.01	えだまめ	0.01	6	101	3.6
	0.01	(きや)	0.5	6	88	2.6
	0.01	かんしょ	0.01	8	94	4.1
	0.01	(塊根)	0.5	8	98	1.9
	0.01	だいこん	0.01	6	90	6.6
	0.01	(根部)	0.5	6	101	1.4
代謝物 B	0.01	だいこん	0.01	6	98	3.3
	0.01	(葉部)	0.5	6	100	3.3
	2.25	かぶ	0.01	6	84	2.1
	0.01	(根部)	0.5	6	91	1.3
	0.01	かぶ	0.01	6	100	3.9
	0.01	(葉部)	0.5	6	95	2.5
	•				ē	ē

		,				
	0.01	はくさい (葉球)	0.01	6	89	1.7
	0.01		0.5	6	94	2.6
	0.01	キャベツ	0.01	6	101	4.1
	0.01	(葉球)	0.5	6	99	3.9
	0.01	こまつな	0.01	6	97	2.4
	0.01	(茎葉)	0.5	6	94	1.2
代謝物 B	0.01	ブロッコリー	0.01	6	92	7.3
C1931120 D	0.01	(花蕾)	0.5	6	95	1.7
	0.01	レタス	0.01	6	95	4.8
	0.01	(葉球)	0.5	6	93	1.0
	0.01	ねぎ	0.01	6	97	4.2
	0.01	(茎葉)	0.5	6	95	2.6
	0.01	えだまめ	0.01	6	110	3.8
	0.01	(さや)	0.5	6	87	2.3
	0.01	かんしょ	0.01	8	94	1.7
	0.01	(塊根)	0.5	8	95	1.7
	0.01	だいこん (根部)	0.01	6	102	2.7
	0.01		0.5	6	101	1.6
	0.01	だいこん (葉部)	0.01	6	95	2.1
	0.01		0.5	6	95	2.0
	0.01	かぶ (根部)	0.01	6	88	4.0
	0.01		0.5	6	93	1.7
	0.01	かぶ (葉部)	0.01	6	92	3.7
	0.01		0.5	6	94	1.8
	0.01	はくさい (葉球)	0.01	6	96	3.1
代謝物 C	0.01		0.5	6	94	2.8
\1001 100 C	0.01	キャベツ	0.01	6	103	5.2
	0.01	(葉球)	0.5	6	99	1.9
	0.01	こまつな	0.01	6	92	0.9
	0.01	(茎葉)	0.5	6	95	1.6
	0.01	ブロッコリー	0.01	6	95	7.8
	0.01	(花蕾)	0.5	6	96	2.7
	0.01	レタス	0.01	6	102	2.4
	0.01	(葉球)	0.5	6	94	1.8
	0.01	ねぎ	0.01	6	113	1.7
	0.01	(茎葉)	0.5	6	100	4.4
	0.01	えだまめ	0.01	6	105	6.4
	0.01	(さや)	0.5	6	91	3.1

分析法②

分析試料をアセトニトリル/水(4/1(v/v))で抽出し、多孔性ケイソウ土カラムを用いて酢酸エチルに転溶し、ベンゼンスルホニルプロピルシリル化シリカゲル(SCX)ミニカラムで精製後、LC-MS-MSで定量する。

本分析法のバリデーション結果を表 2.2-4 に示す。作物中のブロフラニリド、代謝物 B 及 び代謝物 C の分析法として、本分析法は妥当であると判断した。

表 2.2-4: 作物残留分析法②のバリデーション結果

分析対象	定量限界 (mg/kg)	分析試料	添加濃度 (mg/kg)	分析回数	平均回収率 (%)	RSDr (%)
	\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \		0.01	5	91	7.6
	0.01	だいこん (つまみ菜* ¹)	0.5	5	83	5.4
		() よ の 未)	4	5	90	6.6
			0.01	5	85	6.0
	0.01	だいこん (間引き菜 ^{*2})	0.5	5	88	3.7
		(向力で来)	2	5	90	0.9
			0.01	6	90	7.3
	0.01	たかな (茎葉)	0.5	6	97	4.8
		(至未)	5	6	97	6.5
ブロフラニリド			0.01	6	86	9.4
	0.01	みずな (茎葉)	0.5	6	84	7.0
			5	6	84	4.0
	0.01	サラダ菜 (茎葉)	0.01	6	90	19
			0.5	6	84	6.1
			10	6	92	4.0
	0.01	リーフレタス (茎葉)	0.01	5	89	4.6
			0.5	5	89	2.9
			3	5	81	2.7
		だいこん	0.01	5	90	3.2
	0.01	(つまみ菜*1)	0.5	5	81	2.6
	0.01	だいこん	0.01	5	89	3.7
	0.01	(間引き菜*²)	0.5	5	91	5.3
/上部+Hm D	0.01	たかな	0.01	6	96	5.2
代謝物 B	0.01	(茎葉)	0.5	6	96	5.1
	0.01	みずな	0.01	6	88	8.1
	0.01	(茎葉)	0.5	6	86	9.2
	0.01	サラダ菜	0.01	6	76	6.3
	0.01	(茎葉)	0.5	6	83	6.7

/₽⇒₩ D	0.01	リーフレタス	0.01	5	83	9.2
代謝物 B	0.01	(茎葉)	0.5	5	88	2.8
	0.01	だいこん	0.01	5	79	9.5
	0.01	(つまみ菜*1)	0.5	5	83	8.4
	0.01	だいこん	0.01	5	79	8.2
	0.01	(間引き菜*2)	0.5	5	76	4.0
	0.01	たかな (茎葉)	0.01	6	87	8.8
代謝物 C			0.5	6	101	8.2
1 (1931 140) C	0.01 みずな (茎葉)	みずな	0.01	6	88	5.7
		(茎葉)	0.5	6	92	4.7
	0.01	サラダ菜	0.01	6	83	4.6
	0.01	(茎葉)	0.5	6	82	5.6
	リーフレタス (茎葉)	リーフレタス	0.01	5	88	10
		0.5	5	88	2.5	

^{*1:}本葉 1.5~2 葉期の茎葉(根を含む) *2:本葉 4~5 葉期の茎葉(根を含む)

2.2.3.2 保存安定性

かんしょ、だいこん、かぶ、はくさい、キャベツ、ブロッコリー、こまつな、たかな、みず な、レタス、リーフレタス、サラダ菜、ねぎ及びえだまめを用いて実施した-20℃におけるブ ロフラニリド、代謝物 B 及び代謝物 C の保存安定性試験の報告書を受領した。

試験には粉砕試料を用いた。分析法は2.2.3.1に示した作物残留分析法を用いた。

結果を表 2.2-5 に示す。残存率は添加回収率による補正を行っていない。

いずれの試料についても、ブロフラニリド、代謝物 B 及び代謝物 C は安定(≧70%)であ った。

作物残留試験における各試料の保存期間には、保存安定性試験における保存期間を超える ものはなかった。

表 2.2-5: 作物試料中における保存安定性試験の結果概要

分析対象	試料名	添加濃度 (mg/kg)	保存期間 (日)	残存率 (%)	添加回収率*1 (%)	作物残留試験にお ける最長保存期間 (日)
	かんしょ (塊根)	0.5	93	104	97	86
	だいこん (根部)	0.5	206	102	95	169
ブロフラニリド	だいこん (葉部)	0.5	206	104	86	169
7477-91	だいこん (つまみ菜*²)	0.5	58	94	85	51
	だいこん (間引き菜*³)	0.5	42	89	91	36
	かぶ (根部)	0.5	99	96	115	91

						T
	かぶ (葉部)	0.5	99	96	102	91
	はくさい (葉球)	0.5	236	99	103	186
	キャベツ (葉球)	0.5	129	99	95	93
	こまつな (茎葉)	0.5	79	104	109	60
	たかな (茎葉)	0.5	76	90	100	71
	みずな (茎葉)	0.5	34	90	97	34
ブロフラニリド	ブロッコリー (花蕾)	0.5	226	94	102	143
	レタス (葉球)	0.5	329	92	107	320
	サラダ菜 (茎葉)	0.5	39	88	95	18
	リーフレタス (茎葉)	0.5	34	84	89	20
	ねぎ (茎葉)	0.5	204	89	100	132
	えだまめ (さや)	0.5	51	94	103	43
	かんしょ (塊根)	0.5	93	90	97	86
	だいこん (根部)	0.5	188	102	91	169
	だいこん (葉部)	0.5	188	91	89	169
	だいこん (つまみ菜*²)	0.5	58	90	96	51
	だいこん (間引き菜* ³)	0.5	42	85	104	36
	かぶ (根部)	0.5	99	88	119	91
	かぶ (葉部)	0.5	99	90	101	91
代謝物 B	はくさい (葉球)	0.5	216	100	102	186
	キャベツ (葉球)	0.5	129	97	95	93
	こまつな (茎葉)	0.5	79	98	107	60
	たかな (茎葉)	0.5	76	84	90	71
	みずな (茎葉)	0.5	34	93	99	34
	ブロッコリー (花蕾)	0.5	195	94	106	143
	レタス (葉球)	0.5	329	96	98	320
	サラダ菜 (茎葉)	0.5	39	90	93	18

	リーフレタス (茎葉)	0.5	34	82	91	20
代謝物 B	ねぎ (茎葉)	0.5	169	96	108	132
	えだまめ (さや)	0.5	51	88	105	43
	かんしょ (塊根)	0.5	93	90	106	86
	だいこん (根部)	0.5	176	93	96	169
	だいこん (葉部)	0.5	176	92	83	169
	だいこん (つまみ菜 ^{*2})	0.5	58	84	82	51
	だいこん (間引き菜*³)	0.5	42	84	87	36
	かぶ (根部)	0.5	99	88	107	91
	かぶ (葉部)	0.5	99	93	98	91
	はくさい (葉球)	0.5	188	96	101	186
代謝物 C	キャベツ (葉球)	0.5	129	97	97	93
(M112) C	こまつな (茎葉)	0.5	79	93	99	60
	たかな (茎葉)	0.5	76	108	100	71
	みずな (茎葉)	0.5	34	89	97	34
	ブロッコリー (花蕾)	0.5	167	97	104	143
	レタス (葉球)	0.5	329	96	97	320
	サラダ菜 (茎葉)	0.5	39	88	94	18
	リーフレタス (茎葉)	0.5	34	82	89	20
	ねぎ (茎葉)	0.5	141	102	102	132
	えだまめ (さや)	0.5	51 E (根を今ta)	92	114~~5 笹地の支き	43

2.2.4 土壌

2.2.4.1 分析法

ブロフラニリド、代謝物 C 及び代謝物 D の分析法

土壌試料をアセトニトリル/水 (7/3 (v/v)) 及びアセトニトリル/0.5 M 塩酸 (7/3 (v/v)) で 抽出し、スチレンジビニルベンゼンポリマーゲルミニカラムで精製後、LC-MS-MS で定量す

本分析法のバリデーション結果を表 2.2-6 に示す。畑地土壌中のブロフラニリド、代謝物 C 及び代謝物Dの分析法として、本分析法は妥当であると判断した。

^{*1:}添加濃度は 0.1 mg/kg *2:本葉 1.5~2 葉期の茎葉(根を含む) *3:本葉 4~5 葉期の茎葉(根を含む)

分析対象	定量限界 (mg/kg)	分析試料	添加濃度 (mg/kg)	分析回数	平均回収率 (%)	RSDr (%)		
	(mg/kg)		0.002	3	100	11		
		火山灰壤土	0.1	3	90	6.1		
ブロフラニリド	0.002		0.6	3	102	3.1		
ノロノノニット	0.002		0.002	3	98	1.8		
		沖積壌土	0.1	3	102	2.0		
			0.3	3	103	3.0		
	0.002	火山灰壤土	0.002	3	86	13		
代謝物 C			0.1	3	94	3.2		
1 (1811-17) C	0.002	沖積壌土	0.002	3	98	11		
		1171月1表上	0.1	3	104	4.8		
		火山灰壌土	0.002	3	88	16		
代謝物 D	0.002	八 四 次 集 工	0.1	3	92	4.4		
1 (193145) D	0.002	沖積壌土	0.002	3	85	7.2		
		177溴农工	0.1	3	102	6.4		

表 2.2-6: 土壌分析法のバリデーション結果

2.2.4.2 保存安定性

土壌残留試験では火山灰壌土及び沖積壌土の抽出液が 4℃で保存されており、各土壌の抽 出液を用いて実施した4℃におけるブロフラニリド、代謝物C及び代謝物Dの保存安定性試 験の報告書を受領した。

分析法は2.2.4.1に示した土壌分析法を用いた。

試験結果の概要を表 2.2-7 に示す。いずれの試料についても、ブロフラニリド、代謝物 C 及 び代謝物 D は安定 (≥70%) であった。

土壌残留試験におけるブロフラニリド、代謝物 C 及び代謝物 D の分析に用いた抽出液の保 存期間には、保存安定性試験における保存期間を超えるものはなかった。

表 2.2-7: 土壌	表 2.2-7: 土壌抽出液中における保存安定性試験の結果概要									
分析対象	分析試料	添加濃度 (mg/kg)	保存期間 (日)	残存率 (%)	添加回収率 (%)	土壌残留試験における 最長保存期間 (日)				
ブロフラニリド	火山灰壤土	0.1	174	94	1	174				
プログノニット	沖積壤土	0.1	174	93	ı	174				
代謝物 C	火山灰壤土	0.1	174	94	1	174				
1、耐物 C	沖積壌土	0.1	174	102	1	174				
代謝物 D	火山灰壤土	0.1	174	86	- 1	174				
	沖積壤土	0.1	174	89	_	174				

2.3 ヒト及び動物の健康への影響

2.3.1 ヒト及び動物の健康への影響

2.3.1.1 動物代謝

アニリンのベンゼン環の炭素を 14 C で均一に標識したブロフラニリド(以下「[b-ben- 14 C]ブロフラニリド」という。)及び安息香酸のベンゼン環の炭素を 14 C で均一に標識したブロフラニリド(以下「[c-ben- 14 C]ブロフラニリド」という。)を用いて実施した動物代謝試験の報告書を受領した。

放射性物質濃度及び代謝物濃度は、特に断りがない場合には、ブロフラニリド換算で表示した。

*:14C 標識の位置

食品安全委員会による評価(URL:

http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026) を以下(1)に転記する。

(1) ラット

① 吸収

a. 血中濃度推移(単回投与)

Wistar Hannover ラット(一群雌雄各 4 匹)に[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリドを 5 mg/kg 体重(以下 [2.3.1.1(1)] において「低用量」という。)で単回経口投与若しくは 1.6 mg/kg 体重で単回静脈内投与、又は[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリドを低用量若しくは 500 mg/kg 体重(以下 [2.3.1.1(1)] において「高用量」という。)で単回経口投与して、血中濃度推移について検討された。

全血及び血漿中薬物動態学的パラメータは表 2.3-1 に示されている。

単回経口投与後の全血及び血漿中放射能は、 $[b-ben-^{14}C]$ ブロフラニリド投与群では投与 $4\sim12$ 時間後、 $[c-ben-^{14}C]$ ブロフラニリド投与群では投与 $0.5\sim2$ 時間後に C_{max} に達した。 C_{max} 及び AUC_t について用量比に応じた増加は認められなかった。

 AUC_t の全血/血漿中放射能濃度比は $0.14\sim0.76$ と算出された。

単回静脈内投与において、AUC_tの全血/血漿中放射能濃度比は 0.72~0.78 と算出された。投与放射能の血中動態について、単回経口投与群との顕著な差は認められなか

った。

表 2.3-1: 全血及び血漿中薬物動態学的パラメータ

	標識体	[b	[b-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド				[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド		
試	投与経路	単回経	口投与	単回静服	派内投与		単回経	口投与	
料	投与量	5 mg/k	g体重	1.6 mg/	kg体重	5 mg/k	g体重	500 mg/	kg体重
	性別	雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌
	T _{max} (hr)	4	12	0.25	0.25	2	1	1	0.5
全	$C_{max}\left(\mu g/g\right)$	0.132	0.095	0.973	0.667	0.135	0.271	2.18	2.29
血	T _{1/2} (hr)	52.4	(107)	59.1	(115)	(51.8)	44.2	(9.2)	(8.4)
	$AUC_t (hr \mu g/g)$	6.09	7.30	16.0	17.7	4.37	7.80	17.0	15.6
	T _{max} (hr)	4	4	0.25	0.25	2	1	1	0.5
<u>ш</u> .	$C_{max}\left(\mu g/g\right)$	0.223	0.148	1.69	1.30	0.230	0.470	3.25	3.32
漿	T _{1/2} (hr)	(78.5)	62.0	45.7	75.3	45.4	42.0	(57.5)	(10.1)
	$AUC_t \left(hr \ \mu g/g \right)$	10.2	9.61	22.2	22.8	7.67	12.9	120	23.9

注)()内の数字は、パラメータ算出に係る許容基準を満たしていない。

AUCt: 定量可能な最終採取時点までの AUC

b. 血中濃度推移(反復経口投与)

Wistar Hannover ラット(一群雌雄各 4 匹)に、[b-ben-14C]ブロフラニリドを低用量で14日間反復経口投与して、血中濃度推移について検討された。

全血及び血漿中薬物動態学的パラメータは表 2.3-2 に示されている。

全血及び血漿中放射能は、投与 4 時間後に C_{max} となり、投与放射能の血中動態に顕著な性差は認められなかった。 AUC_t の全血/血漿中放射能濃度比は $1.0\sim1.1$ と算出され、投与放射能は血漿及び赤血球中に均等に分布すると考えられた。

表 2.3-2: 全血及び血漿中薬物動態学的パラメータ

	標識体	[b-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリド	
試料	投与量	5 mg/kg/体重		
	性別	雄	雌	
	T _{max} (hr)	4	4	
全血	C _{max} (µg/g)	0.353	0.405	
+	T _{1/2} (hr)	(110)	(149)	
	AUC _t (hr g/g)	24.5	34.3	
	T _{max} (hr)	4	4	
血漿	C _{max} (µg/g)	0.503	0.426	
皿架	T _{1/2} (hr)	(45.9)	34.7	
	AUC _t (hr μg/g)	23.8	31.2	

注)()内の数字は、パラメータ算出に係る許容基準を満たしていない。

AUCt: 定量可能な最終採取時点までの AUC

c. 吸収率

胆汁中排泄試験 [2.3.1.1(1)④c.] における胆汁、尿、ケージ洗浄液、肝臓及びカーカス*中放射能の合計から、投与後 48 時間の吸収率は、[b-ben- 14 C]ブロフラニリド投与群では $16.3\%\sim22.9\%$ 、[c-ben- 14 C]ブロフラニリド投与群では低用量投与群で $14.2\%\sim18.8\%$ 、高用量投与群で 2.27% と算出された。

* 組織・臓器を取り除いた残渣のことをカーカスという(以下同じ。)。

② 分布

a. 分布(単回経口投与①)

Wistar Hannover ラット (一群雌雄各 8 匹) に[b-ben- 14 C]ブロフラニリドを低用量又は [c-ben- 14 C]ブロフラニリドを高用量で単回経口投与して、体内分布試験が実施された。 主要臓器及び組織における残留放射能濃度は表 2.3-3 に示されている。

残留放射能の分布に、標識体及び性別の違いによる顕著な差は認められなかった。 いずれの標識体投与群においても、残留放射能濃度は腹部脂肪、副腎、甲状腺、肝臓、 膵臓、精巣上体及び卵巣で比較的高く認められた。

[b-ben- 14 C]ブロフラニリド投与群の腹部脂肪、精巣上体及び卵巣中の残留放射能濃度並びに[c-ben- 14 C]ブロフラニリド投与群の腹部脂肪並びに雄の副腎、膵臓、下垂体、精巣及び精巣上体中の残留放射能濃度について、それぞれ T_{max} 付近に比べて、[b-ben- 14 C]ブロフラニリド投与群では投与 24 時間後、[c-ben- 14 C]ブロフラニリド投与群では 8 時間後で高かった。

[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリド投与群では、投与 72 時間後に主要臓器及び組織中の放射能濃度はいずれも減少した。[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリド投与群では、腹部脂肪、膵臓及び精巣上体中の放射能濃度は、いずれも投与 8 時間後に比べて投与 24 時間後で高かった。

表 2.3-3:主要臓器及び組織における残留放射能濃度(µg/g)

標識体	投与量	性別	投与4時間後	投与24時間後	投与72時間後
[b-ben- ¹⁴ C] ブロフラ ニリド	5 mg/kg 体重	雄	甲状腺(2.30)、肝臓(1.66)、膵臓(1.62)、精巣上体(1.12)、カーカス(1.00)、肺(0.838)、腎臓(0.708)、骨髄(0.667)、心臓(0.605)、下垂体(0.450)、血漿(0.403)、骨格筋(0.395)、脾臓(0.304)、精巣(0.273)、全血	腹部脂肪(6.88)、精巣上体(1.56)、副腎(1.40)、膵臓(1.16)、甲状腺(0.881)、カーカス(0.864)、肝臓(0.857)、腎臓(0.427)、肺(0.408)、心臓(0.257)、骨格筋(0.214)、血漿(0.209)、脾臓(0.198)、下垂体(0.197)、骨髄(0.192)、精巣(0.164)、全血(0.136)、脳(0.096)、血球(0.048)	(1.36)、副腎(0.504)、膵臓(0.459)、肝臓(0.412)、カーカス(0.337)、甲状腺(0.329)、腎臓(0.209)、精巣(0.148)、肺(0.148)、心臓(0.083)、脾臓(0.080)、血漿(0.065)、骨髄(0.058)、骨格筋(0.057)、全血

			腹部脂肪(4.14)、副腎(2.50)、	腹部脂肪(10.1)、卵巢(2.18)、	腹部脂肪(4.88)、卵巢
			甲状腺(2.13)、膵臓(1.86)、肝	膵臓(1.66)、カーカス(1.32)、	(0.967)、副腎(0.852)、膵臓
			臓(1.83)、卵巣(1.69)、カーカ	副腎(1.27)、肝臓(1.21)、子宮	(0.738)、子宮(0.649)、肝臓
	-		ス(1.19)、肺(0.946)、腎臓	(0.800)、肺(0.637)、腎臓	(0.576)、カーカス(0.551)、甲
[b-ben- ¹⁴ C] ブロフラ	5	此维	(0.831)、心臓(0.693)、骨格筋	(0.412)、心臓(0.379)、脾臓	状腺(0.515)、肺(0.252)、腎臓
ニリド	mg/kg 体重	此臣	(0.435)、脾臓(0.387)、血漿	(0.301)、血漿(0.228)、全血	(0.231)、心臓(0.166)、脾臓
_ ーット	半里		(0.375)、子宮(0.322)、全血	(0.154)、骨格筋(0.103)、血球	(0.162)、骨髄(0.132)、下垂体
			(0.235)、脳(0.219)、下垂体	(0.055)	(0.093)、血漿(0.092)、全血
			(0.076)、骨(0.065)、血球		(0.076)、脳(0.064)、血球
			(0.048)		(0.054)
			腎臓(13.4)、肝臓(11.3)、副腎	カーカス(51.3)、腹部脂肪	腹部脂肪(32.0)、カーカス
			(6.47)、甲状腺(5.03)、肺	(16.8)、副腎(10.7)、肝臓	(11.3)、副腎(10.0)、精巣上体
			(3.74)、膵臓(3.54)、カーカス	(8.43)、膵臓(5.12)、精巣上体	(7.31)、膵臓(6.53)、肝臓
			(3.54)、血漿(3.40)、腹部脂肪	(4.96)、甲状腺(4.41)、下垂体	(4.75)、甲状腺(4.41)、腎臓
		雄	(3.27)、下垂体(2.97)、心臓	(4.20)、腎臟(4.03)、肺(2.47)、	(2.48)、肺(2.16)、心臓(1.28)、
			(2.81)、全血(2.56)、精巣上体	心臓(2.42)、血漿(1.83)、骨髄	血漿(1.16)、骨格筋(0.975)、
		500	(2.11)、骨髄(1.82)、脾臓	(1.72)、骨格筋(1.44)、脾臟	脾臟(0.963)、全血(0.852)、骨
[c-ben-14C]	500		(1.75)、骨(1.68)、血球(1.55)	(1.28)、全血(1.27)、精巣	髄(0.699)、精巣(0.652)、血球
ブロフラ	mg/kg			(), ()	(0.477)
ニリド	体重				腹部脂肪(17.6)、カーカス
	产生		(6.73)、卵巣(5.18)、甲状腺	腹部脂肪(7.01)、副腎(5.13)、	(12.9)、肝臓(4.98)、副腎
					(4.97)、卵巣(3.84)、膵臓
					(3.53)、甲状腺(2.40)、腎臓
		此隹	(2.61)、腹部脂肪(2.41)、子宮		
					心臓(0.835)、血漿(0.747)、全
					血(0.550)、骨格筋(0.542)、脾
			筋 (1.35) 、 骨 (1.22) 、 脳	(0.882)、骨格筋(0.800)、血球	臟(0.538)、血球(0.288)
			(0.905)、血球(0.715)	(0.464)	

b. 分布(単回経口投与②)

Wistar Hannover ラット (一群雌雄各 4 匹) に[b-ben- 14 C]ブロフラニリドを低用量又は [c-ben- 14 C]ブロフラニリドを低用量又は高用量で単回経口投与して、体内分布試験が実施された。

主要臓器及び組織における残留放射能濃度は表 2.3-4 に示されている。

主要臓器及び組織における残留放射能の合計は、 $[b-ben-^{14}C]$ ブロフラニリド投与群では 0.33 % TAR ~ 0.49 % TAR、 $[c-ben-^{14}C]$ ブロフラニリド投与群では低用量投与群で 0.71 % TAR ~ 1.45 % TAR、高用量投与群で 0.10 % TAR であった。いずれの投与群においても残留放射能の分布に顕著な差は認められず、残留放射能濃度は腹部脂肪で比較的高かった。各臓器及び組織への残留濃度は、雄に比べて雌で高い傾向が認められた。

表 2.3-4: 主要臓器及び組織における残留放射能濃度 (µg/g)

		, ,					
標識体	投与量	性別	投与168時間後				
[b-ben- ¹⁴ C] ブロフラ	5		腹部脂肪(0.314)、肝臓(0.092)、精巣上体(0.081)、甲状腺(0.074)、腎臓(0.050)、副腎(0.041)、膵臓(0.035)、カーカス(0.029)、脾臓(0.019)、肺(0.018)、血球(0.017)、心臓(0.012)、全血(0.012)、骨格筋(0.011)、精巣(0.009)、血漿(0.009)				
ニリド	mg/kg 体重	雌	腹部脂肪(0.630)、肝臓(0.126)、卵巣(0.121)、甲状腺(0.104)、副腎(0.097)、膵臓(0.086)、子宮(0.081)、カーカス(0.059)、腎臓(0.056)、脾臓(0.052)、肺(0.037)、骨髄(0.030)、血球(0.030)、心臓(0.029)、全血(0.022)、骨格筋(0.019)、血漿(0.016)				

[c-ben- ¹⁴ C] ブロフラ	5	雄	腹部脂肪 (0.345) 、精巣上体 (0.093) 、腎臟 (0.037) 、カーカス (0.031) 、膵臟 (0.030) 、副腎 (0.026) 、肝臟 (0.023) 、脾臟 (0.012) 、肺 (0.011) 、心臟 (0.006) 、骨髄 (0.006) 、骨格筋 (0.006) 、全血 (0.004) 、血漿 (0.004) 、精巣 (0.003) 、血球 (0.003)
ニリド	mg/kg 体重	雌	腹部脂肪(0.770)、膵臓(0.074)、カーカス(0.070)、副腎(0.068)肝臓(0.059)、卵巣(0.056)、甲状腺(0.049)、腎臓(0.046)、子宮(0.029)、脾臓(0.028)、骨髄(0.023)、肺(0.022)、心臓(0.016)、骨格筋(0.012)、血漿(0.011)、全血(0.009)、血球(0.005)
[c-ben- ¹⁴ C] ブロフラ	500 mg/kg	胜	腹部脂肪(4.00)、精巣上体(1.53)、腎臓(0.580)、カーカス(0.417)、肝臓(0.416)、膵臓(0.347)、精巣(0.167)、全血(ND)、血漿(ND)、血球(ND)
ニリド	体重	雌	腹部脂肪(6.55)、卵巣(1.15)、肝臓(0.811)、副腎(0.745)、膵臓(0.661)、カーカス(0.622)、腎臓(0.431)、子宮(0.347)、肺(0.221)、心臓(0.187)、全血(ND)、血漿(ND)、血球(ND)

c. 分布(反復経口投与)

Wistar Hannover ラット (一群雌雄各 4 匹) に[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリドを低用量で 14 日間反復経口投与して、体内分布試験が実施された。

主要臓器及び組織における残留放射能濃度は表 2.3-5 に示されている。

残留放射能の分布に顕著な性差は認められなかった。

主要臓器及び組織における残留放射能濃度は最終投与後に経時的に減少し、最終投与 168 時間後における残留放射能の合計は 2.50 %TAR~4.43 %TAR であった。残留放射能濃度は、腹部脂肪、肝臓、膵臓、副腎、甲状腺、精巣上体及び卵巣で比較的高く認められた。

表 2.3-5: 主要臓器及び組織における残留放射能濃度 (µg/g)

標識体	投与量	性別	最終投与24時間後	最終投与168時間後
[b-ben ⁻¹⁴ C] ブロフラ	5	雄	(2.49)、甲状腺(2.02)、肝臓(1.90)、膵臓 (1.89)、腎臓(0.903)、肺(0.529)、心臓(0.476)、	腹部脂肪(1.63)、甲状腺(0.642)、精巣上体(0.455)、肝臓(0.422)、腎臓(0.244)、副腎(0.223)、膵臓(0.202)、カーカス(0.181)、血球(0.144)、脾臓(0.140)、肺(0.097)、全血(0.087)、心臓(0.066)、血漿(0.040)
ニリド	mg/kg 体重	雌	臟(2.01)、卵巣(1.86)、甲状腺(1.41)、腎臓(0.922)、子宮(0.830)、脾臟(0.724)、心臓(0.693)、肺(0.638)、下垂体(0.551)、骨髄(0.479)、骨格筋(0.446)、血球(0.377)、血漿	腹部脂肪(2.86)、甲状腺(0.740)、肝臓(0.693)、脾臓(0.460)、副腎(0.458)、卵巣(0.378)、膵臓(0.346)、カーカス(0.292)、腎臓(0.280)、血球(0.259)、子宮(0.213)、肺(0.194)、心臓(0.178)、全血(0.154)、骨格筋(0.099)、血漿(0.081)

③ 代謝

a. 代謝(単回経口投与)

分布試験 [2.3.1.1(1)②a.] で得られた血漿、肝臓、腎臓及び脂肪、尿及び糞中排泄試験 [2.3.1.1(1)④a.] で得られた投与後96時間の尿及び糞、並びに胆汁中排泄試験 [2.3.1.1(1)④c.] で得られた投与後48時間の胆汁、尿及び糞を試料として、代謝物同定・定量試験が実施された。

血漿、肝臓、腎臓及び脂肪中の主要代謝物は表2.3-6、胆汁、尿及び糞中の主要代謝物は表2.3-7に示されている。

代謝物プロファイルに標識体、投与量及び性別による顕著な差は認められなかった。 血漿、肝臓、腎臓及び脂肪中における主要成分として、[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリド投 与群では、未変化のブロフラニリドのほか、代謝物B、E等が認められた。

[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリド投与群では、肝臓で未変化のブロフラニリドが認められたほか、代謝物B、C/I及びG/Hが認められた。また、血漿及び腎臓中において、代謝物B及びC/Iのほかに、極性成分が29.8%TRR~48.8%TRR認められた。

尿及び胆汁中に未変化のブロフラニリドは認められず、尿中で代謝物Fが認められた。 糞中の主要成分として、未変化のブロフラニリドのほか、代謝物B及びCが認められた。

表 2.3-6:血漿、肝臓、腎臓及び脂肪中の主要代謝物 (%TRR)

	· ш.л.	74 1 74/17	1 1 1 14/15	//// O // II/	71 少工女门的17	(,01141)
標識体	投与量	性別	試料	採取時間 (hr)	ブロフラニリド	代謝物
[b-ben- ¹⁴ C] ブロフラ ニリド	5 mg/kg 体重	雄	血漿	4	1.2	B(54.1)、E(8.3)、C/I(7.6)、G/H(3.2)
			肝臓	4	2.1	B(43.2), E(17.2), C/I(8.8)
			腎臟	4	2.9	B(44.1)、E(12.2)、C/I(5.2)、G/H(2.7)
			脂肪	24	3.2	B(44.1)、C/I(10.8)、E(10.1)
		维	血漿	4	2.5	B(58.0)、E(7.6)、C/I(5.6)、G/H(1.5)
			肝臓	4	7.3	B(42.1)、E(9.4)、C/I(5.9)、G/H(3.1)
			腎臟	4	5.4	B(45.3)、E(9.0)、C/I(4.0)、G/H(0.9)
			脂肪	24	7.4	B(46.6), C/I(13.1), E(2.8)
	500 mg/kg 体重	雄	血漿	1	ND	B(34.4)、C/I(7.5)、極性成分(44.1)
			肝臓	1	5.5	B(49.6)、G/H(13.5)、C/I(11.2)
			腎臟	1	ND	B(7.7)、C/I(1.6)、極性成分(29.8)
[c-ben- ¹⁴ C] ブロフラ ニリド			脂肪	24	NA	NA
		雌	血漿	1	ND	B(37.8)、C/I(11.4)、極性成分(48.8)
			肝臓	1	8.5	B(33.8)、G/H(15.3)、C/I(9.5)
			腎臟	1	ND	B(12.1)、C/I(2.9)、極性成分(32.3)
			脂肪	24	ND	B(37.8)

ND:検出されず、NA:抽出液中放射能が少ないため分析されず

表 2.3-7: 胆汁、尿及び糞中の主要代謝物 (%TAR)

			_ · ·		뉴	,	
標識体	投与量	性別	試験	試料	採取時間	ブロフラニリド	代謝物
					(hr)		
[b-ben- ¹⁴ C] ブロフラ ニリド	5 mg/kg 体重	雄	1	糞	0-96	66.5	B(5.4)、C(1.6)、未同定代謝物(6.1)
			2	糞	0-48	66.6	B(3.3)、未同定代謝物(3.9)
				胆汁		ND	未同定代謝物(9.0)
		雄	1	糞	0-96	75	B(5.2)、C(1.8)、未同定代謝物(4.7)
			2	糞	0-48	60.4	B(3.3)、未同定代謝物(3.0)
				胆汁		ND	未同定代謝物(7.6)
[c-ben- ¹⁴ C] ブロフラ ニリド	5 mg/kg 体重	雄	1	尿	0-96	ND	F(6.4)
				糞		74.9	B(3.4)、C(1.6)、未同定代謝物(3.8)
			2	尿	0-48	ND	F(6.9)
				糞		70.9	B(3.2)、未同定代謝物(3.0)
				胆汁		ND	未同定代謝物(2.5)

[c-ben- ¹⁴ C] ブロフラ	5 mg/kg 体重	雌	1)	尿	0-96	ND	F(11.3)
				糞		51.6	B(4.5)、C(2.6)、未同定代謝物(9.2)
			2	尿	0-48	ND	F(8.6)
				糞		61.3	B(4.6)、未同定代謝物(2.3)
				胆汁		ND	未同定代謝物(2.4)
ニリド	500 mg/kg 体重	雄	①	尿	12-24	ND	F(0.8)
				糞	0-96	91	B(0.9), C(1.9)
				糞	0-48	88.8	B(3.4)、未同定代謝物(2.4)
		雌	1	尿	12-24	ND	F(0.7)
				糞	0-96	94	B(2.2), C(1.8)

- 注)・①:尿及び糞中排泄試験、②:胆汁中排泄試験
 - ・[b-ben- 14 C]ブロフラニリド投与群の尿並びに胆汁中排泄試験における[c-ben- 14 C]ブロフラニリド高用量投与群の尿及び胆汁は、分析されず。

ND: 検出されず

試験①における未同定代謝物:代謝物Bの水酸化体又は水付加体のシステイン抱合体、並びに代謝物Bのベンゾイル基が脱離したと考えられる代謝物及びそのシステイン抱合体を含む。

試験②における未同定代謝物:代謝物Bの水酸化体又は水付加体、及びそれらのシステイン、グリシン又はグルクロン酸抱合体、並びに代謝物Bのベンゾイル基が脱離後に水酸化、グルクロン酸抱合化又はアセチル化されたと考えられる代謝物を含む。

b. 代謝(反復経口投与)

尿及び糞中排泄試験 [2.3.1.1(1)④b.] で得られた糞を試料として、代謝物同定・定量 試験が実施された。

糞中の主要代謝物は表 2.3-8 に示されている。

主要成分として、未変化のブロフラニリドのほか、代謝物 B 及び C が認められた。

表 2.3-8: 糞中の主要代謝物 (%TAR)

投与量	性別	採取日及び採取時間 ^a (hr)	ブロフラニリド	代謝物
		投与1日(0-24)	75.0	B(4.9)、未同定代謝物(4.5)
	雄	投与7日(0-24)	61.4	B(2.9)、未同定代謝物(4.3)
5		投与14日(0-96)	64.7	B(2.5) 、C(0.6)、未同定代謝物(5.3)
mg/kg 体重		投与1日(0-24)	52.9	B(2.0)
	雌	投与7日(0-24)	76.6	B(2.8)、未同定代謝物(4.2)
		投与14日(0-24)	56.9	B(3.0)、C(0.5)、未同定代謝物(9.4)

a: 投与後経過時間

未同定代謝物:代謝物 B の水酸化体又は水付加体のシステイン抱合体並びに代謝物 B のベンゾイル基が脱離したと考えられる代謝物及びそのシステイン抱合体を含む。

ラットにおけるブロフラニリドの主要代謝経路は、①N-メチル基の脱離による代謝物 B の生成及び代謝物 B のアミド結合の開裂による代謝物 F の生成、②ペルフルオロプロピル 基フッ素の水酸化による代謝物 C の生成であると考えられた。また、代謝物 B の水酸化又は水の付加により複数の微量代謝物を生成し、その一部はシステイン抱合体を形成すると考えられた。

④ 排泄

a. 尿及び糞中排泄(単回経口投与)

Wistar Hannover ラット(一群雌雄各 4 匹)に[b-ben⁻¹⁴C]ブロフラニリドを低用量又は [c-ben⁻¹⁴C]ブロフラニリドを低用量又は高用量で単回経口投与して、尿及び糞中排泄試験が実施された。

投与後 168 時間の尿及び糞中排泄率は表 2.3-9 に示されている。

いずれの投与群においても排泄は比較的速やかで、投与放射能は[b-ben- 14 C]ブロフラニリド投与群では 94.1 % TAR \sim 96.5 % TAR、[c-ben- 14 C]ブロフラニリド投与群では 90.2 % TAR \sim 98.8 % TAR が尿及び糞中に排泄され、主に糞中に排泄された。投与後 24 時間の呼気中排泄率は、いずれの投与群においても 0.02 % TAR 以下であった。

表 2.3-9: 投与後 168 時間の尿及び糞中排泄率(%TAR)

	採取時間	[b-ben- ¹⁴ C] ブロフラニリド		[c-ben- ¹⁴ C] ブロフラニリド			
試料	(hr)	5 mg/k	g体重	5 mg/k	g体重	500 mg/kg体重	
	, ,	雄	雌	雄	雌	雄	雌
	0-12	0.07	0.15	4.30	7.24	1.06	0.95
尿	0-72	0.21	0.36	6.83	12.0	1.44	1.30
	0-168	0.25	0.47	7.6	13.6	1.53	1.4
	0-12	26.1	14.1	16.5	6.89	14.4	19.6
糞	0-72	90.5	92.1	89.1	71.3	95.5	94.8
	0-168	93.8	96.0	91.2	76.6	96.3	95.5
ケージ洗浄液a	0-168	0.05	0.09	0.61	0.69	0.18	0.08
呼気	0-24	< 0.01	ND	ND	0.02	< 0.01	ND
肝臓		0.09	0.10	0.02	0.04	< 0.01	0.01
消化管 (内容物を含む)	168	0.14	0.26	0.12	0.23	0.01	0.02
カーカス		0.48	0.87	0.53	0.98	0.07	0.10

ND:検出されず

a: 水及びエタノール洗浄液の合計

b. 尿及び糞中排泄(反復経口投与)

Wistar Hannover ラット (一群雌雄各 4 匹) に、[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリドを低用量で 14 日間反復経口投与して、尿及び糞中排泄試験が実施された。

尿及び糞中排泄率は表 2.3-10 に示されている。

投与放射能は、最終投与後 168 時間で 87.5 %TAR~90.3 %TAR が尿及び糞中に排泄 され、主に糞中に排泄された。

表 2.3-10: 尿及び糞中排泄率 (%	(%TAR)	
-----------------------	--------	--

		[b-ben- ¹⁴ C] ブロフラニリド 5 mg/kg体重		
試料	採取日及び採取時間 ^a (hr)			
		雄	雌	
	投与1日(0-24)	0.09	0.21	
尿	投与7日(0-24)	0.12	0.32	
	投与14日(0-168)	0.25	0.80	
	投与1日(0-24)	88.9	57.0	
糞	投与7日(0-24)	74.8	86.4	
	投与14日(0-168)	87.2	89.5	
	投与1日(0-24)	0.04	0.02	
ケージ洗浄液	投与7日(0-24)	0.02	0.06	
	投与14日(0-168)	0.03	0.20	
カーカス及び組織	最終投与168時間後	5.27	8.79	

注) 各投与目当たりの投与量に対する回収率

c. 胆汁中排泄

胆管カニューレを挿入したWistar Hannoverラット(一群雌雄各4~5匹)に、[b-ben- 14 C]ブロフラニリドを低用量又は[c-ben- 14 C]ブロフラニリドを低用量又は高用量で単回経口投与して、胆汁中排泄試験が実施された。

胆汁、尿及び糞中排泄率は表2.3-11に示されている。

投与放射能は、投与後48時間で[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリド投与群では雄で10.1 %TAR、雌で8.92 %TAR、[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリド投与群では雄で0.37 %TAR~3.73 %TAR、雌で3.14 %TARが胆汁中に排泄され、胆汁中排泄率は[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリド投与群に比べて[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリド投与群で高かった。

本試験並びに尿及び糞中排泄試験 [2.3.1.1(1)④a.] における糞中排泄率から、投与放射能は主に胆汁を介することなく糞中排泄されると考えられた。

表 2.3-11: 胆汁、尿及び糞中排泄率 (%TAR)

	採取時間	[b-ben- ¹⁴ C] ブロフラニリド		[c-ben- ¹⁴ C] ブロフラニリド			
試料	(hr)	5 mg/l	kg体重	5 mg/l	kg体重	500 mg	/kg体重
		雄	雌	雄	雌	雄	雌
	0-12	4.38	4.01	1.71	1.32	0.26	
胆汁	0-24	7.02	6.21	2.76	2.3	0.32	
	0-48	10.1	8.92	3.73	3.14	0.37	
	0-12	0.26	0.90	5.49	6.38	1.26	
尿	0-24	0.35	1.72	6.64	8.08	1.39	
	0-48	0.44	3.12	7.71	10	1.49	

a: 投与後経過時間

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

	0-12	25.7	8.80	7.95	6.21	14.9	
糞	0-24	69.1	54.4	67	40.1	73.6	
	0-48	79.2	73.8	80.2	71.3	97.6	
ケージ洗浄液a	0-48	0.05	0.30	0.16	0.11	0.04	
肝臓		0.40	0.80	0.10	0.27	0.02	
消化管 (内容物を含む)	48	1.25	2.32	1.36	1.57	1.25	
カーカス		5.32	9.79	2.46	5.32	0.35	

ND:検出されず

a: 水及びエタノール洗浄液の合計

2.3.1.2 急性毒性

ブロフラニリド原体を用いて実施した急性経口毒性試験、急性経皮毒性試験、急性吸入毒性試験、急性神経毒性試験、眼刺激性試験、皮膚刺激性試験及び皮膚感作性試験の報告書を 受領した。

食品安全委員会による評価(URL:

http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026)を以下(1)から(3)に転記する。

(1) 急性毒性試験

ブロフラニリド原体のラットを用いた急性毒性試験が実施された。 結果は表 2.3-12 に示されている。

表 2.3-12: 急性毒性試験結果概要 (原体)

投与	動物種	LD ₅₀ (mg	/kg体重)	観察された症状	
経路	性別・匹数	雄	雌	観祭された症人	
経口a	Wistar Hannover ラット 雌5匹		>5,000	投与量:550、1,750、5,000 mg/kg体重 症状及び死亡例なし	
経皮 ^b	Wistar Hannover ラット 雌雄各5匹	>5,000	>5,000	症状及び死亡例なし	
HTL 74 C	Fischer ラット	LC ₅₀ (mg/L)	雌雄:体重減少(投与2日)	
吸入°	雌雄各6匹	>2.20	>2.20	死亡例なし	

/:該当なし

- ^a:上げ下げ法による評価。溶媒として 1 %CMC 水溶液が用いられた。550 及び 1,750 mg/kg 体重:各 1 匹、5,000 mg/kg 体重:3 匹。
- b: 24 時間半閉塞貼付
- c:4時間暴露(ダスト)

(2) 急性神経毒性試験 (ラット)

Wistar Hannover ラット (一群雌雄各 10 匹) を用いた単回強制経口 (原体:0、200、600 及び 2,000 mg/kg 体重、溶媒:0.5 % CMC 水溶液) 投与による急性神経毒性試験が実施された。

本試験において、いずれの投与群においても毒性影響は認められなかったので、無毒性量は本試験の最高用量 2,000 mg/kg 体重であると考えられた。急性神経毒性は認められなかった。

(3) 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験

ブロフラニリド原体の NZW ウサギを用いた眼及び皮膚刺激性試験が実施された。

その結果、眼刺激性試験では、投与 0.5~4 時間後に結膜浮腫、発赤及び分泌物が認められたが、24 時間後には全て消失した。皮膚刺激性は認められなかった。

CBA マウスを用いた皮膚感作性試験 (LLNA 法) 及び Hartley モルモットを用いた皮膚感作性試験 (Maximization 法) が実施され、結果はいずれも陰性であった。

2.3.1.3 短期毒性

ブロフラニリド原体を用いて実施した 90 日間反復経口投与毒性試験、21 日間反復経皮投 与毒性試験、28 日間反復吸入投与毒性試験及び反復経口投与神経毒性試験の報告書を受領し た。

食品安全委員会による評価(URL:

http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026)を以下(1)から(6)に転記する。

< 反復投与試験におけるブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度について>

動物体内運命試験 [2.3.1.1(1)] でもみられたように、ラット、マウス及びイヌを用いた 90 日間亜急性毒性試験 [2.3.1.3(1)~(3)]、ラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験 [2.3.1.5(2)] 並びにマウスを用いた 78 週間発がん性試験 [2.3.1.5(3)] において、投与量とブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度に一貫した線形性はなく、投与量の増加による吸収の飽和が考えられた。いずれの試験においても、ブロフラニリドに比べて代謝物 B の血漿中濃度が高かったことから、ブロフラニリドは生体内で迅速に代謝されると考えられた。ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度について、ラットを用いた 90 日間亜急性毒性試験でブロフラニリドが雄に比べて雌で高く認められたことを除いて、顕著な性差は認められなかった。

一方、生殖発生毒性試験においては、ブロフラニリド等の血漿中濃度は測定されていない ことから、吸収の飽和の有無については明らかとならなかった。

(1)90日間亜急性毒性試験(ラット)

Wistar Hannover ラット [主群:一群雌雄各 10 匹、回復群 (0 及び 15,000 ppm 投与群): 一群雌雄各 10 匹] を用いた混餌 (原体: 0、500、1,500、5,000 及び 15,000 ppm: 平均検体 摂取量は表 2.3-13 参照) 投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。投与 14、42 及び 72 日に主群の各投与群の全動物から採血して、ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中 濃度が測定された (結果は表 2.3-14 参照)。

また、投与13週に、全動物を対象としたFOB並びに対照群及び15,000 ppm 投与群を対象とした骨髄検査がそれぞれ実施された。

対照群及び 15,000 ppm 投与群については、投与期間終了後に 4 週間の回復期間が設定された。

表 2.3-13:90	日間亜急性毒性試験	(ラット)	の平均検体摂取量

投与群		500 ppm	1,500 ppm	5,000 ppm	15,000 ppm	15,000 ppm (回復群)
平均検体摂取量	雄	35	104	345	1,110	1,010
(mg/kg体重/日)	雌	41	126	418	1,240	1,210

表 2.3-14: ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度 (mg/L)

性	化合物		ブロフラニリド			代謝物B			
別	投与量	500 ppm	1,500 ppm	5,000 ppm	15,000 ppm	500 ppm	1,500 ppm	5,000 ppm	15,000 ppm
	投与14日	0.027~ 0.060	0.050~0.11	0.058~0.12	0.055~0.20	4.0~9.6	8.0~19	9.2~20	10~20
雄	投与42日	0.022~ 0.079	0.028~ 0.062	0.048~ 0.093	0.077~0.33	5.1~15	5.2~8.2	6.5~15	6.6~25
	投与72日	0.022~ 0.040	0.030~ 0.054	0.052~ 0.089	0.072~0.16	4.9~13	7.2~22	8.3~28	13~34
	投与14日	0.070~0.26	0.17~0.32	0.21~0.56	0.22~0.57	2.1~10	5.4~12	6.5~18	5.8~15
雌	投与42日	0.082~0.45	0.17~0.32	0.20~0.51	0.23~0.69	10~58	25~73	19~42	15~84
	投与72日	0.094~0.28	0.14~0.40	0.21~0.70	0.23~0.38	5.0~10	6.2~29	6.1~42	5.7~22

各投与群で認められた毒性所見は表 2.3-15 に示されている。

FOB 及び骨髄検査では検体投与による影響は認められなかった。

1,500 ppm 以上投与群の雄で肝比重量*増加、500 ppm 以上投与群の雌で肝絶対及び比重量増加が認められたが、肝毒性を示唆する血液生化学的パラメータの変化及び病理組織学的変化が認められず、また、これらは回復群では認められなかったことから、適応性変化であると考えられた。

本試験において、500 ppm 以上投与群の雌雄で副腎皮質細胞空胞化(東状帯及び球状帯)等が認められたので、無毒性量は雌雄とも500 ppm 未満(雄:35 mg/kg 体重/日未満、雌:41 mg/kg 体重/日未満)であると考えられた。

* 体重比重量のことを比重量という(以下同じ。)。

表 2.3-15:90 日間亜急性毒性試験 (ラット) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
15,000 ppm	·体重增加抑制(投与0~7日以降) ^a	・体重増加抑制(投与期間累積) ^{82、a} ・卵巣比重量増加 ^a
5,000 ppm以上		
1,500 ppm 以上		・心絶対及び比重量増加 ・脾髄外造血亢進 ^{§2}

500 ppm以上	・Ret増加	・Ret増加
	副腎絶対及び比重量増加り、	・副腎及び脾絶対及び比重量増加り
	脾比重量增加 ^{§1、b}	・副腎皮質細胞空胞化(東状帯及び球状帯) ^c
	・副腎皮質細胞空胞化(東状帯及び球状帯) ^c	及び細胞肥大(び漫性)
	·脾髄外造血亢進§2	· 卵巣間質腺細胞空胞化 ^d

- §1:15,000 ppm 投与群では統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。
- ^{§2}:統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。
- a:回復群では認められなかった。
- b:回復群においても増加(副腎)又は増加傾向(脾臓)が認められた。
- c: 主群では、いずれの投与群においても全例で認められた。回復群において、雄では 5 例に球状帯空胞化が認められたが、所見の程度軽減が認められた。雌では 1 例のみに認められた。
- d:主群では、いずれの投与群においても全例で認められた。回復群では 6 例に認められたが、主群に比べて所見の程度軽減が認められた。

(2)90日間亜急性毒性試験(マウス)

ICR マウス(主群:一群雌雄各 10 匹、血漿中濃度測定群:一群雌雄各 4 匹)を用いた混餌(原体:0、200、1,500 及び 7,000 ppm: 平均検体摂取量は表 2.3-16 参照)投与による 90日間亜急性毒性試験が実施された。投与 90日に血漿中濃度測定群の各投与群雌雄各 4 匹から採血して、ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度が測定された(結果は表 2.3-17 参照)。

表 2.3-16:90 日間亜急性毒性試験(マウス)の平均検体摂取量

投与群		200 ppm	1,500 ppm	7,000 ppm
平均検体摂取量	雄	26.3	199	955
(mg/kg 体重/日)	雌	32.3	230	1,150

表 2.3-17: ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度 (mg/L)

性別	化合物	ブロフラニリド			代謝物B			
1生力1	投与量	200 ppm	1,500 ppm	7,000 ppm	200 ppm	1,500 ppm	7,000 ppm	
雄	投与13週	0.0136	0.0503	0.128	0.486	2.20	4.14	
雌	投与13週	< 0.0100	0.0310	0.536	0.336	2.96	5.62	

各投与群で認められた毒性所見は表 2.3-18 に示されている。

本試験において、雄ではいずれの投与群においても毒性影響は認められず、7,000 ppm 投与群の雌で副腎皮質細胞空胞化(東状帯)等が認められたので、無毒性量は雄で本試験の最高用量7,000 ppm (955 mg/kg 体重/日)、雌で1,500 ppm (230 mg/kg 体重/日) であると考えられた。

表 2.3-18:90 日間亜急性毒性試験 (マウス) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
7,000 ppm	7,000 ppm以下 毒性所見なし	・副腎絶対及び比重量増加 ・副腎皮質細胞空胞化(束状帯)
1,500 ppm以下		毒性所見なし

(3)90日間亜急性毒性試験(イヌ)

ビーグル犬(一群雌雄各 5 匹)を用いたカプセル経口(原体:0、100、300、1,000 mg/kg体重/日)投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。投与 22、44 及び 71 日に各投与群の雌雄各 5 匹から採血して、ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度が測定された (結果は表 2.3-19 参照)。

衣	衣 2.3-19. フロフノーサト及び下謝物 B の血泉中張及 (IIIg/L)								
	化合物		ブロフラ	ラニリド			代謝	†物B	
性別	投与量	0 mg/kg 体重/日	100 mg/kg 体重/日	300 mg/kg 体重/日	1,000 mg/kg 体重/日	0 mg/kg 体重/日	100 mg/kg 体重/日	300 mg/kg 体重/日	1,000 mg/kg 体重/日
	投与22日	_	_	0.0111	0.0558	_	5.37	8.05	22.3
雄	投与44日	_	_	0.0489	0.0408	0.0356	5.55	10.4	17.3
	投与71日	_	0.00519	0.0194	0.0460	0.0267	6.43	11.4	17.2
	投与22日	_	_	0.0832	0.0911	0.00438	3.80	13.9	16.4
雌	投与44日	_	0.00911	0.0613	0.126	0.0391	7.56	14.4	18.8
	In t								

表 2.3-19: ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度 (mg/L)

各投与群で認められた毒性所見は表 2.3-20 に示されている。

300 mg/kg 体重/日投与群の雄で肝比重量増加が認められたが、肝毒性を示唆する血液生化学的パラメータの変化及び病理組織学的変化が認められなかったことから、適応性変化であると考えられた。

0.00856 | 0.111 | 0.131 | 0.0313 | 8.52

15.9

18.4

本試験において、1,000 mg/kg 体重/日投与群の雌雄で肝絶対及び比重量増加等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 300 mg/kg 体重/日であると考えられた。

投与群	雄	雌
1,000 mg/kg体重/日	・TG増加 ・肝絶対 [§] 及び比重量増加	・ALP増加 ・肝絶対 [§] 及び比重量増加
300 mg/kg体重/日以下	毒性所見なし	毒性所見なし

表 2.3-20:90 日間亜急性毒性試験 (イヌ) で認められた毒性所見

(4)90日間亜急性神経毒性試験(ラット)

Wistar Hannover ラット (一群雌雄各 10 匹) を用いた混餌 (原体:0、1,500、5,000 及び 15,000 ppm: 平均検体摂取量は表 2.3-21 参照) 投与による 90 日間亜急性神経毒性試験が実施された。

表 2.3-21:90 日間亜急性神経毒性試験 (ラット) の平均検体摂取量

投与群		1,500 ppm	5,000 ppm	15,000 ppm
平均検体摂取量	雄	99	320	1,040
(mg/kg体重/日)	雌	118	423	1,140

^{- :} 検出されず

^{§:}統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。

本試験において、いずれの投与群においても毒性影響は認められなかったので、無毒性量は本試験の最高用量 15,000 ppm(雄:1,040 mg/kg 体重/日、雌:1,140 mg/kg 体重/日)であると考えられた。 亜急性神経毒性は認められなかった。

(5) 28 日間亜急性吸入毒性試験(ラット)

Wistar Hannover ラット [主群:一群雌雄各 10 匹、回復群 (0 及び 1 mg/L 投与群:一群雌雄各 5 匹)] を用いた吸入(原体:0、0.03、0.2 及び 1 mg/L、6 時間/日、5 日/週、鼻部暴露)暴露による 28 日間亜急性吸入毒性試験が実施された。対照群及び 1 mg/L 投与群については、暴露期間終了後に 4 週間の回復期間が設けられた。

各暴露群で認められた毒性所見は表 2.3-22 に示されている。

0.2 mg/L 暴露群の雌で肝比重量増加が認められたが、肝毒性を示唆する血液生化学的パラメータの変化及び病理組織学的変化が認められなかったことから、適応性変化であると考えられた。

本試験において、0.03 mg/L 以上投与群の雌雄で副腎絶対及び比重量増加等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 0.03 mg/L 未満であると考えられた。

表 2.3-22:28 日間亜急性吸入毒性試験 (ラット) で認められた毒性所見

12 2.3-22 .	20 日间里心は災八母は呼吸(ノンド)	
暴露群	雄	雌
1 mg/L	・体重減少/増加抑制 ^a	・体重減少/増加抑制 ^a
	・Chol増加	・GGT、Chol及びT.Bil増加
	・肺比重量増加	・肝及び肺比重量増加
	・肺胞組織球集簇 ^{§1}	・肺胞組織球集簇
	・脾色素沈着 ^{a、d}	
0.2 mg/L以上	・Ret増加	・Hb減少
	・副腎皮質細胞空胞化(全領域)b	・MCV ^{§ 2} 及びRet増加
	•喉頭蓋基部上皮変化 ^{a、c}	・卵巣比重量増加、心絶対及び比重量増加
	・脾髄外造血亢進 §3、a	・副腎皮質細胞空胞化(全領域) ^a
	・肺気管支上皮再生性過形成 ^{§3、a、e} 及び気管支	・脾色素沈着 ^{a、d} 及び髄外造血亢進 ^a
	腔内細胞残屑 ^{§1、a}	・肺気管支上皮再生性過形成ぬ。及び気管支腔
		内細胞残屑 ^{§3、a}
		・卵巣間質腺細胞空胞化 ^f
0.03 mg/L	・副腎絶対及び比重量増加	・副腎絶対及び比重量増加
		• 喉頭蓋基部上皮変化 ^a

^{§1:}統計学的有意差はないが、検体暴露の影響と考えられた。

(6) 28 日間亜急性経皮毒性試験 (ラット)

Wistar Hannover ラット(一群雌雄各 10 匹)を用いた経皮(原体:0、100、300 及び1,000 mg/kg 体重/日、6 時間/日、5 日/週、溶媒:1% CMC 溶液) 投与による 28 日間亜急性経皮毒性試

^{§2:1} mg/L 暴露群では統計学的有意差はないが、検体暴露の影響と考えられた。

^{§3:0.2} mg/L 暴露群では統計学的有意差はないが、検体暴露の影響と考えられた。

a:回復群では認められなかった。

b:回復群において、発生頻度の低下及び所見の程度軽減が認められた。

c: 繊毛消失及び上皮細胞平坦化が認められた。

d: 褐色フレーク状の外観を伴い、ヘモジデリンであると考えられた。

[:]繊毛の限局性消失を伴う好塩基性上皮及び炎症細胞の軽微な浸潤を伴う。

f:回復群では、発生頻度の低下及び所見の程度軽減が認められた。

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

験が実施された。

本試験において、いずれの投与群においても毒性影響は認められなかったので、無毒性量は雌雄とも本試験の最高用量 1,000 mg/kg 体重/日であると考えられた。

2.3.1.4 遺伝毒性

ブロフラニリド原体を用いて実施した復帰突然変異試験、染色体異常試験、小核試験及び 遺伝子突然変異試験の報告書を受領した。

食品安全委員会による評価(URL:

http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026) を以下(1)に転記する。

(1) 遺伝毒性試験

ブロフラニリドの細菌を用いた復帰突然変異試験、チャイニーズハムスター卵巣由来細胞 (CHO) を用いた遺伝子突然変異試験、チャイニーズハムスター肺由来線維芽細胞 (CHL/IU) を用いた染色体異常試験及びマウスを用いた小核試験が実施された。 結果は表 2.3-23 に示されているとおり全て陰性であったことから、ブロフラニリドに遺

表 2.3-23: 遺伝毒性試験概要 (原体)

伝毒性はないものと考えられた。

試験		対象	処理濃度・投与量	
	復帰突然 変異試験	Salmonella typhimurium (TA98、TA100、TA1535、TA1537 株) Escherichia coli (WP2 uvrA 株)	①33~10,000 μg/プレート(+/-S9) (プレート法) ②33~10,000 μg/プレート(+/-S9) (プレインキュベーション法)	陰性
in vitro	遺伝子突然変異試験	チャイニーズハムスター 卵巣由来細胞(CHO) (<i>Hprt</i> 遺伝子)	①39.1~5,000 µg/mL (-S9) 39.1~312.5 µg/mL (+S9) ②10.0~80.0 µg/mL (+/-S9) (いずれも 4 時間処理)	陰性
	/ (チャイニーズハムスター 肺由来線維芽細胞(CHL/IU)	① 72.0~3,000 μg/mL(-S9) 72.0~648 μg/mL(+S9) (6 時間処理) ② 43.8~350 μg/mL(-S9) (24 時間処理)	陰性
in vivo	小核試験	NMRI マウス(骨髄細胞) (一群雄 5 匹)	500、1,000 及び 2,000 mg/kg 体重 (単回経口投与 24 時間後に標本作製。 2,000 mg/kg 体重群については、48 時間後に も標本作製。)	陰性 b

注) +/-S9: 代謝活性化系存在下及び非存在下

2.3.1.5 長期毒性及び発がん性

ブロフラニリド原体を用いて実施した 1 年間反復経口投与毒性試験、1 年間反復経口投与 毒性/発がん性併合試験及び発がん性試験の報告書を受領した。

食品安全委員会による評価(URL:

http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026) を以下(1)から(3)

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

に転記する。

(1)1年間慢性毒性試験(イヌ)

ビーグル犬 (一群雌雄各 5 匹) を用いたカプセル経口 (原体:0、100、300、1,000 mg/kg 体重/日) 投与による 1 年間慢性毒性試験が実施された。

各投与群で認められた毒性所見は表 2.3-24 に示されている。

本試験において、100 mg/kg 体重/日以上投与群の雄で副腎皮質細胞肥大(東状帯、び漫性)等、300 mg/kg 体重/日以上投与群の雌で副腎絶対及び比重量増加等が認められたので、無毒性量は雄で100 mg/kg 体重/日未満、雌で100 mg/kg 体重/日であると考えられた。

表 2.3-24:1 年間慢性毒性試験(イヌ)で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
1,000 mg/kg体重/日		 ・体重増加抑制(投与0~21日以降) ・WBC[§]及びNeu増加 ・ALT増加 ・副腎皮質細胞肥大(束状帯、び漫性)[§]
300 mg/kg体重/日以上	・ALP増加	・ALP増加 ・副腎絶対及び比重量増加 [§]
100 mg/kg体重/日	・副腎絶対及び比重量増加 ・副腎皮質細胞肥大(束状帯、び漫性) ^{§、a}	毒性所見なし

^{§:} 統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。

(2)2年間慢性毒性/発がん性併合試験(ラット)

Wistar Hannover ラット (慢性毒性群:一群雌雄各 10 匹、発がん性群:一群雌雄各 50 匹)を用いた混餌 [原体:0、30 (慢性毒性群のみ)、100、300、1,500 及び 15,000 ppm: 平均検体摂取量は表 2.3-25 参照] 投与による 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験が実施された。投与 2、12、25、38 及び 51 週に慢性毒性群の各投与群雌雄各 10 匹から採血して、ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度が測定された (結果は表 2.3-26 参照)。

表 2.3-25:2 年間慢性毒性/発がん性併合試験(ラット)の平均検体摂取量

投与群(ppm)			30	100	300	1,500	15,000
	慢性毒性群	雄	1.7	5.7	16	84	822
平均検体摂取量 (mg/kg体重/日)		雌	2.1	7.2	20	104	1,130
	発がん性群	雄		4.5	14	70	709
		雌		5.9	19	95	953

/:該当なし

a: いずれの投与群においても、1 例に認められ、所見の程度は軽微であった。

性別	化合物					
1生万1	投与量	30 ppm	100 ppm	300 ppm	1,500 ppm	15,000 ppm
	投与2週	0.169	1.11	3.32	4.29	7.62
	投与12週	0.216	0.847	2.61	4.71	4.98
雄	投与25週	0.228	0.915	2.50	8.44	10.4
	投与38週	0.183	0.794	2.44	4.74	6.78
	投与51週	0.155	0.657	1.86	1.85	3.49
	投与2週	0.185	0.577	1.95	3.20	2.22
	投与12週	0.417	3.07	6.95	12.4	19.9
雌	投与25週	0.187	0.914	3.25	6.01	8.81
	投与38週	0.130	0.753	2.26	2.77	4.42
22.2	投与51週	0.191	0.812	4.31	5.74	10.1

表 2.3-26: ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度 (mg/L)

各投与群で認められた毒性所見(非腫瘍性病変)は表 2.3-27、精巣、子宮及び卵巣における腫瘍性病変の発生頻度は表 2.3-28 に示されている。

腫瘍性病変として、15,000 ppm 投与群の雄で精巣間細胞腫、1,500 ppm 以上投与群の雌で子宮内膜腺癌の発生頻度増加が認められた。子宮内膜腺癌について、1,500 ppm 投与群では統計学的有意差はなく、発生頻度(11/50 例)は試験実施施設における背景データ [2%~30%(平均16.5%)、11 試験]の範囲内であったが、300 ppm 以上投与群の雌で子宮腺過形成が認められている。また、1,500 ppm 以上投与群の雌で、卵巣の生殖索間質由来腫瘍(黄体腫、莢膜細胞腫、顆粒膜細胞腫及び生殖索間葉腫瘍)の合計及びいずれかの腫瘍を有する動物数の増加傾向が認められ、統計学的有意差はないが、1,500 ppm 投与群における顆粒膜細胞腫及び15,000 ppm 投与群における各腫瘍の発生頻度は背景データ [黄体腫:0%、莢膜細胞腫:0%~2%(平均0.4%)、顆粒膜細胞腫:0%~2%(平均0.2%)、生殖索間葉腫瘍・0%~6%(平均1.3%):11 試験]の範囲の上限であったか、又は超えていた。

300 ppm 以上投与群においては代謝物 B の血漿中濃度に線形性が認められないことも考慮して、1,500 ppm 以上投与群の雌で認められたこれらの腫瘍性病変について、検体投与による影響であると考えられた。

本試験において、雄では 100 ppm 以上投与群の慢性毒性群において副腎皮質細胞空胞化(全領域)が認められ、雌では 100 ppm 以上投与群の発がん性群において卵巣間質腺細胞空胞化が認められたので、無毒性量は雄で 30 ppm (1.7 g/kg 体重/日)、雌で 100 ppm 未満(5.9 mg/kg 体重/日未満)であると考えられた。

(精巣、子宮及び卵巣腫瘍発生メカニズムに関しては「2.3.1.8.(1)①及び②〕を参照)

注) ブロフラニリドは、いずれの投与群及び採取時期においても定量限界(0.005 mg/L)未満であった。

表 2.3-27:2 年間慢性毒性/発がん性併合試験 (ラット) で認められた毒性所見

(非腫瘍性病変)

		() 在
投与群	雄	雌
15,000 pm	・副腎皮質脂肪化(多発性)及びのう胞状変性	・RBC、Hb及びHt減少
	・肺胞組織球集簇	・Ret増加
		・多核肝細胞
1,500 pm以上	・Chol増加	・GGT及びChol増加
	・肝絶対 ^{§1} 及び比重量増加	・心及び肝絶対及び比重量増加
	・精巣限局性間細胞過形成	・副腎皮質脂肪化(多発性)
	・肉芽腫性反応(炎症)を伴う肺コレステロール裂	・肉芽腫性反応(炎症)を伴う肺コレステロール裂
		・卵巣卵胞のう腫
300 ppm以上	・副腎絶対及び比重量増加	・副腎絶対及び比重量増加
		・副腎皮質細胞空胞化(全領域)
		・子宮腺過形成 § 2
100 pm以上	·副腎皮質細胞空胞化 (全領域) ^{§3}	·卵巣間質腺細胞空胞化 ^{§ 4}
30 ppm*	毒性所見なし	毒性所見なし

- *:慢性毒性群のみで設定された。
- §1:統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。
- §2:1,500 ppm 投与群では統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。
- §3: 発がん性群では 300 ppm 以上投与群で認められた。
- \$4: 所見の程度は、 $100\sim1,500$ ppm 投与群: 軽微 \sim 中等度、15,000 ppm 投与群: 軽微 \sim 顕著であった。100 ppm 投与群では 19/50 例に認められた。

表 2.3-28:慢性毒性群で認められた毒性所見(非腫瘍性病変)

投与群	雄	雌
15,000 ppm		・RBC、Hb及びHt減少
		・Ret 増加
1,500 ppm以上	・Chol増加	・GGT及びChol増加
	・肝絶対 ^{§1} 及び比重量増加	・心及び肝 ^{§2} 絶対及び比重量増加
		・副腎皮質細胞肥大(び漫性)
300 ppm以上	・副腎絶対及び比重量増加	・副腎絶対及び比重量増加
		・副腎皮質細胞空胞化(全領域)
		・卵巣間質腺細胞空胞化
100 ppm以上	・副腎皮質細胞空胞化(全領域)	100 ppm以下毒性所見なし
30 ppm	毒性所見なし	

^{§1:}統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。

表 2.3-29: 精巣、子宮及び卵巣における腫瘍性病変の発生頻度

組織	投与群		0 ppm	100 ppm	300 ppm	1,500 ppm	15,000 ppm
	切迫・途中	検査動物数	16	6	8	8	7
死亡動物	間細胞腫	0	0	0	0	0	
本字 宍	精巣 最終と殺動物	検査動物数	34	44	42	42	43
相朱		間細胞腫	1	2	5	4	14
	全動物	検査動物数	50	50	50	50	50
	土動物	間細胞腫	1	2	5	4	14**

^{§2:1,500} ppm 投与群では比重量に統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。

						1
切迫・途中	検査動物数	8	14	12	22	10
死亡動物	腺癌(内膜)	2	2	2	5	4
目如1.30.私业	検査動物数	42	36	38	28	40
取終と殺動物	腺癌(内膜)	4	2	4	6	10
人工山。	検査動物数	50	50	50	50	50
至動物	腺癌(内膜)	6	4	6	11 [§]	14*
	検査動物数	8	14	12	22	10
	黄体腫	0	0	0	0	1
	莢膜細胞腫	0	0	0	0	0
化 匸動物	顆粒膜細胞腫	0	0	0	4	0
	生殖索間葉腫瘍	0	1	0	0	0
最終と殺動物	検査動物数	42	36	38	28	40
	黄体腫	0	1	0	0	2
	莢膜細胞腫	2	0	0	0	2
	顆粒膜細胞腫	1	1	3	7	6
	生殖索間葉腫瘍	0	1	0	0	3
	検査動物数	50	50	50	50	50
	黄体腫	0	1	0	0	3
	莢膜細胞腫	2	0	0	0	2
全動物	顆粒膜細胞腫	1	1	3	11**	6
	生殖索間葉腫瘍	0	2	0	0	3
	合計(動物数)b	3	3	3	11 [§]	12 [§]
	合計(腫瘍数)。	3	4	3	11 [§]	14 §
	死亡動物 最終と殺動物 全動物 切迫・途中 死亡動物 最終と殺動物	死亡動物 腺癌(内膜) 最終と殺動物 検査動物数 身産動物数 腺癌(内膜) 検査動物数 検査動物数 黄体腫 英膜細胞腫 塩糖素間薬腫瘍 検査動物数 黄体腫 英膜細胞腫 生殖素間薬腫瘍 検査動物数 黄体腫 英膜細胞腫 生殖素間薬腫瘍 検査動物数 黄体腫 英膜細胞腫 左動物 類体腫 生殖素間薬腫瘍 合計(動物数)b	死亡動物 腺癌(内膜) 2 最終と殺動物 42 康癌(内膜) 4 検査動物数 50 腺癌(内膜) 6 検査動物数 8 黄体腫 0 東拉膜細胞腫 0 大膜細胞腫 0 大膜細胞腫 0 大膜細胞腫 2 類体腫 0 大膜細胞腫 1 生殖索間薬腫瘍 0 大膜細胞腫 2 大膜細胞腫 2 大膜細胞腫 2 大膜細胞腫 2 大膜細胞腫 2 大膜細胞腫 2 大膜細胞腫 1 生殖索間薬腫瘍 0 合計(動物数)b 3	展覧(内膜) 2 2 2 2 2 2 36 2 36 2 36 2 36 2 36 2 3	死亡動物 腺癌(内膜) 2 2 2 最終と殺動物 検査動物数 42 36 38 腺癌(内膜) 4 2 4 全動物 検査動物数 50 50 50 腺癌(内膜) 6 4 6 検査動物数 8 14 12 黄体腫 0 0 0 要放映細胞腫 0 0 0 要放映細胞腫 0 0 0 生殖索間葉腫瘍 0 1 0 大膜細胞腫 1 1 3 生殖索間葉腫瘍 0 1 0 大腹細胞腫 2 0 0 大腹細胞腫 0 1 0 大腹細胞腫 0 1 0 大腹細胞腫 0 1 0 大腹細胞腫 0 0 0 異粒膜細胞腫 1 1 3 生殖索間葉腫瘍 0 2 0 合計(動物数)b 3 3 3 合計(動物数)b 3 3 3	死亡動物 腺癌(内膜) 2 2 2 5 最終と殺動物 検査動物数 42 36 38 28 腺癌(内膜) 4 2 4 6 全動物 検査動物数 50 50 50 原癌(内膜) 6 4 6 11 ⁸ 検査動物数 8 14 12 22 黄体腫 0 0 0 0 要性腫 0 0 0 0 要性腫 0 0 0 0 要性腫瘍 0 1 0 0 大膜細胞腫 0 1 0 0 大膜細胞腫 2 0 0 0 類体腫瘍 0 1 0 0 異粒膜細胞腫 0 1 0 0 大膜細胞腫 0 1 0 0 大膜細胞腫 0 1 0 0 大膜細胞腫 0 1 0

^{*:} p<0.05、**: p<0.01(Fisher の直接確率検定)

(3) 78 週間発がん性試験 (マウス)

ICR マウス (主群:一群雌雄各 51 匹、血漿中濃度測定群:一群雌雄各 5 匹)を用いた混餌 (原体:0、200、1,500 及び 7,000 ppm: 平均検体摂取量は表 2.3-30 参照) 投与による 78 週間発がん性試験が実施された。投与 4、24、52 及び 78 週に血漿中濃度測定群の各投与群雌雄各 5 匹から採血して、ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度が測定された (結果は表 2.3-31 参照)。

表 2.3-30:78 週間発がん性試験 (マウス) の平均検体摂取量

投与群		200 ppm	1,500 ppm	7,000 ppm
平均検体摂取量	雄	21	157	745
(mg/kg体重/日)	雌	22	172	820

^{§:} 統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。

a: 認められた腫瘍は、いずれも良性。

b: 生殖索間質由来腫瘍のいずれかを有する動物数

c: 生殖索間質由来腫瘍の合計数

性別	化合物		ブロフラニリト	<i>.</i> *	代謝物B			
1777.1	投与量	200 ppm	1,500 ppm	7,000 ppm	200 ppm	1,500 ppm	7,000 ppm	
	投与4週	0.02	0.09	0.15	0.95	5.96	10.2	
雄	投与24週	0.02	0.04	0.11	0.55	3.14	7.41	
公 庄	投与52週	0.02	0.07	0.17	0.60	4.27	8.46	
	投与78週	0.01	0.04	0.11	0.28	1.90	3.98	
	投与4週	0.01	0.09	0.20	1.15	6.37	13.0	
雌	投与24週	< 0.01	0.04	0.09	0.51	3.50	7.49	
此生	投与52週	0.01	0.11	0.19	0.53	4.42	7.79	
	投与78週	< 0.01	0.03	0.14	0.24	1.79	5.69	

表 2.3-31: ブロフラニリド及び代謝物 B の血漿中濃度 (mg/L)

検体投与により発生頻度の増加した腫瘍性病変は認められなかった。

本試験において、雄ではいずれの投与群においても毒性影響は認められず、7,000 ppm 投与群の雌で副腎絶対及び比重量増加が認められたので、無毒性量は雄で本試験の最高用量7,000 ppm (雄:745 mg/kg 体重/日)、雌で1,500 ppm (172 mg/kg 体重/日) であると考えられた。発がん性は認められなかった。

2.3.1.6 生殖·発生毒性

ブロフラニリド原体を用いて実施した繁殖毒性試験及び発生毒性試験の報告書を受領した。 食品安全委員会による評価(URL:

http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026) を以下(1)から(3)に転記する。

(1)2世代繁殖試験(ラット)

Wistar Hannover ラット (一群雌雄各 25 匹) を用いた混餌 (原体:0、30、100、300、1,500 及び 15,000 ppm: 平均検体摂取量は表 2.3-32 参照) 投与による 2 世代繁殖試験が実施された。

				1 4 15 4 1 1 4 .				
投-		30	100	300	1,500	15,000		
平均検体摂取量 (mg/kg体重/日)	P世代	雄	交配前	2.3	7.5	22.6	112	1,150
	PE1	雌	交配前	2.5	8.3	26.7	126	1,260
	F ₁ 世代	雄	交配前	2.6	8.6	25.6	128	1,290
	Г 1 世1 √	雌	交配前	2.7	9.1	28.7	137	1,390

表 2.3-32:2 世代繁殖試験 (ラット) の平均検体摂取量

a: 検体摂取量を一定に保つため、雌についてはP 及び F_1 世代とも哺育期間中の飼料中濃度が半分にされた。

各投与群で認められた毒性所見は表 2.3-33 に示されている。

本試験において、親動物では 100 ppm 以上投与群の雌雄で副腎皮質細胞空胞化 (東状帯及び球状帯)等、児動物では 1,500 ppm 以上投与群の雌雄で体重増加抑制等が認められたの

で、無毒性量は親動物で 30 ppm(P 雄: 2.3 mg/kg 体重/日、P 雌: 2.5 mg/kg 体重/日、 F_1 雄: 2.6 mg/kg 体重/日、 F_1 雌: 2.7 mg/kg 体重/日)、児動物で 300 ppm(P 雄: 22.6 mg/kg 体重/日、P 雌: 26.7 mg/kg 体重/日、 F_1 雄: 25.6 mg/kg 体重/日、 F_1 雄: 28.7 mg/kg 体重/日)であると考えられた。繁殖能に対する影響は認められなかった。

表 2.3-33:2 世代繁殖試験 (ラット) で認められた毒性原	表 2.3-33:2	世代繁殖試験	(ラット)) で認められた毒性所!	
-----------------------------------	------------	--------	-------	--------------	---------

	投与群	親:P、	児:F ₁	親:Fı、	児:F ₂	
	欠 子群	雄	雌	雄	雌	
	15,000 ppm		・GGT増加	• 体重増加抑制	・RBC 及びHb減少 ・肝絶対重量増加	
親	1,500 ppm 以上	・体重増加抑制(投与0 ~7日及び63~70日)・副腎皮質細胞肥大 (び漫性)	 ・体重増加抑制(哺育7 ~14 日) ・RBC、Hb及びHt減少 ・Ret増加 ・T.Bil増加 ・肝絶対及び比重量増加 ・脾臓絶対及び比重量増増加 ・増加 	・Chol増加 ・肝比重量増加	・副腎皮質細胞肥大 (び漫性)	
動物	300 ppm 以上	・副腎絶対重量増加	・Chol 加・肝及び脾絶対及び比重量増加・副腎皮質細胞肥大(び漫性)	・副腎皮質細胞肥大 (び漫性)	・Chol増加 ・肝比重量増加、卵巣 絶対及び比重量増加 ・卵巣間質腺細胞空胞 化	
	100 ppm 以上	・副腎比重量増加 ・副腎皮質細胞空胞化 (束状帯及び球状帯)	・副腎、卵巣絶対及び 比重量増加 ・副腎皮質細胞空胞化 (束状帯及び球状帯) ・卵巣間質腺細胞空胞 化	・副腎絶対及び比重量増加 ・副腎皮質細胞空胞化 (東状帯及び球状帯)	・副腎絶対及び比重量増加 [§] ・副腎皮質細胞空胞化 (東状帯及び球状帯)	
	30 ppm	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし	
	15,000 ppm					
児動物	1,500 ppm 以上	・体重増加抑制	・体重増加抑制 ・胸腺絶対及び比重量 減少	・体重増加抑制 ・胸腺絶対及び比重量 減少	・体重増加抑制 ・胸腺絶対及び比重量 減少	
	300 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし	毒性所見なし	

注)病理組織学的所見について、統計検定は実施されていない。

(2) 発生毒性試験 (ラット)

形性は認められなかった。

Wistar Hannover ラット (一群雌 25 匹) の妊娠 6~19 日に強制経口 (原体:0、100、300 及び 1,000 mg/kg 体重/日、溶媒:1% CMC 水溶液) 投与して、発生毒性試験が実施された。本試験において、いずれの投与群においても毒性影響は認められなかったので、無毒性量は母動物及び胎児とも本試験の最高用量 1,000 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇

^{§: 100} ppm 投与群では統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。

(3) 発生毒性試験(ウサギ)

NZW ウサギ (一群雌 25 匹) の妊娠 $6\sim28$ 日に強制経口 (原体:0、100、300 及び 1,000 mg/kg 体重/日、溶媒:1% CMC 水溶液) 投与して、発生毒性試験が実施された。

本試験において、いずれの投与群においても毒性影響は認められなかったので、無毒性量は母動物及び胎児とも本試験の最高用量 1,000 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。

2.3.1.7 生体機能への影響

ブロフラニリド原体を用いて実施した生体機能への影響に関する試験の報告書を受領した。 食品安全委員会による評価(URL:

http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026)を以下(1)に転記する。

(1) 一般薬理試験

ブロフラニリドのラット及びマウスを用いた一般薬理試験が実施された。 結果は表 2.3-34 に示されている。

表 2.3-34: 一般薬理試験の結果概要

畲	弌験の種類	動物種	動物数 /群	投与量 (mg/kg 体重) (投与経路)	最大無作用量 (mg/kg 体重)	最小作用量 (mg/kg 体重)	結果の概要
一般	多次元 観察法 (FOB 法)	Wistar Hannover (GALAS) ラット	雌雄 各 5	0、500、1,000、2,000 (経口)	2,000	I	影響なし
状態	多次元 観察法 (Irwin 法)	ICR マウス	雌雄 各 3	0、500、1,000、2,000 (経口)	2,000	I	影響なし
呼吸器系	呼吸状態 呼吸数	Wistar Hannover (GALAS) ラット	雄 5	0、500、1,000、2,000 (経口)	2,000	1	影響なし
循環器系	血圧 心拍数	Wistar Hannover (GALAS) ラット	雄 5	0、500、1,000、2,000 (経口)	2,000	_	影響なし

注)溶媒として1% MC 水溶液が用いられた。

2.3.1.8 その他の試験

ブロフラニリド原体を用いて実施した精巣、子宮及び卵巣腫瘍発生機序検討試験、下垂体 免疫組織化学染色、免疫毒性試験の報告書を受領した。

食品安全委員会による評価(URL:

http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026) を以下(1)から(2)に転記する。

^{-:}最小作用量は設定されなかった。

(1) 精巣、子宮及び卵巣腫瘍発生機序検討試験

ラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験 [2.3.1.5(2)] において、15,000 ppm 投 与群の雄で精巣間細胞腫、1,500 ppm 以上投与群の雌で子宮内膜腺癌及び卵巣の生殖索間質 由来腫瘍(黄体腫、莢膜細胞腫、顆粒膜細胞腫及び生殖索間葉腫瘍)の合計の発生頻度増 加が認められたことから、発生機序検討試験が行われた。

① 血中及び尿中ホルモン濃度測定並びに副腎機能検討試験(ラット)

Wistar Hannover ラット (主群:一群雌雄各 16 匹、衛星群:一群雌雄各 8 匹) に 90 日間混餌 (原体:0、500 及び 15,000 ppm:平均検体摂取量は表 2.3-35 参照) 投与して、主群では投与 10、45 及び 91 日に血中ホルモン濃度、投与 8、42 及び 85/88 日に尿中アルドステロン及びクレアチニン濃度がそれぞれ測定され、衛星群では投与 6 及び 90 日にACTH 刺激試験*が実施された。

表 2.3-35: 血中及び尿中ホルモン濃度測定並びに副腎機能検討試験(ラット)の平均検体摂取量

投与群		500 ppm	15,000 ppm	
平均検体摂取量 雄		32	972	
(mg/kg体重/日)	雌	36	1,130	

各投与群で認められた影響は表 2.3-36、血中 FSH、LH、プロゲステロン、テストステロン、エストラジオール、プロラクチン及びコルチコステロン濃度は表 2.3-37、尿中アルドステロン/クレアチニン比は表 2.3-38、ACTH 刺激試験結果は表 2.3-39 にそれぞれ示されている。

500 ppm 以上投与群の雌雄で認められた副腎皮質細胞 (東状帯及び球状帯) 並びに卵巣間質腺細胞及び莢膜細胞の空胞化は、オイルレッド O 染色により脂質の蓄積によるものであることが確認された。また、Filipin 染色 (コレステロール染色) の結果、副腎では明確な用量相関性はないが陽性の発生頻度増加及び程度増強が認められ、卵巣では対照群との間に染色性の差は認められなかった。

血中ホルモン濃度測定の結果、15,000 ppm 投与群の雄及び雌(発情休止期)並びに 500 ppm 以上投与群の雌で LH 増加、500 ppm 以上投与群の雄で投与 10 日にテストステロン増加、投与 45 及び 91 日にテストステロン減少、500 ppm 以上投与群の雌雄で尿中アルドステロン/クレアチニン比増加が、それぞれ認められた。FSH、プロゲステロン、エストラジオール、プロラクチン及びコルチコステロン濃度に検体投与の影響は認められなかった。

ACTH 刺激試験の結果、血中コルチコステロン濃度に検体投与の影響は認められなかった。

^{*}ACTH を単回筋肉内注射し、投与6日ではACTH 投与45分後、投与90日ではACTH 投与前及び投与45分後に それぞれ採血して、血中コルチコステロン濃度が測定された。

本試験の結果、ブロフラニリド投与により雌雄で軽度のLH増加が認められた。 また、ブロフラニリドはラット副腎皮質束状帯における糖質コルチコイド(コルチコステロン)産生に影響を及ぼさず、副腎皮質球状帯における鉱質コルチコイド(アルドステロン)産生を抑制しないと考えられた。

表 2.3-36: 血中及び尿中ホルモン濃度測定並びに副腎機能検討試験 (ラット) で認められた 影響

投与群	雄	雌
15,000 ppm		・体重増加抑制(投与1~15日以降)
500 ppm以上	・体重増加抑制(投与1~15日以降) ⁴ ・副腎絶対及び比重量増加 ・副腎皮質細胞空胞化(束状帯及び球状帯)	・副腎及び卵巣 [®] 絶対及び比重量増加 ・副腎皮質細胞空胞化(束状帯及び球状帯)、細胞 肥大 ・卵巣間質腺細胞及び莢膜細胞空胞化

^{§:5,000} ppm 投与群の絶対重量について、統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。

表 2.3-37: 血中 FSH、LH、プロゲステロン、テストステロン、エストラジオール、プロラクチン及びコルチコステロン濃度

	Manual Ma			投与群	
測定項目	性別a	検査日	0 ppm	500 ppm	15,000 ppm
		投与10日	5.82 ± 5.01	$3.77 \pm 2.28(65)$	5.19±2.97(89)
	雌	投与45日	4.85 ± 2.95	$5.46 \pm 3.80(113)$	$4.02\pm2.54(83)$
FSH		投与91日	4.61 ± 3.19	$6.83 \pm 6.91(148)$	$4.13 \pm 3.32(90)$
(ng/mL)		投与10日	3.64 ± 1.23	$3.02 \pm 0.40(83)$	3.19±0.66(88)
	雌 (発情休止期)	投与45日	3.42 ± 1.10	$4.45\pm3.21(130)$	$3.31 \pm 1.77(97)$
	(2011) 11 22/91/	投与91日	3.01 ± 1.12	$2.87 \pm 0.95(95)$	2.74±1.11(91)
		投与10日	2.3 ± 0.3	$2.5\pm0.3(109)$	$2.6\pm0.4(113)$
	雄	投与45日	2.0 ± 0.4	$2.3\pm0.5(115)$	2.6±0.8(130*)
		投与91日	1.2±0.5	$1.2 \pm 0.4 (100)$	$1.8 \pm 1.0(150)$
	雌	投与10日	2.2 ± 0.7	1.9±0.5(86)	$2.1\pm0.5(95)$
LH (ng/mL)		投与45日	1.8±0.3	2.2±0.6(130*)	2.4±0.5(133*)
(lig/lilL)		投与91日	1.8 ± 0.8	$1.9 \pm 0.4 (106)$	2.6±0.7(144*)
		投与10日	2.2 ± 0.7	1.9±0.4 (86)	$2.2\pm0.5(100)$
	雌 (発情休止期)	投与45日	1.8 ± 0.4	$2.3\pm0.7(128)$	2.4±0.5(133*)
	(2011) 11 22/91/	投与91日	1.9±0.9	$2.1\pm0.4(111)$	2.8±0.7(147*)
		投与10日	44.8 ± 20.1	$37.3 \pm 21.2(83)$	32.3±15.8(72*)
	雌	投与45日	53.7±21.2	58.8±20.1(109)	41.2±18.0(77)
プロゲステロン		投与91日	61.5 ± 30.9	55.2±27.9(90)	$52.1 \pm 27.9(85)$
(nmol/mL)	41.00	投与10日	47.0±21.8	37.0±22.7(79)	$33.0 \pm 18.7(70)$
	雌 (発情休止期)	投与45日	59.0±22.0	64.2±20.3(109)	41.3±16.6(70)
	(2011) 11 22/91)	投与91日	66.4±33.6	53.2±29.3(80)	$55.6 \pm 30.0(84)$

a: 15,000 ppm 投与群は、投与 1~8 日以降

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

		投与10日	11.3±4.4	29.4±27.3(260*)	29.4±28.1(260*)
テストステロン (nmol/L)	雄	投与45日	16.2 ± 12.7	13.0±7.0(80)	$12.5 \pm 5.8(77)$
(IIIIOI/L)		投与91日	15.7±11.3	9.8±2.6(62)	$12.1 \pm 7.2(77)$
		投与10日	203±51	196±31(97)	189±26(93)
	雌	投与45日	207±69	206±73(99)	217±59(105)
エストラジオール		投与91日	205 ± 87	242±96(118)	226±69(111)
(pmol/L)		投与10日	208±55	196±33(94)	$197 \pm 29(94)$
	雌 (発情休止期)	投与45日	216±77	$205 \pm 75(95)$	218±66(101)
	(2011)	投与91日	219±97	274±99(125)	234±74(107)
	雄	投与91日	3.9 ± 4.0	$6.7 \pm 11.7(172)$	$8.2 \pm 12.9(210)$
	雌	投与10日	15.5 ± 19.9	$9.3 \pm 10.8(60)$	$21.4 \pm 34.4(138)$
0 > 6		投与45日	22.2±41.5	14.3±16.6(64)	$39.2 \pm 88.1(177)$
プロラクチン (ng/mL)		投与91日	11.0 ± 10.1	$15.8 \pm 24.9(144)$	$7.5 \pm 15.5 (68*)$
(iig/iiiL)	雌 (発情休止期)	投与10日	12.2 ± 13.7	$6.5 \pm 6.7(53)$	$14.5 \pm 16.9(119)$
		投与45日	22.1 ± 46.7	$10.9 \pm 8.2(49)$	$9.7 \pm 12.1(44)$
		投与91日	11.6 ± 10.9	6.6±6.3(57)	8.0±17.1(69*)
		投与10日	143 ± 101	$141 \pm 107(99)$	$156 \pm 115(109)$
	雄	投与45日	212±75	188±81(88)	145±77(69*)
		投与91日	129±83	$190 \pm 107 (147)$	154±83(119)
		投与10日	345 ± 175	250±135(73)	281±151(119)
コルチコステロン (ng/mL)	雌	投与45日	422 ± 200	$471 \pm 240(112)$	357±245(85)
(lig/lilL)		投与91日	345±185	391±231(113)	470±292(136)
		投与10日	327±189	259±132(79)	346±139(106)
	雌 (発情休止期)	投与45日	472 ± 190	$460\pm228(98)$	$341 \pm 257(72)$
	(23/17/1 == 797)	投与91日	345 ± 185	346±202(100)	524±297(152)

平均値±標準偏差

():対照群を100とした場合の値

^{*:} p<0.05(Wilcoxon rank 検定)

a: 発情周期(発情休止期)は、採血前の膣スメア確認結果に基づき分類された。

測定項目	性別a	検査日	投与群		
则足填口	土力リー		0 ppm	500 ppm	15,000 ppm
		投与8日	1.8 ± 0.6	$2.0\pm0.5(111)$	$2.1\pm0.7(117)$
	雄	投与42日	1.2 ± 0.3	$1.4\pm0.4(117)$	$1.8\pm0.8(150)$
		投与85日	1.2 ± 0.4	$1.5 \pm 0.4(125)$	2.1±1.1(175*)
	雌 (発情休止期)	投与8日	4.1 ± 1.6	6.4±2.3(156*)	$5.0\pm2.0(122)$
アルドステロン/ クレアチニン比		投与42日	3.2 ± 1.1	4.0±1.0(125*)	$4.6\pm2.0(144)$
		投与85/88日	3.2 ± 1.4	$3.6 \pm 1.3(112)$	3.5±1.2(109*)
		投与8日	3.6 ± 1.1	$4.1\pm0.6(114)$	$4.0\pm1.5(111)$
		投与42日	3.1 ± 1.1	3.9±0.8(126*)	$3.6 \pm 1.2(116)$
		投与85/88日	2.6 ± 0.7	$3.4 \pm 1.4(131)$	$3.2 \pm 1.1(123)$

表 2.3-38: 尿中アルドステロン/クレアチニン比

平均値±標準偏差

():対照群を100とした場合の値

表 2.3-39: ACTH 刺激試験における血中コルチコステロン濃度

測定項目	性別	₩★□	投与群		
州足坝日	上力」	検査日	0 ppm	500 ppm	15,000 ppm
	雄 上 単	投与6日 (ACTH投与後)	210±70	162±117(77)	160±73(76)
		投与90日 (ACTH投与前)	109±5	124±120(114)	123±63(113)
コルチコステロン		投与90日 (ACTH投与後)	420±188	618±282(147)	738±180(176*)
(ng/mL)		投与6日 (ACTH投与後)	223±172	314±220(141)	237±113(106)
		投与90日 (ACTH投与前)	454±196	446±252(98)	636±399(140)
		投与90日 (ACTH投与後)	667±156	873±354(131)	1,200±377(178*)

平均值±標準偏差

(): 対照群を 100 とした場合の値 *: p<0.05 (Wilcoxon rank 検定)

② 下垂体の免疫組織化学的検査

ラットを用いた血中及び尿中ホルモン濃度測定並びに副腎機能検討試験[2.3.1.8(1)①] から得られた下垂体組織標本を用いて、免疫組織化学的染色により、下垂体前葉における LH の発現状態が確認された。また、免疫染色標本についてピアレビューが実施された。

下垂体前葉における LH 陽性細胞の割合は表 2.3-40、ピアレビュー結果は表 2.3-41 に 示されている。

500 ppm 以上投与群の雄で LH 陽性細胞の割合及び陽性反応の強度の低下が認められた。ピアレビューの結果、500 ppm 以上投与群の雄で LH 薄染細胞増加及び LH 濃染細胞

^{*:} p<0.05(Wilcoxon rank 検定)

a: 発情周期(発情休止期)は、採尿前の膣スメア確認結果に基づき分類された。

減少、15,000 ppm 投与群で LH 陽性細胞における細胞質空胞化の程度増加が認められた。 雌では、いずれの投与群においても LH 細胞に検体投与の影響は認められなかった。

下垂体ホルモン分泌が盛んな場合、産生細胞でのホルモンの染色性低下がしばしば認められることから、本試験の結果、ブロフラニリド投与により、雄ラットでは用量反応を伴い下垂体前葉のLH合成及び分泌が亢進される可能性が考えられた。

WH DII	投与量	LH 陽性細胞の割合				
性別	仅 分 里	5 %~25 %	25 %~50 %	50 %~75 %		
	検査標本数	12	12	12		
雄	0 ppm	0	0	12		
松 胜	500 ppm	2	2	8		
	15,000 ppm	2	3	7		
	検査標本数	12	12	12		
雌	0 ppm	0	1	11		
此任	500 ppm	0	1	11		
	15,000 ppm	0	0	12		

表 2.3-41:ピアレビュー結果

性別	投与量	濃染細胞の比率(%)	陽性細胞の出現率(%)	空胞化グレードa
	0 ppm	66.7	19.6	1.4
雄	500 ppm	60.8	16.7	1.8
	15,000 ppm	37.5	16.7	2.3
	0 ppm	75.0	14.6	1.0
雌	500 ppm	73.8	13.5	1.0
	15,000 ppm	79.2	15.8	1.0

注) いずれも平均値 (n=12)

<精巣、子宮及び卵巣腫瘍発生機序のまとめ>

[2.3.1.8(1)①及び②] の結果から、雄ラットにおける精巣間細胞腫の発生頻度増加は、ステロイド合成阻害によるテストステロン減少及びこれに伴うネガティブフィードバックによる LH 分泌増加によるものと考えられた。

雌ラットにおける卵巣の生殖索間質由来腫瘍の発生頻度増加は、卵巣間質に脂肪変性が 認められていることから、ステロイド合成阻害等の関与が考えられた。

また、子宮内膜腺癌の発生頻度増加は、副腎皮質細胞及び卵巣間質腺細胞空胞化並びに 卵巣卵胞のう胞増加を伴い認められていることから、検体投与による持続的なホルモン不 均衡に起因する可能性が考えられた。

a:0=所見なし、1=軽微、2=軽度、3=中等度、4=顕著

(2) 28 日間免疫毒性試験 (ラット)

Wistar Hannover ラット (一群雄 10 匹) を用いて、ブロフラニリドを混餌 (原体: 0、1,200、4,000 及び 12,000 ppm: 平均検体摂取量は表 2.3-42 参照) 投与し、投与 23 日にヒツジ赤血球を単回腹腔内投与して、28 日間免疫毒性試験が実施された。

表 2.3-42:28 日間免疫毒性試験 (ラット) の平均検体摂取量

投与群		1,200 ppm	4,000 ppm	12,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg体重/日)	雄	104	344	1,020

いずれの投与群においても検体投与の影響は認められなかった。

本試験条件下において免疫毒性は認められなかった。

2.3.1.9 代謝物及び原体混在物の毒性

ブロフラニリドの代謝物 B、代謝物 C 及び代謝物 D 並びに原体混在物 1、原体混在物 2、原体混在物 3 及び原体混在物 4 を用いて実施した急性経口毒性試験及び復帰突然変異試験、原体混在物 4 を用いて実施した 28 日間亜急性毒性試験の報告書を受領した。

食品安全委員会による評価(URL:

http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026) を以下(1)から(3)に転記する。

(1) 急性毒性試験

代謝/分解物 B、C 及び D 並びに原体混在物 1、2、3 及び 4 のラットを用いた急性経口毒性試験が実施された。

結果は表 2.3-43 に示されている。

表 2.3-43: 急性経口毒性試験結果概要(代謝/分解物及び原体混在物)

THE HAN FIF	動物種	LD ₅₀ (mg/kg体重)	知察された点仏
被験物質	性別・匹数	雌	観察された症状
B ^a	Wistar Hannoverラット 雌5匹	>2,000	症状及び死亡例なし
Ca	Wistar Hannoverラット 雌5匹	>2,000	白色便 死亡例なし
D_p	Wistar Hannoverラット 雌6匹	>2,000	全身状態悪化及び立毛 (投与2~4時間後) 死亡例なし
原体混在物 1ª	Wistar Hannoverラット 雌6匹	>2,000	白色便 死亡例なし
原体混在物 2ª	Wistar Hannoverラット 雌6匹	>2,000	症状及び死亡例なし
原体混在物 3ª	Wistar Hannoverラット 雌6	>2,000	白色便 死亡例なし
原体混在物 4 ^a	Wistar Hannoverラット 雌6匹	>2,000	症状及び死亡例なし

a:上げ下げ法による評価。溶媒として 0.5 % MC 水溶液が用いられた。

b: 毒性等級法による評価。溶媒としてコーン油が用いられた。

(2) 遺伝毒性試験

代謝物 B (動物及び植物由来)、代謝/分解物 C (動物、植物及び水中由来)及び分解物 D (水中由来)、原体混在物 1、2、3 及び 4 の細菌を用いた復帰突然変異試験、原体混在物 4 のチャイニーズハムスター肺由来線維芽細胞 (CHL/IU)を用いた染色体異常試験並びにラットを用いた小核試験が実施された。

結果は表 2.3-44 に示されている。

代謝/分解物 B、C 及び D 並びに原体混在物 1、2 及び 3 については、全て陰性であった。 原体混在物 4 については染色体異常試験で陽性(構造異常誘発)であったが、復帰突然変 異試験及び小核試験ではいずれも陰性であった。

表 2.3-44: 遺伝毒性試験結果概要 (代謝/分解物及び原体混在物)

	44 . 怎	引み母注記	、験結果概要(代謝/分解物及)	0751年在111707	,
被験 物質	試験		対象	処理濃度・投与量	結果
В		復帰突然変異試験	S. typhimurium (TA98、TA100、TA1535、TA1537株) E. coli (WP2 uvrA/pKM101株)	プレインキュベーション法 S. typhimurium TA98株: 2.44~78.1 μg/プレート(-S9) 313~5,000 μg/プレート(+S9) TA100株: 39.1~1,250 μg/プレート(-S9) 313~5,000 μg/プレート(+S9) TA1535株: 313~5,000 μg/プレート(+/-S9) TA1537株: 9.77~313 μg/プレート(-S9) 313~5,000 μg/プレート(+S9) E.coli: 313~5,000 μg/プレート(+/-S9)	陰性
С	in vitro	復帰突然変異試験	S. typhimurium (TA98、TA100、TA1535、TA1537株) E. coli (WP2 uvrA/pKM101株)	プレインキュベーション法 S. typhimurium TA100株: 9.77~313 μg/プレート(-S9) 313~5,000 μg/プレート(+S9) TA98、1535、1537株: 313~5,000 μg/プレート(+/-S9) E.coli: 313~5,000 μg/プレート(+/-S9)	陰性
D		復帰突然 変異試験	S. typhimurium (TA98、TA100、TA1535、TA1537株) E. coli (WP2 uvrA株)	①33~5,000 µg/プレート(+/-S9) (プレート法) ②33~5,000 µg/プレート(+/-S9) (プレインキュベーション法)	陰性
原体 混在物1		復帰突然 変異試験	S. typhimurium (TA98、TA100、TA1535、TA1537株) E. coli (WP2 uvrA/pKM101株)	プレインキュベーション法 19.5~313 µg/プレート(-S9) 78.1~1,250 µg/プレート(+S9)	陰性
原体 混在物2	in vitro	復帰突然 変異試験	S. typhimurium (TA98、TA100、TA1535、TA1537株) E. coli (WP2 uvrA/pKM101株)		陰性
原体 混在物3		復帰突然 変異試験	S. typhimurium (TA98、TA100、TA1535、TA1537株) E. coli (WP2 uvrA/pKM101株)	プレインキュベーション法 4.88~78.1 µg/プレート(-S9) 78.1~1,250 µg/プレート(+S9)	陰性

	12		S. typhimurium (TA98、TA100、TA1535、TA1537株) E. coli (WP2 uvrA/pKM101株)	プレインキュベーション法 313~5,000 µg/プレート(+/-S9)	陰性
原体 混在物4	in vitro	染色体 異常試験	チャイニーズハムスター 肺由来線維芽細胞 (CHL/IU)	① 1,000~2,000 μg/mL(-S9) 1,250~1,750 μg/mL(+S9) (6 時間処理) ② 1,500~2,000 μg/mL(-S9) (24 時間処理) ③ 1,500~2,000 μg/mL(-S9) (24 時間処理)	陽性 a
	in vivo	小核試験	SD ラット(骨髄細胞) (一群雄5匹)	500、1,000及び2,000 mg/kg 体重 (24時間間隔で2回経口投与、最終投与24時 間後に標本作製)	陰性

注) +/-S9: 代謝活性化系存在下及び非存在下

(3) 短期毒性試験

① 28 日間亜急性毒性試験(原体混在物 4、ラット)

SD ラット [主群:一群雌雄各 5 匹、回復群 (0 及び 1,000 mg/kg 体重投与群):一群雌雄各 5 匹]を用いた強制経口 (原体混在物 4:0、110、330 及び 1,000 mg/kg 体重/日、溶媒:0.5% MC 水溶液) 投与による 28 日間亜急性経口毒性試験が実施された。対照群及び 1,000 mg/kg 体重/日投与群については、投与期間終了後に 2 週間の回復期間が設けられた。

1,000 mg/kg 体重/日投与群の雌で前胃境界縁扁平上皮過形成が認められたが、回復群では認められなかった。

本試験において、雄ではいずれの投与群においても毒性影響は認められず、1,000 mg/kg 体重/日投与群の雌で前胃境界縁扁平上皮過形成が認められたので、無毒性量は雄で本試 験の最高用量 1,000 mg/kg 体重/日、雌で 330 mg/kg 体重/日であると考えられた。

2.3.1.10 製剤の毒性

ブロフレア SC(ブロフラニリド 5.0 %水和剤) 及びブロフレア 20SC(ブロフラニリド 20.0 %水和剤) を用いて実施した急性経口毒性試験、急性経皮毒性試験、急性吸入毒性試験、皮膚刺激性試験、眼刺激性試験及び皮膚感作性試験の報告書を受領した。

結果の概要を表 2.3-45 及び表 2.3-46 に示す。

表 2.3-45: ブロフレア SC の急性毒性試験の結果概要

試験	動物種	結果概要
急性経口毒性	ラット	LD ₅₀ 雌>2,000 mg/kg 体重 毒性徴候なし
急性経皮毒性	ラット	LD ₅₀ 雌雄 : >2,000 mg/kg 体重 毒性徴候なし
急性吸入毒性	ラット	LC ₅₀ 雌雄:>2.33 mg/L 自発運動低下、不規則呼吸、被毛の汚れ、液状便 等
皮膚刺激性	ウサギ	刺激性なし

 $^{^{}a}$: -S9 の 24 時間処理条件下、1,500 μ g/mL 以上の沈殿用量で染色体の構造異常の軽度増加(最大頻度 6.3 %)が認められた。

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

眼刺激性	ウサギ	刺激性なし
皮膚感作性(Buehler 法)	モルモット	感作性なし

表 2.3-46: ブロフレア 20SC の急性毒性試験の結果概要

試験	動物種	結果概要
急性経口毒性	ラット	LD ₅₀ 雌>2,000 mg/kg 体重 観察された症状: 粘液便
急性経皮毒性	ラット	LD ₅₀ 雌雄:>2,000 mg/kg 体重 毒性徴候なし
急性吸入毒性	ラット	LC ₅₀ 雌雄:>5.41 mg/L 体重低下
皮膚刺激性	ウサギ	弱い刺激性あり 紅斑が認められたが、症状は 72 時間以内に消失
眼刺激性	ウサギ	弱い刺激性あり 虹彩の充血、結膜の発赤及び浮腫が認められたが、症状は 24 時 間以内に消失
皮膚感作性(Buehler 法)	モルモット	感作性なし

2.3.2 ADI 及び ARfD

食品安全委員会による評価(URL:

http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026)を以下に転記する。 (本項末まで)

各試験における無毒性量等は表2.3-47に示されている。

表2.3-47: 各試験における無毒性量等

		(18/10年9月) 8				
動物種	試験	投与量	無毒性量	最小毒性量	備考1)	
2010年	p. 4000	(mg/kg体重/日)	(mg/kg体重/日)	(mg/kg体重/日)	VII. 3	
	90日間	0、500、1,500、5,000、15,000 ppm	雄:—	雄:35	雌雄:副腎皮質細胞空胞化	
	亜急性	雄:0、35、104、345、1,110			(東状帯及び球状帯)	
	毒性試験	雌: 0、41、126、418、1,240	雌: —	雌: 41	等	
	90日間				雌雄:毒性所見なし	
	亜急性	0、1,500、5,000、15,000 ppm	雄: 1,040	雄:—	PHEAR : #411/1/10/3 U	
	神経毒性	雄:0、99、320、1,040	雌:1,140	雌:一	 (亜急性神経毒性は認めら	
	試験	雌:0、118、423、1,140	ро <u>н</u> . 1,140		れない)	
	p voc	慢性毒性群:			40,34	
		0、30、100、300、1,500、15,000 ppm	雄:1.7	雄:5.7		
ラット		0,30,100,300,1,300,13,000 ppiii	雌: —	雌:5.9		
		発がん性群:	此	ル出 ・ 3.9	雄:副腎皮質細胞空胞化	
	2年間	2 = · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	(発がん性群)	(発がん性群)	(全領域)	
		0、100、300、1,500、15,000 ppm 慢性毒性群:	雄:4.5	雄:14	雌:卵巣間質腺細胞空胞化	
			'		(雄で精巣間細胞腫、雌	
		雄:0、1.7、5.7、16、84、822	雌:—	雌:5.9	で卵巣生殖索間質由来	
	开石 武映	雌:0、2.1、7.2、20、104、1,130	(相 怀 丰 怀 张)	(相, 此, 丰, 此, 张)	腫瘍の合計及び子宮内	
		7/4 1	(慢性毒性群)	(慢性毒性群)	膜腺癌) ²⁾	
		発がん性群:	雄:1.7	雄:5.7		
		雄:0、4.5、14、70、709	雌: 7.2	雌:20		
		雌:0、5.9、19、95、953				

		0、30、100、300、1,500、15,000 ppm	親動物	親動物	
ラット	2世代 繁殖 試験	P 雄: 0、2.3、7.5、22.6、112、1,150 P 雌: 0、2.5、8.3、26.7、126、1,260 F ₁ 雄: 0、2.6、8.6、25.6、128、1,290 F ₁ 雌: 0、2.7、9.1、28.7、137、1,390	P 雄: 2.3 P 雌: 2.5 F ₁ 雄: 2.6 F ₁ 雌: 2.7 児動物 P 雄: 22.6 P 雌: 26.7 F ₁ 雄: 25.6 F ₁ 雌: 28.7	P 雄: 7.5 P 雌: 8.3 F ₁ 雄: 8.6 F ₁ 雌: 9.1 児動物 P 雄: 112 P 雌: 126 F ₁ 雄: 128 F ₁ 雌: 137	親動物: 雌雄:副腎皮質細胞空胞化 (東状帯及び球状帯) 児動物:体重増加抑制等 (繁殖能に対する影響は認 められない)
	発生毒性 試験	0、100、300、1,000	母動物:1,000 胎児:1,000	母動物:- 胎児:-	母動物及び胎児: 毒性所見なし (催奇形性は認められない)
	90日間 亜急性 毒性試験	0、200、1,500、7000 雄:0、26.3、199、955 雌:0、32.3、230、1,150	雄: 955 雌: 230	雄:一 雌:1,150	雄:毒性所見なし 雌:副腎皮質細胞空胞化(束 状帯)等
マウス	78週間	0、200、1,500、7,000 ppm 雄:0、21、157、745 雌:0、22、172、820	雄:745 雌:172	雄:一 雌:820	雄:毒性所見なし 雌:副腎絶対及び比重量増加 (発がん性は認められない)
ウサギ	発生毒性 試験	0、100、300、1,000	母動物:1,000 胎児:1,000	母動物:- 胎児:-	母動物及び胎児: 毒性所見なし (催奇形性は認められない)
	90日間 亜急性 毒性試験	0、100、300、1,000	雄:300 雌:300	雄:1,000 雌:1,000	雌雄:肝絶対及び比重増加 等
イヌ	1年間 慢性 毒性試験	0、100、300、1,000	雄:— 雌:100	雄:100 雌:300	雄:副腎皮質細胞肥大(束状帯、び慢性)等 雌:副腎絶対及び比重量増加等
		ADI	NOAEL: 1.7 SF: 100 ADI: 0.017		
	A	DI設定根拠資料	ラット2年間慢性群	毒性試験/発がん	性併合試験のうち慢性毒性

ADI: 許容一日摂取量、NOAEL: 無毒性量、SF: 安全係数

- -: 無毒性量又は最小毒性量は設定できなかった。
- 1):最小毒性量で認められた主な毒性所見を記した。

各試験で得られた無毒性量又は最小毒性量のうち最小値は、ラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験のうちの慢性毒性群の無毒性量 1.7 mg/kg 体重/日であり、これを根拠とした場合、許容一日摂取量(ADI) は安全係数 100 で除した 0.017 mg/kg 体重/日と算出され

^{2):} ラットを用いた2年間慢性毒性/発がん性併合試験において、雄で精巣間細胞腫、雌で子宮内膜腺癌及び卵巣の生殖索間質由来腫瘍(黄体腫、莢膜細胞腫、顆粒膜細胞腫及び生殖索間葉腫瘍)の合計の発生頻度増加が認められたが、腫瘍の発生機序は遺伝毒性によるものとは考え難く、評価に当たり閾値を設定することは可能であると考えられた。

る。一方、ラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験の発がん性群の雌において無毒性量が設定できず、最小毒性量は 5.9 mg/kg 体重/日であった。最小毒性量で認められた卵巣間質腺細胞空胞化の程度(軽微~中等度)及び発生頻度から、この最小毒性量を根拠に ADIを設定した場合の追加の安全係数には 3 が適当であると考えられ、ADI は 0.019 mg/kg 体重/日と算出される。また、イヌを用いた 1 年間慢性毒性試験の雄において無毒性量が設定できず、最小毒性量は 100 mg/kg 体重/日であった。この最小毒性量はラットを用いた反復投与試験で得られた無毒性量又は最小毒性量と比べて高用量であり、イヌを用いた 1 年間慢性毒性試験の雄の最小毒性量で認められた副腎皮質細胞肥大(束状帯、び漫性)等の程度は軽微であり、病理組織学的所見は 1 例のみに認められたものであった。これらのことから、ラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験のうちの慢性毒性群の無毒性量を根拠として、ADIを 0.017 mg/kg 体重/日と設定しても安全性は担保されるものと考えられた。

以上から、食品安全委員会は、ラットを用いた2年間慢性毒性/発がん性併合試験のうちの慢性毒性群の無毒性量1.7 mg/kg体重/日を根拠として、安全係数100で除した0.017 mg/kg体重/日をADIと設定した。

また、ブロフラニリドの単回経口投与等により生ずる可能性のある毒性影響は認められなかったことから、急性参照用量(ARfD)は設定する必要がないと判断した。

ADI 0.017 mg/kg 体重/日

(ADI 設定根拠資料) 慢性毒性/発がん性併合試験のうち慢性毒性群

(動物種) ラット(期間) 1年間(投与方法) 混餌

(無毒性量) 1.7 mg/kg 体重/日

(安全係数) 100

ARfD 設定の必要なし

2.3.3 水質汚濁に係る農薬登録保留基準

2.3.3.1 農薬登録保留基準値

中央環境審議会土壌農薬部会農薬小委員会による評価結果(URL:

http://www.env.go.jp/water/var/www/html/_iq_import/water/dojo/noyaku/odaku_kijun/rv/broflanilide.pdf) を以下に転記する。(本項末まで)

表 2.3-48: 水質汚濁に係る農薬登録保留基準値

農薬登録保留基準値	0.045 mg/L				
以下の算出式により農	薬登録保留基準	値を算出した。	1)		
0.017(mg/kg 体重/日) ADI	× 53.3 (kg) 平均体重		2 (L/人/日) = 飲料水摂取量	0.0453 (m	ng/L)

¹⁾ 農薬登録保留基準値は、体重 53.3 kg、飲料水を1日2L、有効数字は2桁(ADIの有効数字桁数)とし、3 桁目を切り捨てて算出した。

2.3.3.2 水質汚濁予測濃度と農薬登録保留基準値の比較

水田以外使用について申請されている使用方法に基づき算定した水質汚濁予測濃度(水濁 PEC_{tierl})は、 3.5×10^{-6} mg/L(2.5.3.4 参照)であり、農薬登録保留基準値 0.045 mg/L を下回っている。

2.3.4 使用時安全性

(1) ブロフレア SC (ブロフラニリド 5.0 %水和剤)

ブロフレア SC を用いた急性経口毒性試験 (ラット) における半数致死量 (LD₅₀) は >2,000 mg/kg 体重であることから、急性経口毒性に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

ブロフレア SC を用いた急性経皮毒性試験(ラット)における LD_{50} は>2,000 mg/kg 体重であり、供試動物に毒性徴候が認められなかったことから、急性経皮毒性に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

ブロフレアSCを用いた急性吸入毒性試験(ラット)における半数致死濃度(LC₅₀)は >2.33 mg/Lであり、供試動物に毒性徴候が認められた。推定無毒性量は農薬散布時の推定吸入量よりも十分大きいため、急性吸入毒性に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

ブロフレアSCを用いた皮膚刺激性試験(ウサギ)の結果、刺激性なしであったことから、 皮膚刺激性に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

ブロフレアSCを用いた眼刺激性試験(ウサギ)の結果、刺激性なしであったことから、 眼刺激性に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

ブロフラニリド原体を用いた皮膚感作性試験(モルモット及びマウス)及びブロフレア SC を用いた皮膚感作性試験(モルモット)の結果は陰性であったことから、皮膚感作性に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

以上の結果から、使用時安全に係る注意事項(農薬登録申請書第9項 人畜に有毒な農薬については、その旨及び解毒方法)は、次のとおりと判断した。

通常の使用方法ではその該当がない

なお、これらの内容は、令和元年 11 月 22 日に開催された農薬使用時安全性検討会において了承された。

(URL: http://www.acis.famic.go.jp/shinsei/gijigaiyou/shiyoujiR1_2.pdf)

(2) ブロフレア 20SC (ブロフラニリド 20.0 %水和剤)

ブロフレア 20SC を用いた急性経口毒性試験 (ラット) における LD₅₀ は>2,000 mg/kg 体重であることから、急性経口毒性に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

ブロフレア 20SC を用いた急性経皮毒性試験(ラット)における LD_{50} は>2,000 mg/kg 体重であり、供試動物に毒性徴候が認められなかったことから、急性経皮毒性に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

ブロフレア20SCを用いた急性吸入毒性試験(ラット)におけるLC₅₀は>5.41 mg/Lであり、 供試動物に毒性徴候が認められた。推定無毒性量は農薬散布時の推定吸入量よりも十分大 きいため、急性吸入毒性に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

ブロフレア20SCを用いた皮膚刺激性試験(ウサギ)の結果、刺激性があり、72時間以内に回復したことから、皮膚に付着しないように注意すること、皮膚に付着した場合の処置(石けんでよく洗う)についての注意事項の記載が必要であると判断した。

ブロフレア20SCを用いた眼刺激性試験(ウサギ)の結果、刺激性が認められたが、24時間以内に回復し、刺激の程度が弱いことから、眼刺激性に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

ブロフラニリド原体を用いた皮膚感作性試験(モルモット及びマウス)及びブロフレア 20SC を用いた皮膚感作性試験(モルモット)の結果は陰性であったことから、皮膚感作性 に係る注意事項の記載は必要ないと判断した。

以上の結果から、使用時安全に係る注意事項(農薬登録申請書第9項 人畜に有毒な農薬については、その旨及び解毒方法)は、次のとおりと判断した。

本剤は皮膚に対して弱い刺激性があるので皮膚に付着しないよう注意すること。付着した場合には直ちに石けんでよく洗い落とすこと。

なお、これらの内容は、令和元年 11 月 22 日に開催された農薬使用時安全性検討会において了承された。

(URL: http://www.acis.famic.go.jp/shinsei/gijigaiyou/shiyoujiR1_2.pdf)

2.4 残留

2.4.1 残留農薬基準値の対象となる化合物

2.4.1.1 植物代謝

本項には、残留の観点から実施した植物代謝の審査を記載した。

アニリンのベンゼン環の炭素を 14 C で均一に標識したブロフラニリド(以下「[b-ben- 14 C]ブロフラニリド」という。)及び安息香酸のベンゼン環の炭素を 14 C で均一に標識したブロフラニリド(以下「[c-ben- 14 C]ブロフラニリド」という。)を用いて実施した水稲、だいず、だいこん、キャベツ、トマト及び茶における植物代謝試験の報告書を受領した。

放射性物質濃度及び代謝物濃度は、特に断りがない場合はブロフラニリド換算で表示した。

* CF₃
O Rr CF₃

[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリド

*:14C 標識の位置

(1) 水稲

水稲(品種:コシヒカリ)における植物代謝試験は壌土 (pH 4.3 (CaCl₂)、有機炭素含有量 (OC) 0.63 %)を充填した容器 (0.05 m²、土壌深さ 20 cm)を用いて温室内で実施した。容器当たり 5 株を移植し、最終採取の 1 月前まで水深 3 cm に湛水状態を維持した。

[b-ben- 14 C]ブロフラニリド及び[c-ben- 14 C]ブロフラニリドをそれぞれ 5%フロアブルに調製し、移植時(2 葉期)に 300 g/ha の用量で田面水に処理し、移植 73 日後(生育期)に 150 g/ha の用量で茎葉に散布した。茎葉処理 13 日後(登熟期)に茎葉を、32 日後(収穫期)に玄米、もみ殼及び稲わらを採取した。

茎葉はアセトニトリルで表面洗浄後、玄米、もみ殼及び稲わらは直接、ドライアイス中で均質化し、アセトニトリル/水(4/1(v/v))で抽出した。表面洗浄画分及び抽出画分は液体シンチレーションカウンター(LSC)で放射能を測定後、高速液体クロマトグラフィー(HPLC)で放射性物質を定量し、HPLC及び薄層クロマトグラフィー(TLC)で同定した。抽出残渣は燃焼後、LSCで放射能を測定した。

玄米の抽出残渣はリン酸緩衝液 (pH 6.9) で洗浄後、 α -アミラーゼ、プロテアーゼ及び 3 M 硫酸 (H_2SO_4) で処理し、LSC で放射能を測定した。もみ殻及び稲わらの抽出残渣は 0.1 M 塩酸 (HCI)、1 %エチレンジアミン四酢酸ナトリウム (Na_2EDTA)、ジメチルスルホキシド (DMSO)、24 %水酸化カリウム (KOH) 及び 72 % H_2SO_4 で処理し、LSC で放射能を測定した。全ての試料の最終的な残渣は燃焼後、LSC で放射能を測定した。

稲における放射性物質濃度の分布を表 2.4-1 に示す。

茎葉中の総残留放射性物質濃度 (TRR) は $1.2\sim1.9$ mg/kg であり、アセトニトリル表面洗浄により $66\sim81$ %TRR、アセトニトリル/水抽出により $17\sim30$ %TRR が回収された。

玄米中の TRR は、[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリド処理では $0.021 \, \text{mg/kg}$ 、[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリド処理では $0.11 \, \text{mg/kg}$ であり、アセトニトリル/水抽出によりそれぞれ $18 \, \text{%TRR}$ 及び $85 \, \text{%TRR}$ が回収された。[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリド処理の抽出残渣中の放射性物質は α -アミラーゼ処理画分及び H_2SO_4 処理画分に分布しており、[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリド由来の 14 C はデンプン等の天然成分に取り込まれていると考えられた。

もみ殻中の TRR は $5.5\sim6.8$ mg/kg であり、アセトニトリル/水抽出により $96\sim98$ % TRR が回収された。

稲わら中の TRR は $4.2\sim4.9$ mg/kg であり、アセトニトリル/水抽出により $97\sim98$ %TRR が回収された。

表 2.4-1: 稲における放射性物質濃度の分布

表 2.4-1:稲における放		支票処理13日後)		
	[b-ben- ¹⁴ C]ブ		[c-ben- ¹⁴ C]ブロ	コフラニリド
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR
表面洗浄画分	0.929	80.8	1.26	66.0
抽出画分	0.198	17.2	0.567	29.7
抽出残渣	0.022	2.0	0.083	4.3
TRR	1.15	_	1.91	_
	玄米(茎葉処理32日後)		
	[b-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリド	[c-ben- ¹⁴ C]ブロ	ュフラニリド
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR
抽出画分	0.018	85.4	0.020	18.1
抽出残渣	0.003	14.6	0.091	81.9
洗浄緩衝液	ND	_	0.003	2.9
α-アミラーゼ処理画分	0.001	2.9	0.024	21.4
プロテアーゼ処理画分	ND	_	0.008	7.2
H ₂ SO ₄ 還流画分	ND	_	0.046	41.6
残渣	0.001	4.8	0.009	8.3
TRR	0.021	_	0.111	_

	もみ意	战(茎葉処理32日後)				
	[b-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリド	[c-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリド		
	mg/kg	mg/kg	mg/kg	%TRR		
抽出画分	5.38	97.6	6.45	95.6		
抽出残渣	0.134	2.4	0.295	4.4		
HCl処理画分	0.007	0.1	0.014	0.2		
Na ₂ EDTA処理画分	0.003	0.1	0.007	0.1		
DMSO処理画分	0.087	1.6	0.133	2.0		
KOH処理画分	0.039	0.7	0.065	1.0		
H ₂ SO ₄ 処理画分	ND	_	0.042	0.6		
残渣	0.020	0.4	0.047	0.7		
TRR	5.51	_	6.75	_		
	稲わら	(茎葉処理32日後)				
	[b-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリド	[c-ben- ¹⁴ C]ブ	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド		
	mg/kg	mg/kg	mg/kg	%TRR		
抽出画分	4.79	98.0	4.03	96.6		
抽出残渣	0.099	2.0	0.140	3.4		
HCl処理画分	0.003	0.1	0.005	0.1		
Na ₂ EDTA処理画分	0.001	0.0	0.002	0.1		
DMSO処理画分	0.036	0.7	0.040	1.0		
KOH処理画分	0.031	0.6	0.041	1.0		
H ₂ SO ₄ 処理画分	0.006	0.1	0.023	0.5		
残渣	0.010	0.2	0.022	0.5		
TRR	4.89	_	4.17	_		

ND:検出限界未満 -: 算出せず

稲におけるブロフラニリド及び代謝物の定量結果を表 2.4-2 に示す。

稲における主要な残留成分はブロフラニリドであり、玄米で $13\sim64~\%$ TRR、もみ殻で $83\sim90~\%$ TRR、稲わらで $85\sim87~\%$ TRR、茎葉で $84\sim87~\%$ TRR であった。その他に代謝物 B 及び代謝物 C が検出されたが、いずれも 10~% TRR 未満であった。

表 2.4-2: 稲におけるブロフラニリド及び代謝物の定量結果

[b-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド										
茎葉		玄	玄米		もみ殻		o6			
	(茎葉処理	里13日後)		(茎葉処理32日後)						
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR		
ブロフラニリド	0.996	86.7	0.013	63.6	4.57	82.9	4.13	84.7		
代謝物B	0.043	3.8	0.001	5.0	0.214	3.9	0.264	5.4		
代謝物C	0.045	3.9	0.002	8.5	0.251	4.6	0.229	4.7		
未同定代謝物	0.045	0.045 3.9 ND - 0.256 4.6 0.162 3.3								

[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド										
茎葉		葉	玄米		5 ₹	もみ殻		oß		
	(茎葉処理	里13日後)		(茎葉処理32日後)						
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR		
ブロフラニリド	1.60	83.7	0.014	12.5	6.09	90.2	3.63	87.2		
代謝物B	0.066	3.5	0.001	0.8	0.184	2.7	0.194	4.7		
代謝物C	0.075	4.0	0.002	1.4	0.276	4.1	0.166	4.0		
未同定代謝物	0.093	4.9	0.002	1.5	0.059	0.9	0.087	2.1		

ND:検出限界未満 -: 算出せず

(2) だいず

だいず (品種: Woodruff) における植物代謝試験は砂壌土 (pH 6.1、有機物含有量 (OM) 1.3%) の屋外ほ場で実施した。[b-ben- 14 C]ブロフラニリド及び[c-ben- 14 C]ブロフラニリドをそれぞれ 20%フロアブルに調製し、花芽形成期 (BBCH 49~51) 及び 1 回目処理 77 日後 (子実肥大初期 (BBCH 79~81)) に 25 g ai/ha の用量で合計 2 回散布した。1 回目処理 21 日後 (BBCH 69 (開花終期)) 及び 35 日後 (BBCH 74 (莢伸長期)) に茎葉を、2 回目処理 12 日後 (成熟期) に種子を採取した。1 回目処理 35 日後の茎葉は採取後、乾燥させた(乾燥茎葉)。

種子は燃焼後、LSC で放射能を測定した。

茎葉及び乾燥茎葉はアセトニトリルで表面洗浄後、ドライアイス中で均質化し、アセトニトリル及びアセトニトリル/水(1/1 (v/v))で抽出後、混合した。表面洗浄画分及び抽出画分は LSC で放射能を測定後、HPLC で放射性物質を定量し、HPLC、液体クロマトグラフィー質量分析(LC-MS)及び TLC で同定した。抽出残渣は燃焼後、LSC で放射能を測定した。

種子中の TRR は 0.008 mg/kg であり、放射性物質の抽出、定量及び同定は行わなかった。 だいずにおける放射性物質濃度の分布を表 2.4-3 に示す。

茎葉中の TRR は $0.43\sim0.45$ mg/kg であり、アセトニトリル表面洗浄により $67\sim69$ % TRR、アセトニトリル及びアセトニトリル/水抽出により 25 % TRR が回収された。

乾燥茎葉中の TRR は $0.26\sim0.28$ mg/kg であり、アセトニトリル表面洗浄により 53 % TRR、アセトニトリル及びアセトニトリル/水抽出により $36\sim38$ % TRR が回収された。

	[1]	o-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリ	ド	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド				
	茎葉 (1回目処理21日後)			乾燥茎葉 (1回目処理35日後)		茎葉 (1回目処理21日後)		乾燥茎葉 (1回目処理35日後)	
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	
表面洗浄画分	0.309	68.5	0.138	52.5	0.287	67.4	0.151	53.2	
抽出画分	0.111	24.6	0.100	38.0	0.106	24.9	0.102	35.9	
抽出残渣	0.031	6.9	0.025	9.5	0.033	7.7	0.031	10.9	
TRR	0.451	_	0.263	_	0.426	_	0.284	_	

表 2.4-3: だいずにおける放射性物質濃度の分布

だいずにおけるブロフラニリド及び代謝物の定量結果を表 2.4-4 に示す。

茎葉及び乾燥茎葉中の主要な残留成分はブロフラニリドであり、それぞれ $75\sim76$ % TRR 及び $67\sim71$ % TRR であった。その他に代謝物 B 及び代謝物 C が検出されたが、いずれも 10 % TRR 未満であった。

表 2.4-4 · たい 9 におけるプログラーケト及の下側物の足重和未										
	[b-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリ	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド						
	茎葉 (1回目処理21日後)		乾燥茎葉 (1回目処理35日後)		茎葉 (1回目処理21日後)		乾燥茎葉 (1回目処理35日後)			
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR		
ブロフラニリド	0.338	75.1	0.188	70.9	0.324	75.9	0.189	66.5		
代謝物B	0.023	5.1	0.022	8.3	0.022	5.2	0.023	8.1		
代謝物C	0.021	4.7	0.010	3.8	0.019	4.4	0.016	5.6		
未同定代謝物	0.037	8.2	0.020	7.5	0.029	6.8	0.025	8.8		

表 2.4-4: だいずにおけるブロフラニリド及び代謝物の定量結果

(3) だいこん

だいこん(品種:辛吉)における植物代謝試験は埴壌土 $(pH 6.1 (CaCl_2), OC 4.3\%)$ を 充填した容器(直径 30 cm、容積 19.2 L)を用いて温室内で実施した。

[b-ben- 14 C]ブロフラニリド及び[c-ben- 14 C]ブロフラニリドをそれぞれ 5%フロアブルに調製し、は種時に 400 g ai/ha の用量で土壌に灌注し、は種 41 日後に 225 g ai/ha の用量で茎葉に散布した。土壌処理 40 日後、茎葉処理 14 日後及び 29 日後(収穫期)に茎葉及び根部を採取した。

根部は根皮部と根内部に分割後、土壌処理 40 日後の茎葉は直接、茎葉処理 14 日後及び 29 日後の茎葉はアセニトリルで表面洗浄後、均質化し、アセトニトリル/水 (4/1 (v/v)) 及びアセトニトリル/0.1 M HCl (4/1 (v/v)) で抽出後、混合した。表面洗浄画分及び抽出画分は LSC で放射能を測定し、茎葉処理 14 日及び 29 日後の茎葉の表面洗浄画分及び抽出画分は HPLC で放射性物質を定量し、HPLC 及び TLC で同定した。抽出残渣は燃焼後、LSC で放射能を測定した。

だいこんにおける放射性物質濃度の分布を表 2.4-5 に示す。

^{-:} 算出せず

茎葉中の TRR は、土壌処理 40 日後では $0.006\sim0.007$ mg/kg であり、茎葉処理 14 日後及び 29 日後では $3.6\sim4.4$ mg/kg であり、アセトニトリル表面洗浄並びにアセトニトリル/水及びアセトニトリル/HCl 抽出により $70\sim99$ % TRR が回収された。

根部中の TRR は $0.004\sim0.012$ mg/kg であり、アセトニトリル/水及びアセトニトリル/HCl 抽出により $54\sim96$ % TRR が回収された。

表 2.4-5: だいこんにおける放射性物質濃度の分布

			[b-ben-14C1~	ブロフラニリド			
		茎		ブログブーット 茎		茎	
			来 里40日後)		未 里14日後)	(茎葉処理	- • -
		mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR
表面洗浄画	i分	NA	_	3.57	92.3	3.81	91.1
抽出画分		0.006	94.6	0.249	6.4	0.314	7.5
抽出残渣		0.000	5.4	0.048	1.3	0.058	1.4
TRR		0.006	100	3.87	100	4.18	100
		根 (土壌処理	部 里40日後)	根 (茎葉処理		根 (茎葉処理	
		mg/kg ¹⁾	%TRR	mg/kg ¹⁾	%TRR	mg/kg ¹⁾	%TRR
抽出画分	根皮部	0.002	50.7	0.009	75.5	0.003	84.4
抽山画刀	根内部	0.002	45.0	0.002	18.7	ND	_
抽出残渣	根皮部	0.000	2.5	0.001	4.2	0.000	9.6
7田山/天但.	根内部	0.000	1.8	0.000	1.7	0.000	6.0
TRR		0.004	_	0.011	_	0.004	_
			[c-ben-14C]	ブロフラニリド			
		茎葉 (土壌処理40日後)		茎葉 (茎葉処理14日後)		茎葉 (茎葉処理29日後)	
		mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR
表面洗浄画	i分	NA	_	4.12	92.9	3.25	90.2
抽出画分		0.005	69.7	0.274	6.2	0.304	8.4
抽出残渣		0.002	30.3	0.044	1.0	0.053	1.5
TRR		0.007	_	4.44	_	3.61	1
			部 里40日後)	根 (茎葉処理	部 里14日後)	根 (茎葉処理	
		mg/kg ¹⁾	%TRR	mg/kg ¹⁾	%TRR	mg/kg ¹⁾	%TRR
抽出画分	根皮部	0.003	45.0	0.006	57.1	0.003	26.4
1四四四刀	根内部	0.003	34.6	0.003	25.7	0.003	27.2
	根皮部	0.000	5.0	0.001	4.6	0.000	1.1
抽出残差	1	1					
抽出残差	根内部	0.001	15.5	0.001	12.7	0.006	45.3

NA: 実施せず - : 算出せず ND: 検出限界未満

1):根部全体に対する濃度

だいこんの茎葉中のブロフラニリド及び代謝物の定量結果を表 2.4-6 に示す。

茎葉中の主要な残留成分はブロフラニリドであり、77~82 %TRR であった。その他に代謝物 B 及び代謝物 C が検出されたが、いずれも 10 %TRR 未満であった。

表 2.4-6: だいこんの茎葉中のフ	゙ロフラニリ	「ド及び代謝物の定量結果
---------------------	--------	--------------

	1]	o-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリ	ド	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド				
	茎葉 (茎葉処理14日後)			茎葉 (茎葉処理29日後)		茎葉 (茎葉処理14日後)		茎葉 (茎葉処理29日後)	
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	
ブロフラニリド	3.12	80.7	3.33	79.8	3.64	82.0	2.76	76.6	
代謝物B	0.106	2.7	0.133	3.2	0.112	2.5	0.117	3.3	
代謝物C	0.067	1.7	0.120	2.8	0.103	2.3	0.089	2.5	
未同定代謝物	0.490	12.71)	0.484	11.42)	0.452	10.23)	0.500	13.84)	

- 1): 14 種類の未同定代謝物の合計(個々の成分は 3.3 %TRR 以下)
- 2): 15 種類の未同定代謝物の合計(個々の成分は 3.6 %TRR 以下)
- 3): 7種類の未同定代謝物の合計(個々の成分は3.2 %TRR以下)
- 4):15 種類の未同定代謝物の合計(個々の成分は3.5 %TRR以下)

(4) キャベツ

キャベツ(品種: Copenhagen Market) における植物代謝試験は砂壌土(pH 4.8、OM 0.67 %) の屋外ほ場で実施した。

[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリド及び[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリドをそれぞれ 20 %水和剤に調製し、葉球肥大期 (BBCH 45 及び 46) に 25 g ai/ha の用量、7 日間間隔で合計 2 回散布した。1 回目処理 6 日後 (BBCH 46) に未成熟茎葉を、2 回目処理 21 日後 (BBCH 49:収穫期)に成熟茎葉を採取し、外葉と内葉に分け、外葉はアセトニトリルで表面洗浄した。

内葉及び表面洗浄後の外葉はドライアイス中で均質化し、アセトニトリル及びアセトニトリル/水(1/1(v/v))で抽出後、混合した。表面洗浄画分及び抽出画分は LSC で放射能を測定後、HPLC で放射性物質を定量し、HPLC、LC-MS 及び TLC で放射性物質を同定した。抽出残渣は燃焼後、LSC で放射能を測定した。

キャベツにおける放射性物質濃度の分布を表 2.4-7 に示す。

成熟茎葉中の TRR は $0.15\sim0.27\,\text{mg/kg}$ であり、アセトニトリル表面洗浄により $63\sim66\,\text{\%TRR}$ 、アセトニトリル及びアセトニトリル/水抽出により $26\sim29\,\text{\%TRR}$ が回収された。

未成熟茎葉中の TRR は $0.26\sim0.31\,\mathrm{g/kg}$ であり、アセトニトリル表面洗浄により $47\sim55\,\mathrm{\%TRR}$ が、アセトニトリル及びアセトニトリル/水抽出により $40\sim47\,\mathrm{\%TRR}$ が回収された。

		[b	-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリ	,	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド						
		未成熟茎葉 (1回目処理6日後)			茎葉 理21日後)		热茎葉 理6日後)	成熟茎葉 (2回目処理21日後)				
		mg/kg ¹⁾	%TRR	mg/kg ¹⁾	%TRR	mg/kg ¹⁾ %TRR		mg/kg ¹⁾	%TRR			
表面洗浄画	分	0.167	54.6	0.097	66.4	0.125	47.3	0.168	63.2			
抽出画分	外葉部	0.075	24.5	0.038	26.0	0.044	16.7	0.076	28.6			
1回山凹刀	内葉部	0.047	15.4	NA	_	0.080	30.3	NA	_			
抽出残渣 外葉部		0.013	4.2	0.011	7.5	0.008	3.0	0.017	6.4			
内葉部		0.004	1.3	0.000	0.0	0.007	2.7	0.005	1.9			
TRR		0.306	_	0.146	_	0.264	100	0.266	_			

表 2.4-7:キャベツにおける放射性物質濃度の分布

NA: 実施せず -: 算出せず 1): 茎葉全体に対する濃度

キャベツにおけるブロフラニリド及び代謝物の定量結果を表 2.4-8 に示す。

キャベツの茎葉中の主要な残留成分はブロフラニリドであり、66~83 %TRR であった。 その他に代謝物 B 及び代謝物 C が検出されたが、いずれも 10 %TRR 未満であった。

表 2 4-8・	キャベツ	におけるブ	ロフラニリ	ド及び代謝物の第	七量結果
1X 4.4-0 .		1 ニ はつ () たり ク	ロ / / ー /	1 1 1 X () 1 (((((((((((((((((

	[]	o-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリ	ド	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド					
	未成熟茎葉 (1回目処理6日後)			茎葉 理21日後)	未成熟 (1回目処	热茎葉 理6日後)	成熟茎葉 (2回目処理21日後)			
	mg/kg ¹⁾	%TRR	mg/kg ¹⁾	%TRR	mg/kg ¹⁾	%TRR	mg/kg ¹⁾	%TRR		
ブロフラニリド	0.245 80.1		0.102	70.3	0.221	83.4	0.176	66.2		
代謝物B	0.009 2.9		0.010	6.9	0.009	3.4	0.021	7.9		
代謝物C	0.012 3.9		0.011	7.6	0.010	3.8	0.012	4.5		
未同定代謝物	0.023 7.5		0.011	7.6	0.010	3.8	0.035	13.25)		

1): 茎葉全体に対する濃度

5):14 種類の未同定代謝物の合計(個々の成分は1.9 %TRR以下)

(5) トマト

トマト (品種: Marglobe) における植物代謝試験は砂壌土 (pH 6.1、OM 1.3 %) の屋外ほ場で実施した。

[b-ben- 14 C]ブロフラニリド及び[c-ben- 14 C]ブロフラニリドをそれぞれ 20 %水和剤に調製し、25 g ai/ha の用量で脇芽出現前(BBCH 49~50)及び成熟初期(BBCH 79~81)に散布した。1 回目処理 71 日後(2 回目処理 12 日前)(果実肥大期(BBCH 75))に未成熟の果実及び葉を、2 回目処理 10 日後(収穫期(BBCH 88))に果実及び葉を採取した。

果実及び葉はアセトニトリルで表面洗浄後、ドライアイス中で均質化し、アセトニトリル及びアセトニトリル/水(1/1(v/v))で抽出後、混合した。表面洗浄画分及び抽出画分はLSCで放射能を測定後、収穫期の表面洗浄画分及び抽出画分はHPLCで放射性物質を定量し、HPLC、LC-MS及びTLCで同定した。抽出残渣は燃焼後、LSCで放射能を測定した。

1回目処理71日後の果実及び葉中のTRRは0.001 mg/kg以下であった。

2回目処理10日後のトマトにおける放射性物質濃度の分布を表2.4-9に示す。

果実中の TRR は 0.01 mg/kg であり、アセトニトリル表面洗浄により $70\sim80 \text{ %TRR}$ が回収され、抽出画分中に放射性物質は検出されなかった。葉中の TRR は $0.85\sim1.5 \text{ mg/kg}$ であり、アセトニトリル表面洗浄により $70\sim80 \text{ %TRR}$ 、アセトニトリル及びアセトニトリル/水抽出により $19\sim26 \text{ %TRR}$ が回収された。

表 2.4-9:2回目処理 10日後のトマトにおける放射性物質濃度の分布

	ון	o-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリ	ド	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド					
	果実		葉	部	果	実	葉部			
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR		
表面洗浄画分	0.007 70.0		1.06	70.2	0.008	80.0	0.678	79.7		
抽出画分	ND -		0.388	25.8	ND		0.162	19.0		
抽出残渣	0.003 30.0		0.060	0.060 4.0		20.0	0.011	1.3		
TRR	0.010 —		1.51	_	0.010	_	0.851	_		

ND: 検出限界未満 -: 算出せず

2回目処理10日後のトマトにおけるブロフラニリドの定量結果を表2.4-10に示す。

トマトにおける主要な残留成分はブロフラニリドであり、果実で $60\sim68$ % TRR、葉で $87\sim89$ % TRR であった。その他に代謝物 B 及び代謝物 C が検出されたが、いずれも 10 % TRR 未満であった。

表 2.4-10:2 回目処理 10 日後のトマトにおけるブロフラニリド及び代謝物の定量結果

	[b-	ben-14C]ブ	゙ロフラニリ	ド	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド					
	果乳	美	葉	部	果	実	葉	部		
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR		
ブロフラニリド	0.006 60.0		1.31	86.7	0.007	68.0	0.761	89.3		
代謝物B	ND		0.060	0.060 4.0			0.029	3.4		
代謝物C	ND –		0.051	3.4	0.000	3.0	0.029	3.4		
未同定代謝物	0.010	10.0	0.029	1.9	0.001	9.0	0.022	2.6		

ND:検出限界未満 -:算出せず

(6) 茶

茶における植物代謝試験は砂壌土 (pH 7.4、OM 0.58%) の屋外ほ場で実施した。

[b-ben- 14 C]ブロフラニリド及び[c-ben- 14 C]ブロフラニリドをそれぞれ 5 %水和剤に調製し、100~g~ai/ha の用量、14~日間隔で2~回散布した。<math>2~回目処理7~日後及び14~日後に葉を採取した。

葉はアセトニトリルで表面洗浄後、均質化し、アセトニトリル及びアセトニトリル/水 (1/1(v/v)) で抽出後、混合した。表面洗浄画分及び抽出画分は HPLC で放射性物質を定量し、 HPLC、LC-MS 及び TLC で同定した。、抽出残渣は燃焼後、LSC で放射能を測定した。

茶の葉中の放射性物質濃度の分布を表 2.4-11 に示す。

葉中の TRR は $15\sim20$ mg/kg であり、アセトニトリル表面洗浄により $97\sim98$ % TRR、アセトニトリル及びアセトニトリル/水抽出により $1.3\sim2.4$ % TRR が回収された。

表 2.4-11: 茶	の葉中の放射性物質濃度の分布

	[1	b-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリ	Ϋ́	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド					
	2回目処理7日後		2回目処理	理14日後	2回目処	理7日後	2回目処理14日後			
	mg/kg %TRR mg/kg			%TRR	mg/kg	mg/kg %TRR		%TRR		
表面洗浄画分	19.0 98.3		16.5	97.2	19.9	98.1	14.5	97.0		
抽出画分	0.259	1.3	0.375	2.2	0.296	1.5	0.352	2.4		
抽出残渣	0.073 0.4		0.104	0.6	0.098	0.5	0.106	0.7		
TRR	19.4	_	17.0	_	20.3	_	15.0	_		

^{-:}算出せず

茶の葉中のブロフラニリド及び代謝物の定量結果を表 2.4-12 に示す。

茶の葉中における主要な残留成分はブロフラニリドであり、 $96\sim97~\%$ TRR であった。その他に代謝物 B 及び代謝物 C が検出されたが、いずれも 10~% TRR 未満であった。

表 2.4-12: 茶(葉) におけるブロフラニリド及び代謝物の定量結果

	[·]	o-ben- ¹⁴ C]ブ	ロフラニリ	ド	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド					
	2回目处	L理7日後	2回目処理	理14日後	2回目处	L理7日後	2回目処3	理14日後		
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR		
ブロフラニリド	18.9 97.4		16.4	96.6	19.5	96.1	14.4	96.2		
代謝物B	0.007	0.0	0.136	0.8	0.198	1.0	0.108	0.7		
代謝物C	0.269 1.4		0.200	1.2	0.260	1.3	0.143	1.0		
未同定代謝物	0.151 0.8		0.145	0.9	0.236	1.2	0.214	1.4		

(7) 植物代謝のまとめ

水稲、だいず、だいこん、キャベツ、トマト及び茶を用いた植物代謝試験の結果、作物に 共通する主要な残留成分はブロフラニリドであった。

ブロフラニリドの植物中における主要な代謝経路は、脱メチル化による代謝物 B の生成及びヒドロキシル化による代謝物 C の生成と考えられた。

2.4.1.2 規制対象化合物

リスク評価の対象化合物

食品安全委員会による評価(URL:

<u>http://www.fsc.go.jp/fsciis/evaluationDocument/show/kya20190220026</u>) においては、農産物中の暴露評価対象物質をブロフラニリド (親化合物のみ) と設定している。

作物残留の規制対象化合物

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会において了承された規制対象化合物を下記に転記する。(本項末まで)

(参考:薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会農薬・動物医薬品部会報告

(URL: https://www.mhlw.go.jp/content/11130500/000604333.pdf)

残留の規制対象

ブロフラニリドとする。

作物残留試験において、代謝物 B 及び代謝物 C の分析が行われているが、代謝物 B 及び代謝物 C の残留濃度はブロフラニリドと比較して十分に低いことから、規制対象として代謝物 B 及び代謝物 C を含めないこととした。

2.4.2 消費者の安全に関わる残留

2.4.2.1 作物

登録された使用方法 (GAP) の一覧を表 2.4-13 に示す。

表 2.4-13: ブロフラニリドの GAP 一覧

作物名	剤型	使用 方法	希釈倍数 (倍)	使用濃度* (kg ai/hL)	使用液量 (L/10 a)	使用回数(回)	PHI(目)
かんしょ	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
だいこん	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
かぶ	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
はくさい	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
t. 1- 0'W	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
キャベツ	20.0 %フロアブル	散布	8,000~16,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
非結球あぶらな科 葉菜類	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
ブロッコリー	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
カリフラワー	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
レタス	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
非結球レタス	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
ねぎ	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1
えだまめ	5.0%フロアブル	散布	2,000~4,000	0.00125-0.0025	100-300	3	1

^{*:}有効成分濃度

かんしょ、だいこん、かぶ、はくさい、キャベツ、こまつな、みずな、たかな、ブロッコリー、レタス、リーフレタス、サラダ菜、ねぎ及びえだまめについて、ブロフラニリド、代謝物B及び代謝物Cを分析対象として実施した作物残留試験成績を受領した。

これらの結果を表 2.4-14 から表 2.4-23 に示す。

分析法は 2.2.3.1 に示した作物残留分析法を用いた。残留濃度は同一試料を 2 回分析した値の平均値を示した。代謝物の残留濃度はブロフラニリド等量に換算して示した。GAP に従った使用によるブロフラニリドのそれぞれの試験における最大残留濃度には、下線を付した。

(1) かんしょ

かんしょの塊根を分析試料とした作物残留試験の結果を表 2.4-14 に示す。なお、未処理 区試料は定量限界(ブロフラニリド等量として、ブロフラニリド: 0.01 mg/kg、代謝物 B: 0.01 mg/kg、代謝物 C: 0.01 mg/kg)未満であった。

作物残留濃度が最大となる GAP (5.0 %フロアブル、散布、2,000 倍、3 回、収穫前日) に 適合する試験は6 試験であった。

表 2.4-14	:かん	しょの	作物残	留試験	結果							
lf → Hebra &	試験			試験	条件					残留	濃度(mg/	kg) ²⁾
作物名 (品種) (栽培形態)	場所実施年度	剤型	使用方法	希釈 倍数 (倍)	散布 濃度 ¹⁾ (kg ai/hL)	使用 液量 (L/10 a)	使用 回数 (回)	分析 部位	PHI (目)		代謝物 B	代謝物 C
作物残留濃 最大となる		5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025		3		1			
かんしょ (高系 14 号) (露地)	石川 H26 年	5.0 % 7¤アブル	散布	2,000	0.0025	235 235 235	3	塊根	1 3 7	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
かんしょ (紅あずま) (露地)	福井 H26 年	5.0 % 7๒アブル	散布	2,000	0.0025	200 200 200	3	塊根	1 3 7	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
かんしょ (紅あずま) (露地)	茨城 H26 年	5.0 % 7¤77 N	散布	2,000	0.0025	242 242 242	3	塊根	1 3 7	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
かんしょ (ベニサツマ) (露地)	鹿児島 H26 年		散布	2,000	0.0025	231 231 231	3	塊根	1 3 7	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
かんしょ (高系 14 号) (露地)	石川 H27 年	5.0 % 7¤77 N	散布	2,000	0.0025	250 250 250	3	塊根	1 3 7	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
かんしょ (べにはるか) (霰地)	鹿児島 H27 年		散布	2,000	0.0025	231 231	3	塊根	1 3 7	<0.01 <0.01	<0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01

表 2.4-14: かんしょの作物残留試験結果

1): 有効成分濃度 ²⁾: ブロフラニリド等量換算

かんしょの塊根におけるブロフラニリドの残留濃度は<0.01 mg/kg(6)であった。 かんしょの塊根におけるブロフラニリドの最大残留濃度は 0.01 mg/kg と推定した。

(2) だいこん

だいこんの根部、葉部、つまみ菜及び間引き菜を分析試料とした作物残留試験の結果を表 2.4-15 に示す。なお、未処理区試料は定量限界(ブロフラニリド等量として、ブロフラニリド: $0.01 \, \text{mg/kg}$ 、代謝物 $B:0.01 \, \text{mg/kg}$ 、代謝物 $C:0.01 \, \text{mg/kg}$)未満であった。

だいこん(根部及び葉部)の作物残留濃度が最大となる GAP (5.0%フロアブル、散布、2,000 倍、3 回、収穫前日)に適合する試験は6試験であった。

つまみ菜及び間引き菜については、生育期間を考慮して、つまみ菜では1回、間引き菜では2回の使用回数で試験が実施され、それぞれ1試験であった。

表 2.4-15: だいこんの作物残留試験結果

作物名 (高種) 操所 (高種) 実施 (東度 が	衣 2.4-13	試験	$\subseteq \mathcal{N}^{(i)}$	11 12/2		<u> </u>					残留	濃度(mg/l	(g) ²⁾	
(高袖性) (栽培 形態) 実施 作後 大きな	作物名						/	/	△±c	ייים	/A H	wx x (IIIg/I	`b/	
最大となる GAP			剤型		倍数	濃度 1)	液量	回数				代謝物 B	代謝物 C	
だいこん (耐病総太り) (露地)				散布	2,000	0.0025		3		1				
(1	< 0.01	< 0.01	< 0.01	
(商権) (商権) (商権) (商権) (日本) (日本) (日本) (日本) (日本) (日本) (日本) (日本	だいこん						256		根部	3				
(露地)	(耐病総大り)			散布	2.000	0.0025		3		7				
だいこん (耐病総太り) (露地) おいこん (耐病総太り) (高知 方、0.0% 大部) 本いこん (耐病総太り) (商地) おいこん (耐病総太り) (のはた) 本いこん (利力 (のり) 本いこん (利力 (のり) (のののののののののののののののののののののののののののののののののの		H25 年	フロアフ゛ル	127 114	2,000	0.0025		3	-tta ton					
だいこん (耐病総太り) (露地)	(24 2)						200		葉部					
だいこん (耐病総太り) (露地)										1				
(耐病総太り) (露地)									Lo de					
(耐病総太り) (露地)	だいこん						250		根部					
でいこん	(耐病終大り)			散布	2,000	0.0025		3						
だいこん (耐病総太り) (露地) 相歌山 H25 年 7 ヵ 万 * ル (商納総太り) (露地) 本 大いこん (耐病総太り) (露地) 本 大いこん (耐病総太り) (露地) 本 大いこん (耐病総太り) (露地) 本 大いこん (耐病総太り) (露地) 本 大いこん (耐病総太り) (露地) 本 大いこん (下の方 * ル) (下の方 * ル) 本 大いこん (下の方 * ル) (下の方 * ル) 本 大いこん (下の方 * ル) (下の方 * ル) 本 大いこん (下の方 * ル) (下の方 * ル) (下の方 * ル) 本 大いこん (下の方 * ル) (下の方 * ル) 本 大いこん (下の方 * ル) (下の方 * ル) (下の方 * ル) 本 大いこん (下の方 * ル) (下の方 * ル) (下の方 * ル) 本 大いこん (下の方 * ル) (下の方 * ル	(露地)	H25 年) [] / N			0.0023			華部					
だいこん (耐病総太り) (露地) おいっと を表している (耐病総太り) (のはたいる (大部) (本格) は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、									栗部					
だいこん (耐病総太り) (露地)										1				
たいこん (耐病総太り) (露地)						000 0.0025			1 日					
(耐病総太り) (露地)	(耐病総大り)	壬 司 司 公 一 ,	5 0 0/		2,000				(投部)					
(露地)				散布				3						
だいこん (耐病総太り) (露地)	(露地)	H25 +	2 7077 N				200	200		華部				
だいこん (耐病総太り) (露地)									果部					
だいこん (耐病総太り) (露地) 指布														
(耐病総太り) (露地) 横布 2,000 0.0025 192 192 3									±0 ☆77					
(耐病総太り) (露地)	だいこん	垣井	5.0.0/				192		(15)					
(露地)				散布	2,000	0.0025	192	3		1				
だいこん (耐病総太り) (露地)	(露地)	1120 —	74// //				192		在郊					
だいこん (耐病総太り) (露地)									** HP					
だいこん (耐病総太り) (露地)														
無いこん (耐病総太り) (露地)									根部					
(耐病総太り) (露地) H26年 プロアブ・ル 散布 2,000 0.0025 222 3 東部 1 1.92 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01		奈良	5.0%						IX HP					
(露地) (露地) (下に) (下に) (下に) (下に) (下に) (下に) (下に) (下部) (下部) (下部) (下部) (下部) (下ま地) (下ま地) (下ませ)				散布	2,000	0.0025		3						
だいこん (大師) (露地)	(露地)	1120	, , , , ,				222		葉部					
だいこん (大師) (露地) 高知 5.0 % H26 年 7ロアブ・ル 散布 2,000 0.0025 220 220 220 220 第 部 3 3.98 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 東部 3 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 東部 3 3.98 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.									7/4/4					
だいこん (大師) (露地) (南知) H26年														
(大師) (露地) 高知 5.0 % 7ロアブ・ル 散布 2,000 0.0025 220 220 3 東部 3 3.98 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0									根部					
(大師) (露地) H26年 フロアフェル 飲作 2,000 0.0025 220 3 第 1 4.40 <0.01 <0.01 業部 3 3.98 <0.01		高知	5.0 %	ш,					IE S PIP					
(露地) 第 220 第 3 3.98 < 0.01 < 0.01				散布	2,000	0.0025	0.0025 220		葉部					
	(露地)													
									2,400	7	2.92	< 0.01	< 0.01	

だいこん (耐病宮重) (露地)	茨城 H28 年	5.0 % 7¤77 ` N	散布	2,000	0.0025	50	1	つまみ 菜 ³⁾	1 3 7 3 5 9	3.26 2.30 1.04 2.54 1.73 0.72	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01
だいこん (耐病宮重) (露地)	茨城 H28 年	5.0 % 7¤77` N	散布	2,000	0.0025	50 50	2	間引き 菜4)	1 3 7 3 5 9 7 9	1.33 0.90 0.47 1.24 1.05 0.54 0.74 0.52 0.41	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01

^{1):} 有効成分濃度 ²⁾: ブロフラニリド等量換算

だいこんにおけるブロフラニリドの残留濃度は根部で<0.01 mg/kg (6)、葉部で 0.80、1.5、 1.9、 3.5、 3.9 及び 4.4 mg/kg であった。

だいこんにおけるブロフラニリドの最大残留濃度は根部で 0.01 mg/kg、葉部で 9 mg/kg と 推定した。

だいこんのつまみ菜及び間引き菜中のブロフラニリドの残留濃度は、それぞれ 3.3 mg/kg 及び 1.3 mg/kg であり、葉部中の残留濃度と同等であった。

(3) かぶ

かぶの根部及び茎葉を分析試料とした作物残留試験の結果を表 2.4-16 に示す。なお、未処理区試料は定量限界(ブロフラニリド等量として、ブロフラニリド: 0.01 mg/kg、代謝物 B:0.01 mg/kg、代謝物 C:0.01 mg/kg)未満であった。

作物残留濃度が最大となる GAP (5.0 %フロアブル、散布、2,000 倍、3 回、収穫前日) に適合する試験は3 試験であった。

表 2.4-16: かぶの作物残留試験結果

16-14-by 57	試験			試験	条件					残留	濃度(mg/	kg) ²⁾
作物名 (品種) (栽培形態)	場所実施年度	剤型	使用方法	希釈 倍数 (倍)	散布 濃度 ¹⁾ (kg ai/hL)	使用 液量 (L/10 a)	使用 回数 (回)	分析 部位	PHI (目)	ブロフラ ニリド	代謝物 B	代謝物 C
作物残留濃 最大となる		5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025		3		1			
かぶ (耐病ひかり) (施設)	茨城 H26 年	5.0 % 7¤77 N	散布	2,000	0.0025	242 242 242	3	根部	1 3 7 1 3 7	0.01 0.01 0.01 2.58 2.29 2.04	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01 <0.01

^{3):} 本葉 1.5~2 葉期の茎葉(根を含む) 4): 本葉 4~5 葉期の茎葉(根を含む)

								根部	1 3	0.02 <0.01	<0.01 <0.01	<0.01 <0.01
かぶ (耐病ひかり)	三重	5.0 %	散布	2 000	0.0025	188	2	네다지다	<i>7</i>	< 0.01	< 0.01	< 0.01
(脳病のかり) (施設)	H26 年	フロアフ゛ル	权和	2,000	0.0025	188 188	3		1	1.95	< 0.01	< 0.01
(//世代)						100		葉部	3	1.62	< 0.01	< 0.01
									7	1.48	< 0.01	< 0.01
									1	<u><0.01</u>	< 0.01	< 0.01
かぶ						200		根部	3	< 0.01	< 0.01	< 0.01
(耐病ひかり)	宮崎	5.0 %	散布	2,000	0.0025	200	3		7	< 0.01	< 0.01	< 0.01
(施設)	H26 年	フロアフ゛ル	HXAII	2,000	0.0023	200	3		1	<u>1.42</u>	< 0.01	< 0.01
(加西区)						200		葉部	3	0.99	< 0.01	< 0.01
									7	0.90	< 0.01	< 0.01

^{1):} 有効成分濃度 2): ブロフラニリド等量換算

かぶにおけるブロフラニリドの残留濃度は根部で<0.01、0.01 及び 0.02 mg/kg、葉部で 1.4、 2.0 及び 2.6 mg/kg であった。

かぶにおけるブロフラニリドの最大残留濃度は根部で 0.04 mg/kg、葉部で 6 mg/kg と推定した。

(4) はくさい

はくさいの茎葉を分析試料とした作物残留試験の結果を表 2.4-17 に示す。なお、未処理 区試料は定量限界(ブロフラニリド等量として、ブロフラニリド: 0.01 mg/kg、代謝物 B: 0.01 mg/kg、代謝物 C: 0.01 mg/kg)未満であった。

作物残留濃度が最大となる GAP (5.0%フロアブル、散布、2,000倍、3回、収穫前日) に適合する試験は 6 試験であった。

表 2.4-17: はくさいの作物残留試験結果

I for the for	試験			試験	条件					残留	濃度(mg/	kg) ²⁾
作物名 (品種) (栽培形態)	場所 実施 年度	剤型	使用 方法	希釈 倍数 (倍)	散布 濃度 ¹⁾ (kg ai/hL)	使用 液量 (L/10 a)	使用 回数 (回)	分析 部位	PHI (目)	ブロフラ ニリド	代謝物 B	代謝物 C
作物残留濃 最大となる		5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025		3		1			
はくさい (黄ごころ 85) (露地)	茨城 H25 年	5.0 % 7¤77`N	散布	2,000	0.0025	250 250 250	3	葉球	1 3 7	0.06 0.05 0.03	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
はくさい (極意) (露地)	群馬 H25 年	5.0 % 7¤77`N	散布	2,000	0.0025	200 200 200	3	葉球	1 3 7	0.10 <u>0.12</u> 0.03	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
はくさい (黄楽 70) (露地)	宮崎 H25 年	5.0 % 7¤77`N	散布	2,000	0.0025	218 218 218	3	葉球	1 3 7	0.38 0.34 0.10	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
はくさい (黄ごころ 75) (露地)	福井 H26 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	190 190 190	3	葉球	1 3 7	0.07 0.07 0.03	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
はくさい (極意) (露地)	群馬 H26 年	5.0 % 7¤77`N	散布	2,000	0.0025	246 246 246	3	葉球	1 3 7	0.48 0.34 0.43	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

はくさい (みねぶき 505) (露地)	長野 5.0 H26 年 フロブ	0 % 77` N	散布	2,000	0.0025	295 295 295	3	葉球	1 3 7	0.06 0.05 0.04	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01	
-------------------------------	---------------------	--------------	----	-------	--------	-------------------	---	----	-------------	----------------------	-------------------------	-------------------------	--

1): 有効成分濃度 2): ブロフラニリド等量換算

はくさいの茎葉におけるブロフラニリドの残留濃度は 0.06 (2)、0.07、0.12、0.38 及び 0.48 mg/kg であった。

はくさいの茎葉におけるブロフラニリドの最大残留濃度は1 mg/kgと推定した。

(5) キャベツ

キャベツの葉球を分析試料とした作物残留試験の結果を表 2.4-18 に示す。なお、未処理 区試料は定量限界(ブロフラニリド等量として、ブロフラニリド: 0.01 mg/kg、代謝物 B: 0.01 mg/kg、代謝物 C: 0.01 mg/kg)未満であった。

作物残留濃度が最大となる GAP (5.0%フロアブル、散布、2,000 倍、3 回、収穫前日) に適合する試験は 6 試験であった。

表 2.4-18: キャベツの作物残留試験結果

thatil to	試験	*2 1/2			条件					残留	'濃度(mg/	kg) ²⁾
作物名 (品種) (栽培形態)	場所 実施 年度	剤型	使用 方法	希釈 倍数 (倍)	散布 濃度 ¹⁾ (kg ai/hL)	使用 液量 (L/10 a)	使用 回数 (回)	分析 部位	PHI (目)	ブロフラ ニリド	代謝物 B	代謝物 C
作物残留濃 最大となる		5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025		3		1			
キャベツ (彩音) (露地)	新潟 H25 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	245 245 245	3	葉球	1 3 7	0.13 0.10 0.04	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
キャベツ (夢ごろも) (露地)	群馬 H25 年	5.0 % 7¤アブル	散布	2,000	0.0025	222 222 222	3	葉球	1 3 7	0.10 0.08 <u>0.17</u>	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
キャベツ (金系 201 号) (露地)	高知 H25 年	5.0 % 7¤77` N	散布	2,000	0.0025	280 280 280	3	葉球	1 3 7	0.16 <u>0.18</u> 0.04	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
キャベツ (みくに) (露地)	青森 H26 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	293 293 293	3	葉球	1 3 7 14	0.04 0.02 0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01
キャベツ (YR 青春 2 号) (露地)	岩手 H26 年	5.0 % 7¤アブル	散布	2,000	0.0025	208 208 208	3	葉球	1 3 7 14	0.19 0.19 0.16 0.05	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01
キャベツ (彩峰) (露地)	宮崎 H26 年	5.0 % 7¤アブル	散布	2,000	0.0025	238 238 238	3	葉球	1 3 7 14	0.08 0.06 0.03 0.02	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01 <0.01

1): 有効成分濃度 2): ブロフラニリド等量換算

キャベツの葉球におけるブロフラニリドの残留濃度は0.04、0.08、0.13、0.17、0.18 及び0.19 mg/kg であった。

キャベツの葉球におけるブロフラニリドの最大残留濃度は 0.4 mg/kg と推定した。

(6) 非結球あぶらな科葉菜類

こまつな、みずな及びたかなの茎葉を分析試料とした作物残留試験の結果を表 2.4-19 に示す。なお、未処理区試料は定量限界(ブロフラニリド等量として、ブロフラニリド: 0.01 mg/kg、代謝物 B:0.01 mg/kg、代謝物 C:0.01 mg/kg)未満であった。

作物残留濃度が最大となる GAP (5.0% フロアブル、散布、2,000 倍、3 回、収穫前日) に 適合する試験はこまつな 3 試験、みずな 2 試験、たかな 2 試験であった。

表 2.4-19: 非結球あぶらな科葉菜類の作物残留試験結果

	試験				食条件	· · · · · ·				残留	濃度(mg/	kg) ²⁾
作物名 (品種) (栽培形態)	場所 実施 年度	剤型	使用方法	希釈 倍数 (倍)	散布 濃度 ¹⁾ (kg ai/hL)	使用 液量 (L/10 a)	使用 回数 (回)	分析 部位	PHI (目)	ブロフラ ニリド	代謝物 B	代謝物 C
作物残留 最大とな		5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025		3		1			
こまつな (きよすみ) (施設)	福島 H26 年	5.0 % 7¤77` N	散布	2,000	0.0025	254 254 254	3	茎葉	1 3 7	1.04 <u>1.20</u> 0.80	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
こまつな (菜々美) (施設)	福井 H26 年	5.0 % 7¤77` N	散布	2,000	0.0025	220 220 220	3	茎葉	1 3 7	2.28 1.46 0.98	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
こまつな (夏楽天) (施設)	茨城 H26 年	5.0 % 7¤77` N	散布	2,000	0.0025	163 163 175	3	茎葉	1 3 7	1.70 1.24 0.94	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
みずな (京みぞれ) (施設)	和歌山 H26 年	5.0 % 7¤77 N	散布	2,000	0.0025	200 200 200	3	茎葉	1 3 7	2.30 1.88 1.06	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
みずな (京みそれ) (施設)	宮崎 H26 年	5.0 % 7¤77 N	散布	2,000	0.0025	167 189 189	3	茎葉	1 3 7	2.02 <u>2.06</u> 1.48	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
たかな (三池大葉縮 緬高菜) (施設)	茨城 H26 年	5.0 % 7¤77` N	散布	2,000	0.0025	179 179 179	3	茎葉	1 3 7	1.26 1.26 0.90	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
たかな (三池高菜) (施設)	高知 H26 年	5.0 % 7¤アブル	散布	2,000	0.0025	161 161 182	3	茎葉	1 3 7	3.61 2.75 1.93	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01

^{1):} 有効成分濃度 2): ブロフラニリド等量換算

こまつなの茎葉におけるブロフラニリドの残留濃度は 1.2、1.7 及び 2.3 mg/kg であった。 みずなの茎葉におけるブロフラニリドの残留濃度は 2.1 及び 2.3 mg/kg であった。 たかなの茎葉におけるブロフラニリドの残留濃度は 1.3 及び 3.6 mg/kg であった。

こまつな、みずな及びたかなの作物残留試験成績が得られていることから、非結球あぶらな科葉菜類の最大残留濃度を推定することが可能であると判断した。

こまつなの茎葉におけるブロフラニリドの最大残留濃度は6 mg/kgと推定した。 みずなの茎葉におけるブロフラニリドの最大残留濃度は5 mg/kgと推定した。

ケール、チンゲンサイ及びその他の非結球あぶらな科葉菜類の茎葉におけるブロフラニリドの最大残留濃度は、非結球あぶらな科葉菜類の中で最大濃度を示したたかなの結果を用いて 10 mg/kg と推定した。

(7) ブロッコリー、カリフラワー

ブロッコリーの花蕾を分析試料とした作物残留試験の結果を表 2.4-20 に示す。なお、未処理区試料は定量限界(ブロフラニリド等量として、ブロフラニリド: 0.01 mg/kg、代謝物 B:0.01 mg/kg、代謝物 C:0.01 mg/kg)未満であった。

作物残留濃度が最大となる GAP (5.0 %フロアブル、散布、2,000 倍、3 回、収穫前日) に 適合する試験は 3 試験であった。

表 2.4-20	: フロ	ツコリ	一001年	物残留	試験結果	;						
lb=thm b	試験			試験	条件					残留	'濃度(mg/	kg) ²⁾
作物名 (品種) (栽培形態)	場所 実施 年度	剤型	使用方法	希釈 倍数 (倍)	散布 濃度 ¹⁾ (kg ai/hL)	使用 液量 (L/10 a)	使用 回数 (回)	分析 部位	PHI (目)	ブロフラ ニリド	代謝物 B	代謝物 C
作物残留濃 最大となる		5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025		3		1			
ブロッコリー (ピクセル) (露地)	岩手 H25 年	5.0 % 7¤アブル	散布	2,000	0.0025	242 242 242	3	花蕾	1 3 7	0.33 0.19 0.12	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
ブロッコリー (ハイツ SP) (露地)	福井 H25 年	5.0 % 7¤77 N	散布	2,000	0.0025	286 286 286	3	花蕾	1 3 7	0.36 0.20 0.08	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
ブロッコリー (ハイツ SP) (露地)	茨城 H25 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	244 244	3	花蕾	1 3 7	0.73 0.50	<0.01	<0.01

表 2.4-20: ブロッコリーの作物残留試験結果

ブロッコリーの花蕾におけるブロフラニリドの残留濃度は 0.33、0.36 及び 0.73 mg/kg であった。

ブロッコリーの花蕾におけるブロフラニリドの最大残留濃度は2 mg/kgと推定した。

ブロッコリーの作物残留試験成績が得られていることから、カリフラワーの最大残留濃度を推定することが可能と判断した。

カリフラワーの花蕾におけるブロフラニリドの最大残留濃度は、ブロッコリーの結果を用いて2 mg/kg と推定した。

(8) その他のあぶらな科野菜

その他のあぶらな科野菜におけるブロフラニリドの最大残留濃度は、非結球あぶらな科 葉菜類の中で最大濃度を示したたかなの結果を用いて 10 mg/kg と推定した。

(9) レタス、非結球レタス

レタスの葉球及び非結球レタス(リーフレタス、サラダ菜)の茎葉を分析試料とした作物残留試験の結果を表 2.4-21 に示す。なお、未処理区試料は定量限界(ブロフラニリド等量として、ブロフラニリド: $0.01 \ mg/kg$ 、代謝物 $B:0.01 \ mg/kg$ 、代謝物 $C:0.01 \ mg/kg$)未満であった。

作物残留濃度が最大となる GAP (5.0% フロアブル、散布、2,000 倍、3 回、収穫前日) に 適合する試験はレタス 6 試験、リーフレタス 2 試験、サラダ菜 2 試験であった。

表 2.4-21: レタス及び非結球レタスの作物残留試験結果

	試験	20 71 111	44.		プロイクのクス E 験条件	<u>ц</u> в ч ослу	H 2 C			残留	₽濃度(mg/l	(g) ²⁾
作物名 (品種) (栽培形態)	場所 実施 年度	剤型	使用方法	希釈 倍数 (倍)	散布 濃度 ¹⁾ (kg ai/hL)	使用 液量 (L/10 a)	使用 回数 (回)	分析部位		ブロフラ ニリド	代謝物 B	代謝物 C
作物残留濃原最大となる(5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025		3		1			
レタス (シスコ)	群馬	5.0 %	散布	2,000	0.0025	250 250	3	葉球	1 3	0.21 0.52	<0.01 <0.01	<0.01 <0.01
(施設)	H25 年	フロアフ゛ル		,		250			7	0.21	< 0.01	< 0.01
レタス (マリーナ)	和歌山 H25 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	211 282	3	葉球	1 3	0.10 <u>0.15</u>	<0.01 <0.01	<0.01 <0.01
(施設) レタス	·					282			7	0.09	<0.01	<0.01
(コンスタント) (施設)	宮崎 H25 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	208 208 208	3	葉球	1 3 7	0.72 0.41 0.22	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
レタス (シスコ)	茨城 H26 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	178 207	3	葉球	1 3	0.22 0.44 <u>0.48</u>	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
(施設) レタス		74// 10				233 214			7	0.26	<0.01 <0.01	<0.01
(ツララ) (施設)	群馬 H26 年	5.0 % 7¤アブル	散布	2,000	0.0025	214 214 214	3	葉球	3	0.01 0.05 0.03	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
レタス (シスコ)	高知 H26 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	221 229	3	葉球	1 3	1.28 0.80	<0.01 <0.01	<0.01 <0.01
(施設) サラダ菜						229 198			7	0.37 6.07	<0.01	<0.01
(岡山サラダ菜) (施設)	福井 H26 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	198 198	3	茎葉	3	5.75 2.72	<0.01	<0.01 <0.01 <0.01
サラダ菜 (岡山サラダ菜)	高知	5.0 %	散布	2,000	0.0025	179 179	3	茎葉	1 3	3.22 2.70	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
(施設)	H26 年	フロアフ゛ル	10 - 11	2,000		179			7	2.46	<0.01	< 0.01
リーフレタス (リーフレタスグ リーン) (施設)	福島 H26 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	167 167 167	3	茎葉	1 3 7	1.54 1.39 1.02	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
リーフレタス (マザーレッド) (施設)	福井 H26 年	5.0 % 7¤77` N	散布	2,000	0.0025	198 198 198	3	茎葉	1 3 7	2.80 2.29 1.41	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01

^{1):} 有効成分濃度 ²⁾: ブロフラニリド等量換算

レタスの葉球におけるブロフラニリドの残留濃度は 0.05、0.15、0.48、0.52、0.72 及び 1.3 mg/kg であった。

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

非結球レタスの茎葉におけるブロフラニリドの残留濃度は 1.5、2.8、3.2 及び 6.1 mg/kg であった。

レタス (レタス (葉球) 及び非結球レタス (茎葉)) におけるブロフラニリドの最大残留 濃度は、レタス及び非結球レタスのうち最大残留濃度を示した非結球レタスの結果を用いて 15 mg/kg と推定した。

(10) ねぎ

ねぎの茎葉をを分析試料とした作物残留試験の結果を表 2.4-22 に示す。なお、未処理区 試料は定量限界(ブロフラニリド等量として、ブロフラニリド:0.01 mg/kg、代謝物 B:0.01 mg/kg、代謝物 C:0.01 mg/kg)未満であった。

作物残留濃度が最大となる GAP (5.0% フロアブル、散布、2,000 倍、3 回、収穫前日) に 適合する試験は 6 試験であった。

表 2.4-22: ねぎの作物残留試験結果

11 - 11 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1	試験	14/X H	~ .		条件					残留	『濃度(mg/l	kg) ²⁾
作物名 (品種) (栽培形態)	場所 実施 年度	剤型	使用 方法	希釈 倍数 (倍)	散布 濃度 ¹⁾ (kg ai/hL)	使用 液量 (L/10 a)	使用 回数 (回)	分析 部位	PHI (目)	ブロフラ ニリド	代謝物 B	代謝物 C
作物残留濃度 最大となる GA		5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025		3		1			
ねぎ (秀逸) (露地)	茨城 H25 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	191 191 191	3	茎葉	1 3 7	0.20 0.16 0.14	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
ねぎ (九条太) (露地)	高知 H25 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	181 181 181	3	茎葉	1 3 7	0.31 <u>0.38</u> 0.13	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
ねぎ (九条太) (露地)	宮崎 H25 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	163 163 163	3	茎葉	1 3 7	0.40 <u>0.46</u> 0.19	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
ねぎ (夏扇パワー) (露地)	青森 H26 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	293 293 293	3	茎葉	1 3 7	0.22 0.14 0.07	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
ねぎ (ホワイトスター) (露地)	石川 H26 年	5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025	250 250 250	3	茎葉	1 3 7	0.10 0.07 0.04	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
ねぎ (浅黄系九条) (露地)	鹿児 島 H26 年	5.0 % 7¤77 N	散布	2,000	0.0025	286 286 286	3	茎葉	1 3 7	1.32 0.77 0.28	0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01

^{1):} 有効成分濃度 2): ブロフラニリド等量換算

ねぎの茎葉におけるブロフラニリドの残留濃度は0.10、0.20、0.22、0.38、0.46 及び1.3 mg/kg であった。

ねぎの茎葉におけるブロフラニリドの最大残留濃度は3 mg/kg と推定した。

(11) えだまめ

えだまめのさやを分析試料とした作物残留試験の結果を表 2.4-23 に示す。なお、未処理 区試料は定量限界(ブロフラニリド等量として、ブロフラニリド: 0.01 mg/kg、代謝物 B: 0.01 mg/kg、代謝物 C: 0.01 mg/kg)未満であった。

作物残留濃度が最大となる GAP (5.0% フロアブル、散布、2,000 倍、3 回、収穫前日) に適合する試験は 3 試験であった。

4× 2.4-23	· /_/_	x 6707	1 Promote	H PONT	ND /N							
lh-thm to	試験			試験	条件					残留	'濃度(mg/	kg) ²⁾
作物名 (品種) (栽培形態)	場所実施年度	剤型	使用方法	希釈 倍数 (倍)	散布 濃度 ¹⁾ (kg ai/hL)	使用 液量 (L/10 a)	使用 回数 (回)	分析 部位	PHI (目)	ブーラニ	代謝物 B	代謝物 C
作物残留濃 最大となる		5.0 % フロアフ゛ル	散布	2,000	0.0025		3		1			
えだまめ (青森みどり) (露地)	青森 H26 年	5.0 % 7๒アブル	散布	2,000	0.0025	193 193 193	3	さや	1 3 7	0.11 0.05 0.06	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
えだまめ (エンレイ) (露地)	石川 H26 年	5.0 % 7¤アブル	散布	2,000	0.0025	163 163 163	3	さや	1 3 7	0.27 0.24 0.26	<0.01 <0.01 <0.01	<0.01 <0.01 <0.01
えだまめ (濃姫)	福井	5.0 %	散布	2,000	0.0025	154 154	3	さや	1 3	0.34 0.23	<0.01 <0.01	<0.01 <0.01

表 2.4-23: えだまめの作物残留試験結果

えだまめのさやにおけるブロフラニリドの残留濃度は 0.11、0.27 及び 0.34 mg/kg であった。

154

7 | 0.18 | <0.01 | <0.01

えだまめのさやにおけるブロフラニリドの最大残留濃度は0.8 mg/kgと推定した。

(12) その他のハーブ

その他のハーブにおけるブロフラニリドの最大残留濃度は、非結球あぶらな科葉菜類の中で最大残留を示したたかなの結果を用いて 10 mg/kg と推定した。

2.4.2.2 家畜

ブロフラニリドは、国内における家畜の飼料の用に供される作物への使用はないため、試験実施は不要であると判断した。

2.4.2.3 魚介類

ブロフラニリドの魚介類中の残留濃度について、第1段階水産動植物被害予測濃度(水産 PEC_{tierl})及び生物濃縮係数(BCF)を用いて推定した。

ブロフラニリドを含有する製剤について、水田以外の使用が申請されているため、水田以外使用における第1段階水産動植物被害予測濃度(水産 PEC_{tierl})を算出した結果、 $3.0 \times 10^4 \, \mu g/L$ であった($2.5.3.3 \, \delta$ 照)。

^{1) ·} 有効成分濃度 2) · ブロフラニリド等量換算

ブロフラニリドの生物濃縮性試験の結果、総ブロフラニリド*の BCFss は高濃度処理区 $(10 \, \mu g/L)$ で 279、低濃度処理区 $(1 \, \mu g/L)$ で 357 であった。ブロフラニリドの BCFss は高濃度処理区 $(10 \, \mu g/L)$ で 102、低濃度処理区 $(1.0 \, \mu g/L)$ で 123 であった $(2.6.2.4 \, \delta \, \mathrm{M})$ 。最大となる魚介類中の推定残留量を算定するため、ブロフラニリドの BCF として 357 を選択した。下記の計算式を用いてブロフラニリドの魚介類中の推定残留濃度を算定した結果、 $5.3 \times 10^{-4} \, \mathrm{mg/kg}$ であった。 $(-4 \, \mathrm{E} \, \mathrm{E}$

推定残留濃度=水産 $PEC_{tier1} \times (BCF \times 補正値)$ = $0.0003 \mu g/L \times (357 \times 5)$ = $0.5355 \mu g/kg$ = $5.3 \times 10^{-4} mg/kg$

2.4.2.4 後作物

ほ場土壌残留試験 (2.5.2.2 参照) におけるブロフラニリドの 50% 消失期 (DT_{50}) は、火山 灰壌土で 29日、沖積壌土で 25日であり、100日を超えないため、試験実施は不要であると判断した。

2.4.2.5 暴露評価

理論最大1日摂取量(TMDI)

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会における暴露評価を表 2.4-31 に示す。各食品について基準値案の上限までブロフラニリドが残留していると仮定した場合、平成 17~19 年度の食品摂取頻度・摂取量に基づき試算されるブロフラニリドの国民平均、幼小児(1~6歳)、妊婦及び高齢者(65歳以上)における TMDI の ADI に対する比(TMDI/ADI)はそれぞれ 35.6、46.6、33.1 及び 39.9%であり、今回申請された使用方法に従えば、消費者の健康に影響がないことを確認した。

表 2.4-31: ブロフラニリドの推定摂取量 (TMDI) (単位: μg/人/day)

(URL: https://www.mhlw.go.jp/content/11130500/000604333.pdf)

食品名	基準値案 (ppm)	国民平均 TMDI	幼小児 (1~6 歳) TMDI	妊婦 TMDI	高齢者 (65 歳以上) TMDI
かんしょ	0.01	0.1	0.1	0.1	0.1
だいこん類(ラディッシュを含む。)の根	0.01	0.3	0.1	0.2	0.5
だいこん類(ラディッシュを含む。)の葉	9	15.3	5.4	27.9	25.2
かぶ類の根	0.04	0.1	0.0	0.0	0.2
かぶ類の葉	6	1.8	0.6	0.6	3.6
はくさい	1	17.7	5.1	16.6	21.6
キャベツ	0.4	9.6	4.6	7.6	9.5

^{*:} ブロフラニリド及び代謝物 B が魚体中における主要な残留物であることから、ブロフラニリド及び代謝物 B の合計値とした。

ケール	10	2.0	1.0	1.0	2.0
こまつな	6	30.0	10.8	38.4	38.4
きょうな	5	11.0	2.0	7.0	13.5
チンゲンサイ	10	18.0	7.0	18.0	19.0
カリフラワー	2	1.0	0.4	0.2	1.0
ブロッコリー	2	10.4	6.6	11.0	11.4
その他のあぶらな科野菜	10	34.0	6.0	8.0	48.0
レタス(サラダ菜及びちしゃを含む。)	15	144.0	66.0	171.0	138.0
ねぎ (リーキを含む。)	3	28.2	11.1	20.4	32.1
えだまめ	0.8	1.4	0.8	0.5	2.2
その他のハーブ	10	9.0	3.0	1.0	14.0
計		333.9	130.6	329.5	380.2
ADI 比(%)		35.6	46.6	33.1	39.9

TMDI 試算は、基準値案×各食品の平均摂取量の総和として計算している。

短期推定摂取量(ESTI)

ブロフラニリドについては、ARfD の設定は必要なし(2.3.2 参照)とされており、ESTI は 算出しなかった。

2.4.3 残留農薬基準値

薬事・食品衛生審議会食品衛生分科会において了承された基準値案を表 2.4-32 に示す。

表 2.4-32: ブロフラニリドの残留農薬基準値案

(URL: https://www.mhlw.go.jp/content/11130500/000604333.pdf)

食品名	残留基準値案 (ppm)	基準値現行 (ppm)	登録有無 1)	
かんしょ	0.01	_	申	
だいこん類(ラディッシュを含む。)の根	0.01	_	申	
だいこん類(ラディッシュを含む。)の葉	9	_	申	
かぶ類の根	0.04	_	申	
かぶ類の葉	6	_	申	
はくさい	1	_	申	
キャベツ	0.4	_	申	
ケール	10	_	申	
こまつな	6	_	申	
きょうな	5	_	申	
チンゲンサイ	10	_	申	
カリフラワー	2	_	申	
ブロッコリー	2	_	申	
その他のあぶらな科野菜	10	_	申	

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

レタス (サラダ菜及びちしゃを含む。)	15	_	申
ねぎ (リーキを含む。)	3	_	申
えだまめ	0.8	_	申
その他のハーブ	10	_	申

^{1):}申:登録申請(平成30年2月27日付け)に伴い残留農薬基準値設定を要請した食品

2.5 環境動態

2.5.1 環境中動態の評価対象となる化合物

2.5.1.1 土壌中

ブロフラニリドの好気的土壌中動態試験及び加水分解動態試験において、主要分解物は認められなかったことから、畑地ほ場の表層土における評価対象物質は、ブロフラニリドとすることが妥当であると判断した。

2.5.1.2 水中

ブロフラニリドの加水分解動態試験及び水中光分解動態試験において、主要分解物は認められなかったことから、水中における評価対象物質は、ブロフラニリドとすることが妥当であると判断した。

2.5.2 土壌中における動態

2.5.2.1 土壌中動態

フルオロベンゼンのベンゼン環の炭素を ¹⁴C で均一に標識したブロフラニリド(以下「[a-ben-¹⁴C] ブロフラニリド」という。)、アニリンのベンゼン環の炭素を ¹⁴C で均一に標識したブロフラニリド(以下「[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリド」という。)及び安息香酸のベンゼン環の炭素を ¹⁴C で均一に標識したブロフラニリド(以下「[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリド」という。)を用いて実施した好気的土壌中動態試験の報告書を受領した。

[c-ben-14C]ブロフラニリド

*: ¹⁴C 標識の位置

2.5.2.1.1 好気的土壌

(1)シルト質壌土

シルト質壌土 (茨城、pH 5.3 (CaCl₂)、有機炭素含有量 (OC) 3.5 %) に、[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリド又は[c-ben-¹⁴C]ブロフラニリドを乾土あたり 0.1 mg/kg (施用量として 100 g ai/ha) となるように添加し、好気的条件、 $25 ^{\circ}$ C、湿潤条件(最大容水量の約 $55 ^{\circ}$ %)、暗所でインキュベートした。揮発性物質は 1 M NaOH 及びエチレングリコールで捕集した。処理 0.7、14.28.56.84.126 及び 182 日後に試料を採取した。また、滅菌土壌を用いた試験区を設けた。

土壌はアセトニトリル/水(7/3(v/v))、アセトニトリル/0.5 mol/L 塩酸(7/3(v/v))で抽出し、液体シンチレーションカウンター(LSC)で放射能を測定後、液体クロマトグラフィー(HPLC)で放射性物質を定量し、HPLC 及び薄層クロマトグラフィー(TLC)で同定した。抽出残渣はサンプルオキシダイザーで燃焼後、LSC で放射能を測定した。[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリド処理 126 日後の抽出残渣はアセトニトリル/0.5 M 塩酸(7/3(v/v))でソックスレー抽出後、フミン、フルボ酸及びフミン酸に分画し、その化学的特徴付けを行った。揮発性物質の捕集液は LSC で放射能を測定した。

土壌中の放射性物質濃度の分布を表 2.5-1 に示す。

[b-ben- 14 C]ブロフラニリド処理においては、土壌中の放射性物質は総処理放射性物質 (TAR) の $100\sim103$ %の範囲で推移した。 CO_2 の生成は認められなかった。揮発性有機物質の生成は 1 %TAR 未満であった。土壌抽出画分中の放射性物質は経時的に減少し、182 日後に 78 %TAR であった。抽出残渣中の放射性物質は経時的に増加し、182 日後に 22 %TAR であった。滅菌土壌では、土壌中の放射性物質の分布に変化は認められなかった。

[c-ben- 14 C]ブロフラニリド処理においては、土壌中の放射性物質は経時的に減少し、182日後に 72 %TAR であった。 CO_2 は経時的に増加し、182日後に 26 %TAR であった。揮発性有機物質の生成は認められなかった。土壌抽出画分中の放射性物質は経時的に減少し、182日後に 62 %TAR であった。抽出残渣中の放射性物質は経時的に増加し、182日後に10 %TAR であった。滅菌土壌では、土壌中の放射性物質の分布に変化は認められなかった。

表 2.5-1: 土壌中の放射性物質濃度の分布 (%TAR)

X 2.5 1 . 3	L-X V///X/1	性物質底度の2 [b-ben- ¹⁴ C	[]ブロフラニリド	 ・非滅菌		
経過		土壌			揮発性	
日数		抽出画分	抽出残渣	¹⁴ CO ₂	有機物質	合計
0	103	102	0.7	_	_	103
7	103	101	1.6	ND	< 0.1	103
14	103	99.4	4.1	ND	< 0.1	104
28	102	94.0	7.8	ND	0.1	102
56	102	88.7	12.8	ND	0.2	102
84	100	82.6	17.6	ND	0.3	100
126	102	80.4	21.5	ND	0.3	102
182	100	77.9	22.4	ND	0.4	101
		[b-ben-14	C]ブロフラニリ	ド・滅菌		
経過		土壌		1400	揮発性	Δ∌L
日数		抽出画分	抽出残渣	$^{14}\mathrm{CO}_2$	有機物質	合計
28	108	106	1.5	_		
84	106	105	1.5	-	_	106
		[c-ben- ¹⁴ C	[]ブロフラニリド	・非滅菌		
経過		土壌			揮発性	合計
日数		抽出画分	抽出残渣	¹⁴ CO ₂	有機物質	□п
0	100	100	ND	_	_	100
7	99.4	96.7	2.6	1.8	ND	101
14	95.1	90.6	4.5	4.6	ND	99.7
28	92.0	86.0	6.0	8.4	ND	100
56	84.7	76.5	8.2	13.6	ND	98.4
84	82.5	74.1	8.4	17.2	ND	99.7
126	78.0	68.0	10.0	21.2	ND	99.2
182	72.1	61.7	10.3	25.6	ND	97.7
		[c-ben- ¹⁴	C]ブロフラニリ	ド・滅菌		
経過		土壌		¹⁴ CO ₂	揮発性	合計
日数		抽出画分	抽出残渣	1002	有機物質	口印
28	106	105	1.0	_	_	106
84 34 W 450 Fr. 13-15	109	107	1.7	_	_	109

- : 試料採取せず

抽出画分中のブロフラニリド及び分解物の定量結果を表 2.5-2 に示す。

ブロフラニリドは経時的に減少し、182日後に $46\sim56$ % TAR であった。多数の未同定分解物の生成が認められたが、最大で 3.9 % TAR であった。滅菌土壌では、ブロフラニリドの減少は認められなかった。

表 2.5-2: 抽出画分中のブロフラリド及び分解物の定量結果 (%TAR)

	[b-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド・非滅菌	
経過日数	ブロフラニリド	未同定分解物
0	97.2	5.0
7	93.5	7.8
14	87.0	12.4
28	76.9	17.1
56	66.6	22.1
84	56.1	26.5
126	50.9	29.4
182	45.5	32.3*
	[b-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド・滅菌	
経過日数	ブロフラニリド	未同定分解物
28	103	2.8
84	102	2.4
	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド・非滅菌	
経過日数	ブロフラニリド	未同定分解物
0	94.3	5.8
7	91.9	4.9
14	84.8	5.8
28	81.0	5.0
56	71.0	5.6
84	69.0	5.1
126	61.4	6.6
182	55.8	6.0
	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド・滅菌	
経過日数	ブロフラニリド	未同定分解物
28	100	5.3
84	102	5.5

^{-:} 試料採取せず *: 少なくとも 22 種類の未同定分解物の合計(各成分は 3.9 %TAR 以下)

126日後の抽出残渣中の放射性物質の化学的特徴付けを表 2.5-3 に示す。

抽出残渣中の放射性物質はソックスレー抽出により 7.9% TAR が抽出された。ソックスレー抽出後の抽出残渣中の放射性物質はフミン酸画分に 6.5% TAR、フミン画分に 5.2% TAR、フルボ酸画分に 3.4% TAR が分布していた。

表 2.5-3:126 日後の抽出残渣中の放射性物質の特徴付け (%TAR)

[b-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド・非滅菌					
ソックスレー抽出	フミン酸	フミン	フルボ酸		
7.9	6.5	5.2	3.4		

好気的土壌中におけるブロフラニリドの DT50 を表 2.5-4 に示す。

好気的土壌中におけるブロフラニリドの DT_{50} は FOMC モデル (First Order Multi Compartment Model) を用いて算出すると、 $137\sim352$ 日であった。滅菌土壌ではブロフラニリドの減衰が認められなかったことから、半減期の算出は行わなかった。

表 2.5-4: 好気的土壌中におけるブロフラニリドの DT50

[b-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド		
137 日	352 日		

(2) 壤土

壌土 (茨城、pH 5.2 (CaCl₂)、OC 2.1 %) に、[a-ben-¹⁴C] ブロフラニリドを、乾土あたり 0.1 mg/kg(施用量として 100 g ai/ha)となるように添加し、好気的条件、25 $^{\circ}$ C、湿潤条件 (最大容水量の約 50 %)、暗所でインキュベートした。揮発性物質は 1 M NaOH 及びエチレングリコールで捕集した。処理 0、14、28、56、112 及び 182 日後に試料を採取した。

土壌はアセトニトリル/水(7/3(v/v))、アセトニトリル/0.5 mol/L 塩酸(7/3 (v/v))で抽出し、LSC で放射能を測定後、HPLC で放射性物質を定量し、HPLC 及び TLC で同定した。抽出残渣は燃焼後、LSC で放射能を測定した。

揮発性物質の捕集液は LSC で放射能を測定した。

土壌中の放射性物質濃度の分布を表 2.5-5 に示す。

土壌中の放射性物質は $100\sim103~\%$ TAR の範囲で推移した。 CO_2 の生成が認められ、182 日後に 1.3~% TAR であった。揮発性有機物質の生成は 0.1~% TAR 未満であった。土壌抽出画分中の放射性物質は経時的に減少し、182~% 日後に 91~% TAR であった。抽出残渣中の放射性物質は経時的に増加し、182~% 日後に 9.2~% TAR であった。

[a-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド・非滅菌								
経過		土壌		¹⁴ CO ₂	揮発性	合計		
日数		抽出画分	抽出残渣	1.002	有機物質	ΠЫ		
0	103	102	0.5	_	_	103		
14	103	101	1.3	0.2	ND	103		
28	103	101	1.8	0.3	ND	103		
56	102	98.2	3.4	0.5	< 0.1	102		
112	100	94.8	5.6	0.9	< 0.1	101		
182	100	90.9	9.2	1.3	< 0.1	101		

表 2.5-5: 十壌中の放射性物質濃度の分布 (%TAR)

抽出画分中のブロフラニリド及び分解物の定量結果を表 2.5-6 に示す。

ブロフラニリドは経時的に減少し、182日後に 63% TAR であった。多くの未同定分解物の生成が認められたが、最大で 5.0% TAR であった。

公 2.3 0:周田四分 10 / 1 / 7 / 7 / 1 / 10 / 2 至相宋(WITH)							
[a-ben-14C]ブロフラニリド・非滅菌							
経過日数	ブロフラニリド	未同定分解物					
0	92.7	9.8					
14	90.5	10.7					
28	88.7	12.1					
56	82.6	15.6					
112	78.2	16.6					
182	62.7	28.2*					

表 2.5-6: 抽出画分中のブロフラリド及び分解物の定量結果 (%TAR)

好気的土壌中におけるブロフラニリドの DT₅₀ は SFO モデル (Simple First Order Model) を用いて算出すると、359 日であった。

(3) 好気的土壌まとめ

好気的条件下において、ブロフラニリドは多数の未同定分解物を生成し、最終的には土壌成分との結合性残留物となると考えられる。また、安息香酸のベンゼン環由来の分解物の一部は CO₂まで無機化されると考えられる。

2.5.2.2 土壌残留

ブロフラニリド、代謝物 C 及び代謝物 D を分析対象として実施した畑地ほ場土壌残留試験の報告書を受領した。

火山灰壌土 (茨城、pH 5.8 (CaCl₂)、OC 5.3 %) 及び沖積壌土 (高知、pH 4.9 (KCl)、OC 1.9 %) の畑地ほ場 (裸地) に、ブロフラニリド 5.0 %水和剤を 300 g ai/ha 土壌表面散布 (2,000 倍、

^{- :} 試料採取せず

^{*:} 少なくとも 20 種類の未同定分解物の合計(各成分は 5.0 % TAR 以下)

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

400 L/10 a、3 回 (6~8 日間間隔)) した。処理 0、1、3、14、21、30、60 (沖積壌土では63)、90 (沖積壌土では92)、150、210 (沖積壌土では211)、270 及び360 日後に土壌を採取した。分析法は2.2.4.1 に示した土壌分析法を用いた。

畑地ほ場における土壌残留試験の結果を表 2.5-7 に示す。

ブロフラニリドは 0 日に火山灰壌土で 0.43 mg/kg、沖積壌土で 0.20 g/kg であり、経時的に減少し、360 日後にそれぞれ 0.03 g/kg であった。

代謝物 C は最大で 0.003 mg/kg (ブロフラニリド等量として) であり、ブロフラニリドと比較して低い濃度で推移した。

代謝物 D は試験期間をとおして定量限界 (ブロフラニリド等量として $0.003~{\rm g/kg}$) 未満であった。

畑地土壌中におけるブロフラニリドの DT₅₀ は FOMC モデルを用いて算定すると、火山灰壌 土で 29 日、沖積壌土で 25 日であった。

表 2.5-7: 畑地ほ場土壌残留試験の結果

	火山灰壤土		沖積壌土			
√ ∀ \□ □ */ ·	残留濃度(mg/kg)*	√ ∇ \Ε □ ¥/ -	残留濃度	(mg/kg)*	
経過日数	ブロフラニリド	代謝物 C	経過日数	ブロフラニリド	代謝物 C	
0	0.430	0.002	0	0.204	< 0.002	
1	0.425	0.002	1	0.274	< 0.002	
3	0.450	0.003	3	0.220	< 0.002	
14	0.350	0.003	14	0.136	< 0.002	
21	0.206	0.002	21	0.148	< 0.002	
30	0.222	0.002	30	0.118	< 0.002	
60	0.142	0.002	63	0.044	< 0.002	
90	0.124	0.002	92	0.048	< 0.002	
150	0.051	< 0.002	150	0.030	< 0.002	
210	0.060	0.002	211	0.030	< 0.002	
270	0.034	< 0.002	270	0.034	< 0.002	
360	0.028	< 0.002	360	0.034	< 0.002	

^{*:}ブロフラニリド等量換算

2.5.2.3 土壤吸着

[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリドを用いて実施した土壌吸着試験の報告書を受領した。

25 $^{\circ}$ 、暗条件で土壌吸着試験を実施し、Freundlich の吸着平衡定数を求めた。試験土壌の特性を表 2.5-8 に、Freundlich の吸着平衡定数を表 2.5-9 に示す。

X 2.0 0 . F (8), E X > 1/1 E							
採取地	米国①	米国②	米国③	英国①	米国④	埼玉*	米国⑤
土性 (USDA 法)	壌土	砂壌土	壌土	シルト質 壌土	壌土	砂壌土	埴壌土
pH (H ₂ O)	7.5	5.5	6.9	5.6	6.4	5.5	7.8
有機炭素含有量 (OC%)	3.8	0.56	2.0	3.9	6.9	3.0	3.2

表 2.5-8: 試験土壌の特性

表 2.5-9: 試験土壌における Freundlich の吸着平衡定数

採取地	米国①	米国②	米国③	英国①	米国④	埼玉	米国⑤
吸着指数 (1/n)	1.024	0.9979	0.9240	0.9129	0.9413	0.9966	0.8681
$\mathbf{K}^{\mathrm{ads}}_{\mathrm{F}}$	250	147	117	191	268	99	163
決定係数 (r²)	0.9943	0.9715	0.8874	0.9684	0.9692	0.9608	0.9320
K^{ads} Foc	6,580	26,200	5,850	4,900	3,880	3,300	5,090

2.5.3 水中における動態

[b-ben- 14 C]ブロフラニリドを用いて実施した加水分解動態試験並びに[b-ben- 14 C]ブロフラニリド及び[c-ben- 14 C]ブロフラニリドを用いて実施した水中光分解動態試験の報告書を受領した。

2.5.3.1 加水分解

pH 4 (フタル酸緩衝液)、pH 7 (リン酸緩衝液)及び pH 9 (ホウ酸緩衝液)の滅菌緩衝液を用い、[b-ben- 14 C] ブロフラニリドの試験溶液 (0.01 mg/L)をそれぞれ調製し、 50 ± 0.5 $^{\circ}$ C、5 日間、暗所でインキュベートした。処理 0 及び 5 日後に試料を採取した。

緩衝液は LSC で放射能を測定後、HPLC で放射性物質を定量及び同定した。

全ての pH において、緩衝液中のブロフラニリドは $92\sim102$ % TAR であり、加水分解は認められなかった。

2.5.3.2 水中光分解

滅菌緩衝液(pH 7)を用い、[b-ben-¹⁴C] ブロフラニリド及び[c-ben-¹⁴C] ブロフラニリドの試験溶液(0.01 mg/L)を調製し、 25 ± 1 °C σ UV フィルター(\sim 290 nm カット)付きキセノンランプ(\sim 44.3 \sim 49.1 W/m²、波長範囲: \sim 300 \sim 400 nm)を 16 日間連続照射した。揮発性物質は 10 % NaOH 及びエチレングリコールで捕集した。照射開始 0、1、2、5、7、12 及び 16 日後に試料を採取した。

緩衝液は6M塩酸/酢酸エチル(1/1,500(v/v))で抽出し、LSC で放射能を測定した。試験容器はアセトニトリルで洗浄し、LSC で放射能を測定した。抽出画分及び洗浄画分は HPLC で放射性物質を定量し、HPLC 及び TLC で同定した。

揮発性物質の捕集液は LSC で放射能を測定した。

^{*:}火山灰土壌

滅菌緩衝液中のブロフラニリド及び分解物の定量結果を表 2.5-10 に示す。

ブロフラニリドは経時的に減少し、16 日後に $74\sim76$ % TAR であった。代謝物 C 及び代謝物 D の生成が認められ、それぞれ最大で 5.0 % TAR 及び 6.1 % TAR であった。[b-ben- 14 C]ブロフラニリド処理では CO_2 の生成が認められ、16 日後に 4.2 % TAR であった。

暗所区では、ブロフラニリドは16日後に94~96%TARであり、分解は認められなかった。

表 2.5-10: 緩衝液中のブロフラニリド及び分解物の定量結果 (%TAR)

表 2.5-10: 綾餌彼中のノロノフニリト及い分解物の足重結果 (%TAR) [b-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド・照射区								
—————————————————————————————————————	ブロフラ ニリド	代謝物 C	代謝物 D	未同定 分解物	CO ₂	揮発性 有機物質	合計	
0	104	0.0	0.0	0.0	_	_	104	
1	99.9	0.4	1.3	0.0	0.0	0.0	102	
2	96.2	0.0	2.1	0.7	0.7	0.4	99.9	
5	88.9	0.0	3.1	3.3	0.7	0.2	96.1	
7*	107	3.8	3.3	1.2	1.9	0.2	117	
12	79.7	1.2	6.1	0.6	3.3	0.4	91.1	
16	73.8	5.0	4.7	2.6	4.2	0.0	90.1	
		[b-b	oen- ¹⁴ C]ブロフ	ラニリド・暗戸	沂区			
経過 日数	ブロフラ ニリド	代謝物 C	代謝物 D	未同定 分解物	CO ₂	揮発性 有機物質	合計	
1	98.2	1.0	0.0	0.4	0.0	0.0	99.5	
2	96.2	0.0	0.0	1.2	0.0	0.0	97.4	
5	97.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	97.7	
7	111	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	112	
12	98.0	0.0	0.0	1.2	0.4	0.0	99.5	
16	96.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	96.2	
		[c-b	en- ¹⁴ C]ブロフ	ラニリド・照射	村区			
経過 日数	ブロフラ ニリド	代謝物 C	代謝物 D	未同定 分解物**	CO_2	揮発性 有機物質	合計	
0	95.0	0.0	0.0	1.9	_	_	97.9	
1	93.5	1.1	0.2	3.7	0.0	0.0	98.4	
2	92.5	2.8	0.7	4.9	0.0	0.0	101	
5	88.7	1.4	1.1	5.3	0.0	0.0	96.5	
7	91.8	1.6	0.7	2.1	0.0	0.0	96.0	
12	81.4	3.4	1.6	10.4	0.4	0.0	96.8	
16	75.5	2.5	1.5	12.4	0.5	0.0	92.3	

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド・暗所区									
経過 日数	ブロフラ ニリド	未同定分解物	CO ₂	揮発性 有機物質	合計					
1	93.4	4.0	0.0	0.0	97.4					
2	99.7	1.8	0.0	0.0	102					
5	93.3	3.6	0.0	0.0	96.7					
7	95.2	2.8	0.0	0.0	98.0					
12	96.3	3.5	0.0	0.0	99.7					
16	94.1	4.1	0.0	0.0	98.1					

^{-:} 試料採取せず

滅菌緩衝液中におけるブロフラニリドの光照射による DT50 を表 2.5-11 に示す。

滅菌緩衝液中におけるブロフラニリドの光照射による DT_{50} は SFO モデルを用いて算出すると、 $34\sim52$ (東京春換算 $209\sim297$)日であった。

表 2.5-11: 滅菌緩衝液中におけるブロフラニリドの光照射による DT50

[b-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド	[c-ben- ¹⁴ C]ブロフラニリド
33.6 日 (209 日)*	52.2 日(297 日)

⁽⁾ 内は東京春換算

光照射下の水中においてブロフラニリドは、ペルフルオロプロピル基フッ素の水酸基への置換により代謝物 C、ベンゾオキサゾール環の形成により代謝物 D 等に変換され、一部は CO_2 になると考えられた。

2.5.3.3 水產動植物被害予測濃度

環境大臣の定める水産動植物の被害防止に係る農薬登録保留基準値と比較(2.6.2.2.2 参照) するため、ブロフレア SC (ブロフラニリド 5.0 %水和剤) 及びブロフレア 20SC (ブロフラニリド 20 %水和剤) について、ブロフラニリドの水産動植物被害予測濃度第1段階(水産 PEC_{tierl}) を算定 11 した。

その結果、最大となるブロフラニリドの水産 PEC $_{tierl}$ は、ブロフレア SC 及びブロフレア 20SC における $3.0\times10^4\,\mu g/L$ であった。

1) 水産動植物被害予測濃度の算定に用いる計算シートは、環境省がホームページにおいて提供している。 (URL: http://www.env.go.jp/water/sui-kaitei/kijun.html)

(1) ブロフレア SC

水田以外使用について申請されている使用方法に基づき、表 2.5-12 に示すパラメータを 用いて水産 PEC_{tierl} を算定した結果、 3.0×10^4 $\mu g/L$ であった。

^{*:}経時的な傾向及び[c-ben-14C]ブロフラニリド添加区の結果との乖離から異常値を判断した

^{**:3}種類の未同定分解物の合計(各成分は5.5%TAR以下)

^{*:7}日後の試料は異常値と判断したため、DT50の算出には用いなかった

表 2.5-12: ブロフレア SC の水産 PECtierl 算出に関する使用方法及びパラメータ

剤型	5.0 %水和剤
適用作物	野菜
単回の農薬散布量	150 g/10a(2,000 倍、300 L/10 a)
地上防除/航空防除	地上防除
施用方法	散布
単回の有効成分投下量	75 g/ha
地表流出率	0.02 %
ドリフト	あり (ドリフト率 0.1%)
施用方法により農薬流出補正係数	1

(2) ブロフレア 20SC

水田以外使用について申請されている使用方法に基づき、表 2.5-13 に示すパラメータを 用いて水産 PEC_{tierl} を算定した結果、 $3.0 \times 10^4 \, \mu g/L$ であった。

表 2.5-13: ブロフレア 20SC の水産 PECtierl 算出に関する使用方法及びパラメータ

剤型	20.0 %水和剤
適用作物	野菜
単回の農薬散布量	37.5 g/10a(8,000 倍、300 L/10 a)
地上防除/航空防除	地上防除
施用方法	散布
単回の有効成分投下量	75 g/ha
地表流出率	0.02 %
ドリフト	あり (ドリフト率 0.1%)
施用方法により農薬流出補正係数	1

2.5.3.4 水質汚濁予測濃度

環境大臣の定める水質汚濁に係る農薬登録保留基準値と比較(2.3.3.2 参照)するため、ブロフラニリドの水質汚濁予測濃度第1段階(水濁PEC_{tietl})を算定した。

水田以外使用について申請されている使用方法に基づき、表 2.5-14 に示すパラメータを用いて水濁 PEC_{tierl} を算定 $^{1)}$ した結果、 3.5×10^{-6} mg/L であった。

1) 水質汚濁予測濃度の算定に用いる計算シートは、環境省がホームページにおいて提供している。 (URL: http://www.env.go.jp/water/dojo/noyaku/odaku_kijun/kijun.html)

表 2.5-14: 水田以外使用における水濁 PECtierl 算出に関する使用方法及びパラメータ

剤型	5.0 %水和剤
適用作物	野菜
単回の農薬散布量	150 g/10 a(希釈倍数 2,000 倍、300 L/10 a)
地上防除/航空防除	地上防除
施用方法	散布
総使用回数	3 回
単回の有効成分投下量	75 g/ha
地上流出率	0.02 %
ドリフト	あり(ドリフト率 0.2 %)
施用方法による農薬流出補正係数	1

2.6 標的外生物への影響

2.6.1 鳥類への影響

ブロフラニリド原体を用いて実施した鳥類への影響試験の報告書を受領した。 結果概要を表 2.6-1 に示す。

鳥類への毒性は低く、ブロフラニリドの鳥類への影響は認められなかった。

表 2.6-1: ブロフラニリドの鳥類への影響試験の結果概要

生物種	1 群当りの 供試数	投与方法	投与量	結果	観察された症状
コリン	雄 5、雌 5	強制経口 投与	0、2,000 mg/kg 体重	LD ₅₀ : >2,000 mg/kg 体重 NOEL: 2,000 mg/kg 体重	なし
ウズラ	30	5 日間 混餌投与	0,5,000 ppm	LC ₅₀ : >5,000 ppm	なし
マガモ	雄 5、雌 5	強制経口 投与	0、2,000 mg/kg 体重	LD ₅₀ : >2,000 mg/kg 体重 NOEL: 2,000 mg/kg 体重	なし
\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	30 (5,000 ppm 群) 20 (0 ppm 群)	5 日間 混餌投与	0,5,000 ppm	LC ₅₀ : >5,000 ppm	一時的な摂餌量の低下、 体重減少

2.6.2 水生生物への影響

2.6.2.1 原体の水産動植物への影響

ブロフラニリド原体を用いて実施した魚類急性毒性試験、ミジンコ類急性遊泳阻害試験及 び藻類生長阻害試験の報告書を受領した。

中央環境審議会土壌農薬部会農薬小委員会による評価(URL:

http://www.env.go.jp/water/broflanilide.pdf) を以下に転記する。(本項末まで)

魚類

魚類急性毒性試験 [i] (コイ)

コイを用いた魚類急性毒性試験が実施され、96 hLC50>494 g/L であった。

表 2.6-2: コイ急性毒性試験結果

被験物質	原体							
供試生物	コイ (Cyprinus carpio) 20尾/群							
暴露方法	半止水式 (暴露開始 24 時間毎に換水)							
暴露期間	96 h							
設定濃度 (μg/L) (有効成分換算値)	0	75	150	300	600	1,200		
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値、有効成分換算値)	0 49 95 125 239 494							
死亡数/供試生物数 (96 h 後;尾)	0/20	0/20	0/20	0/20	0/20	1/20		
助剤	DMF 0.1 mL/L							
LC ₅₀ (µg/L)	>494 (実測濃	農度 (有効成分	分換算値) に	基づく)				

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

魚類急性毒性試験 [ii] (ブルーギル)

ブルーギルを用いた魚類急性毒性試験が実施され、96 hLC₅₀=246 μg/L であった。

表 2.6-3:ブルーギル急性毒性試験結果

被験物質	原体							
供試生物	ブルーギル (Lepomis macrochirus) 20 尾/群							
暴露方法	半止水式 (暴露開始 24 時間毎に換水)							
暴露期間	96 h							
設定濃度 (μg/L) (有効成分換算値)	0	75	150	300	600	1,200		
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値、有効成分換算値)	0 50 95 158 290 563							
死亡数/供試生物数 (96 h 後;尾)	0/20 0/20 0/20 0/20 15/20 20/20							
助剤	DMF 0.1 mL/L							
LC ₅₀ (μg/L)	246 (95 %信	頼限界 158-	290) (実測濃	度 (有効成分	が換算値) にま	基づく)		

魚類急性毒性試験[iii] (ニジマス)

ニジマスを用いた魚類急性毒性試験が実施され、96 hLC₅₀=359 μg/L であった。

表 2.6-4: ニジマス急性毒性試験結果

被験物質	原体	原体						
供試生物	ニジマス (С	ニジマス (Oncorhynchus mykiss) 20 尾/群						
暴露方法	半止水式 (暴露開始 24 時間毎に換水)							
暴露期間	96 h							
設定濃度 (μg/L) (有効成分換算値)	0	75	150	300	600	1,200		
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値、有効成分換算値)	0	46	90	132	260	649		
死亡数/供試生物数 (96 h 後;尾)	0/20 0/20 0/20 0/20 3/20 20/20							
助剤	DMF 0.1 mL/L							
LC ₅₀ (µg/L)	359 (95 %信息	359 (95 %信頼限界 260-649) (実測濃度 (有効成分換算値) に基づく)						

甲殼類等

ミジンコ類急性遊泳阻害試験) [i] (オオミジンコ)

オオミジンコを用いたミジンコ類急性遊泳阻害試験が実施され、48 hEC50 >332 μ g/L であった。

表 2.6-5: オオミジンコ急性遊泳阻害試験結果

被験物質	原体	原体							
供試生物	オオミジン	オオミジンコ (Daphnia magna) 20 頭/群							
暴露方法	半止水式 (氢	半止水式 (暴露開始 24 時間毎に換水)							
暴露期間	48 h	48 h							
設定濃度 (μg/L) (有効成分換算値)	0	0 25 50 100 200 400							
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値)	0	0 21 39 68 147 332							
遊泳阻害数/供試生物数 (48 h 後;頭)	0/20	0/20 0/20 0/20 0/20 0/20 0/20							
助剤	DMF 0.1 mL	DMF 0.1 mL/L							
EC ₅₀ (μg/L)	>332 (実測淵	>332 (実測濃度 (有効成分換算値) に基づく)							

ユスリカ幼虫急性遊泳阻害試験 [ii] (セスジユスリカ)

セスジュスリカを用いたユスリカ幼虫急性遊泳阻害試験が実施され、48 hEC50 =0.16 μ g/L であった。

表 2.6-6: ユスリカ幼虫急性遊泳阻害試験結果

被験物質	原体								
供試生物	セスジユス	セスジユスリカ (Chironomus yoshimatsui) 20 頭/群							
暴露方法	止水式	止水式							
暴露期間	48 h								
設定濃度 (μg/L) (有効成分換算值)	0	0.019	0.043	0.094	0.21	0.45	1.0		
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値、有効成分換算値)	0 0.017 0.034 0.068 0.17 0.33 0.72						0.72		
遊泳阻害数/供試生物数 (48 h 後;頭)	0/20 0/20 0/20 5/20 11/20 13/20 20/20								
助剤	DMF 0.1 mL/L								
EC ₅₀ (μg/L)	0. 16 (95 %	信頼限界 0	0.12-0.22) (5	実測濃度 (有効成分換	算値) に基	づく)		

藻類

藻類生長阻害試験 [i] (ムレミカヅキモ)

Pseudokirchneriella subcapitata を用いた藻類生長阻害試験が実施され、

72 hErC₅₀>710 μg/L であった。

表 2.6-7: 藻類生長阻害試験結果

被験物質	原体	原体							
供試生物	P. subcapitat	P. subcapitata 初期生物量 1.0×10 ⁴ cells/mL							
暴露方法	振とう培養	振とう培養							
暴露期間	96 h	96 h							
設定濃度 (μg/L)	0	0 63 130 250 500 1,000							
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値)	0	0 54 120 210 420 710							
72 h 後生物量 (×10 ⁴ cells/mL)	280	280 281 283 279 251 252							
0-72 h 生長阻害率(%)		0 -1 1 11 10							
助剤	DMF 0.1 mL	DMF 0.1 mL/L							
ErC ₅₀ (μg/L)	>710 (実測湯	農度 (有効成	分換算値) に	基づく)					

2.6.2.2 水産動植物の被害防止に係る農薬登録保留基準

2.6.2.2.1 登録保留基準値

中央環境審議会土壌農薬部会農薬小委員会による評価結果 (URL: http://www.env.go.jp/water/broflanilide.pdf) を以下に転記する。(本項末まで)

水産動植物の被害防止に係る登録保留基準値

各生物種のLC50、EC50 は以下のとおりであった。

魚類[i](コイ急性毒性)	96 hLC ₅₀	>	$494 \mu g/L$
魚類 [ii] (ブルーギル急性毒性)	96 hLC ₅₀	=	$246~\mu g/L$
魚類 [iii] (ニジマス急性毒性)	96 hLC ₅₀	=	359 μg/L
甲殻類等 [i] (オオミジンコ急性遊泳阻害)	48 hEC ₅₀	>	$332 \mu g/L$
甲殻類等[ii](ユスリカ幼虫急性遊泳阻害)	48 hEC ₅₀	=	$0.16~\mu g/L$
藻類 [i] (ムレミカヅキモ生長阻害)	72 hErC ₅₀	>	$710~\mu g/L$

魚類急性影響濃度(AECf)については、最小である魚類 [ii] の LC_{50} (246 μ g/L)を採用し、3 種(3 上目 3 目 3 科)以上の生物種試験が行われた場合に該当することから、不確実係数は通常の10ではなく、3種の生物種のデータが得られた場合に使用する4を適用し、 LC_{50} を4 で除した 61.5 μ g/L とした。

甲殻類等急性影響濃度(AECd)については、甲殻類等 [ii] の EC_{50} (0.16 $\mu g/L$) を採用し、不確実係数 10 で除した 0.016 $\mu g/L$ とした。

藻類急性影響濃度 (AECa) については、藻類 [i] の ErC₅₀ (>710 μg/L) を採用し、>710 μg/L とした。

これらのうち最小の AECd より、登録保留基準値は 0.016 μg/L とする。

2.6.2.2.2 水産動植物被害予測濃度と農薬登録保留基準値の比較

水田以外の使用について申請されている使用方法に基づき算定した水産動植物被害予測濃度 (水産 PEC $_{tier1}$) の最大値は、 $3.0\times10^4\,\mu g/L$ (2.5.3.3 参照) であり、農薬登録保留基準値 0.016 $\mu g/L$ を下回っている。

2.6.2.3 製剤の水産動植物への影響

ブロフレア SC (ブロフラニリド 5.0 %水和剤) 及びブロフレア 20SC (ブロフラニリド 20 %水和剤) を用いて実施した魚類急性毒性試験、ミジンコ類急性遊泳阻害試験及び藻類生長阻害試験の報告書を受領した。

結果概要を表 2.6-8 に示す。

被験物質	試験名	生物種	暴露方法	水温(℃)	暴露期間 (h)	LC ₅₀ 又はEC ₅₀ (mg/L)	
魚類急性毒性		コイ (Cyprinus carpio)	止水	21.3~22.4	96	>1,000 (LC ₅₀)	
ブロフレア SC	ミジンコ類 急性遊泳阻害	オオミジンコ (Daphnia magna)	止水	20.0~20.9	48	>1,000 (EC ₅₀)	
	藻類生長阻害	緑藻 (Pseudokirchneriella subcapitata)	振とう 培養法	22.1~22.7	72	>1,000 (ErC ₅₀)	
	魚類急性毒性	コイ (Cyprinus carpio)	止水	21.3~22.2	96	>1,000 (LC ₅₀)	
ブロフレア 20SC	ミジンコ類 急性遊泳阻害	オオミジンコ (Daphnia magna)	止水	20.2~20.9	48	>1,000 (EC ₅₀)	
	藻類生長阻害	緑藻 (Pseudokirchneriella subcapitata)	振とう 培養法	22.1~22.7	72	>1,000 (ErC ₅₀)	

表 2.6-8: ブロフラニリド製剤の水産動植物への影響試験の結果概要

ブロフラニリドは GABA 受容体に作用する殺虫剤であり、原体を用いたユスリカ幼虫急性遊泳阻害試験が提出されている。その結果(2.6.2.1 参照)、甲殻類等の中でユスリカ幼虫に最も高い感受性が認められたことから、製剤についてユスリカ幼虫と同等の感受性を示す可能性のあるミジンコ類以外の甲殻類(エビ等)への影響を審査するため、原体のユスリカ幼虫への半数影響濃度(EC_{50})0.16 μ g/L から製剤の EC_{50} を推定した。その結果、ブロフレア SCでは 0.0032 mg/L、ブロフレア 20SCでは 0.0008 mg/L であった。

ブロフレア SC

農薬使用ほ場の近隣にある河川等に流入した場合の水産動植物への影響を防止する観点から、ほ場からの流出水中の製剤濃度 $3 \, \text{mg/L}$ (最大使用量 $150 \, \text{mL/10} \, \text{a}$ (キャベツ等)、水量 $50,000 \, \text{L}$ (面積 $10 \, \text{a}$ 、水深 $5 \, \text{cm}$ 相当)) と製剤 (ブロフレア SC) の水産動植物の LC_{50} 又は EC_{50} との比(LC_{50} 又は EC_{50} /製剤濃度)を算定した。その結果、魚類において $0.1 \, \text{を}$ 、藻類において $0.01 \, \text{を超えており}$ 、甲殻類において $0.01 \, \text{を下回っていたことから}$ 、甲殻類に対する注意 事項が必要であると判断した。

甲殻類の EC50が 1.0 mg/L 以下であったことから、容器等の洗浄及び処理に関する注意事項

が必要であると判断した。

ブロフレア 20SC

農薬使用ほ場の近隣にある河川等に流入した場合の水産動植物への影響を防止する観点から、ほ場からの流出水中の製剤濃度 0.75 mg/L (最大使用量 37.5 mL/10 a (キャベツ)、水量 50,000 L (面積 10 a、水深 5 cm 相当))と製剤(ブロフレア 20 SC)の水産動植物の LC_{50} 又は EC_{50} との比(LC_{50} 又は EC_{50} /製剤濃度)を算定した。その結果、魚類において 0.1 を、藻類において $0.01 \text{ を超えており、甲殻類において }0.01 \text{ を下回っていたことから、甲殻類に対する注意事項が必要であると判断した。$

甲殻類の EC_{50} が 1.0 mg/L 以下であったことから、容器等の洗浄及び処理に関する注意事項が必要であると判断した。

2.6.2.4 生物濃縮性

アニリンのベンゼン環の炭素を ¹⁴C で均一に標識したブロフラニリド(以下「[b-ben-¹⁴C]ブロフラニリド」という。) を用いて実施した生物濃縮性試験の報告書を受領した。

放射性物質濃度及び代謝物濃度は、特に断りがない場合はブロフラニリド換算で表示した。

*: ¹⁴C 標識の位置

ニジマス($Oncorhynchus mykiss)を用いて、流水式装置により、<math>[b-ben-^{14}C]$ プロフラニリドの高濃度処理区($10 \mu g/L$)及び低濃度処理区($1.0 \mu g/L$)を設定し、取込期間 28 日間及び排泄期間 10 日間の試験を実施した。水は毎日、魚体は取込開始 1、3、7、14、21 及び 27 日後並びに排泄開始 1、3、7 及び 10 日後に採取した。

水は直接、魚体はサンプルオキシダイザーで燃焼後、液体シンチレーションカウンター (LSC) で放射能を測定した。

魚体と同日に採取した水は酢酸エチルで抽出し、高速液体クロマトグラフィー(HPLC)で 放射性物質を定量及び同定した。

魚体は可食部と非可食部に分画し、アセトニトリル及びアセトニトリル/水 (1/1 (v/v)) で 超音波抽出後、混合し、HPLC で放射性物質を定量及び同定した。 取込期間における水及び魚体中の総放射性物質、ブロフラニリド及び代謝物濃度を表 2.6-9 に示す。

取込期間における総放射性物質の平均水中濃度は高濃度処理区で 9.5 µg/L、低濃度処理区で 0.95 g/L であった。魚体中の総放射性物質は高濃度処理区で取込開始 7 日後以降、低濃度処理区で取込開始 14 日後以降に定常状態となり、定常状態における平均魚体中濃度はそれぞれ 2,530 µg/kg 及び 349 µg/kg、生物濃縮係数 (BCF_{ss}) はそれぞれ 266 及び 367 であった。

取込期間におけるブロフラニリドの平均水中濃度は高濃度処理区で $8.6~\mu g/L$ 、低濃度処理区で 0.90~g/L であった。魚体中のブロフラニリドは高濃度処理区で取込開始 7~H 後以降、低濃度処理区で取込開始 14~H 後以降に定常状態となり、定常状態における平均魚体中濃度はそれぞれ $893~\mu g/kg$ 及び $112~\mu g/kg$ 、 BCF_{ss} はそれぞれ 102~D び 123~C あった。

定常状態(高濃度処理区 7~27 日、低濃度処理区 14~27 日)における代謝物 B の平均魚体中濃度は高濃度処理区で 1,508 μ g/kg、低濃度処理区で 209 μ g/kg であり、ブロフラニリドよりも高く、魚体中に取り込まれたブロフラニリドは速やかに分解され、代謝物 B になると考えられた。このため、ブロフラニリドの水中平均濃度及びブロフラニリド+代謝物 B の魚体中平均濃度を用いて、ブロフラニリド+代謝物 B の BCFss を算定した結果、高濃度処理区で 279、低濃度処理区で 357 であった。

衣 2.6-9:耳	込別間にわける水及	い黒浄サ	が総別別	外性物質	<u>, Эц</u>	フーリト	文の代記	谢彻底及	
		高濃度	処理区 (10	μg/L)					
取込期間(日)		0	1	3	7	14	21	27	
水中濃度 (μg/L)	総放射性物質*	9.4	9.4	9.4	9.5	9.5	9.5	9.5	
	ブロフラニリド	8.5	9.1	8.1	8.8	8.5	7.8	9.1	
魚体中濃度 (μg/kg)	総放射性物質	_	950	1,990	2,450	2,780	2,600	2,300	
	ブロフラニリド	_	505	853	898	909	984	782	
	代謝物 B	_	362	1,010	1,390	1,760	1,450	1,430	
低濃度処理区 (1 μg/L)									
取込期間(日)		0	1	3	7	14	21	27	
水中濃度 (μg/L)	総放射性物質*	1.0	0.94	0.94	0.94	0.96	0.95	0.95	
	ブロフラニリド	0.99	0.74	0.91	0.83	0.95	0.90	0.98	
魚体中濃度 (μg/kg)	総放射性物質	_	31	141	282	352	406	289	
	ブロフラニリド	_	11	59	109	117	131	89	
	代謝物 B	_	16	74	158	206	238	184	

表 2.6-9: 取込期間における水及び魚体中の総放射性物質、ブロフラニリド及び代謝物濃度

排泄期間において、水中に放射性物質は検出されなかった。

排泄期間における魚体中の総放射性物質、ブロフラニリド及び代謝物濃度を表 2.6-10 に示す。

魚体中の放射性物質は排泄開始1日後には約50%、7日後には95%以上が排泄された。魚

^{- :} 試料採取せず

^{*:}取込開始0日からの経過期間中の平均濃度

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

体中のブロフラニリドは速やかに分解され、主に代謝物 B として排泄されると考えられた。

表 2.6-10:排泄期間における魚体中の総放射性物質、ブロフラニリド及び代謝物濃度 (µg/kg)

<u> </u>	明におりの場件上	▽ /	レノノーノー及し	T(的)物液及(µg/kg			
高濃度処理区 (10 µg/L)							
排泄期間(日)	1	3	7	10			
総放射性物質	1,210	449	93	49			
ブロフラニリド	144	15	NA	NA			
代謝物 B	994	400	NA	NA			
		低濃度処理区 (1 µg/L)					
排泄期間(日)	1	3	7	10			
総放射性物質	176	115	10	8			
ブロフラニリド	25	1	NA	NA			
代謝物 B	139	104	NA	NA			

NA:分析せず(総放射性物質濃度が低いため)

2.6.3 節足動物への影響

2.6.3.1 ミツバチ

ブロフラニリド原体を用いて実施した急性毒性(経口及び接触)試験の報告書を受領した。 結果概要を表 2.6-14 に示す。

試験の結果、ミツバチへの影響が認められたことから、ブロフラニリドのミツバチへの影響を回避するための注意事項が必要であると判断した。

表 2.6-14: ブロフラニリドのミツバチへの影響試験の結果概要

試験名	供試生物	供試虫数	供試薬剤	投与量 (μg ai/頭)	48 h 累積死亡率 (%)	48hLD50 (µg ai/頭)		
				0.0039	3.3			
6-11-4-11				0.0065	3.3			
急性毒性 (経口)				0.0108	10.0	0.0163		
(1111)				0.018	56.7			
	セイヨウミツハ゛チ	1区10頭	原体	百仕	0.030	96.7		
	(Apis mellifera) 成虫	3 反復	原平	0.0019	3.3			
6-11-4-11				0.0037	0.0			
急性毒性 (接触)				0.0075	6.7	0.0101		
(33/3-1)				0.015	96.7			
				0.030	100.0			

2.6.3.2 蚕

ブロフラニリド原体を用いて実施した急性毒性(経口)試験の報告書を受領した。 結果概要を表 2.6-15 に示す。

試験の結果、蚕に対して影響が認められたことから、ブロフラニリドの蚕への影響を回避 するための注意事項が必要であると判断した。

1 2.0	13 . 7 - 7 7 -	/ 1 ジエ	*/ #/ E I		
試験名	供試生物	供試虫数	供試薬剤	試験方法	試験結果
急性毒性 (経口)	蚕 朝日×東海 (Bombyx mori) 4 齢起蚕	1区20頭3反復	原体	浸漬、風乾し、4 日間給 餌 生死及び一般状能を	脱皮率(4 d) 無処理区: 100 % 処理区: 0 % 死亡率(4 d) 無処理区: 0 % 処理区: 100 %

表 2.6-15: ブロフラニリドの蚕への影響試験の結果概要

2.6.3.3 天敵昆虫等

ブロフラニリド原体を用いて実施したニッポンクサカゲロウ、キイロタマゴバチ、タイリクヒメハナカメムシ及びウヅキコモリグモの急性毒性(接触)試験の報告書を受領した。

結果概要を表 2.6-16 に示す。試験の結果、ニッポンクサカゲロウ、キイロタマゴバチ及びタイリクヒメハナカメムシへの影響が認められた。

表 2.6-16: ブロフラニリドの天敵昆虫等への影響試験の結果概要

試験	供試生物	供試虫数	供試薬剤	試験方法	3	式験結果
	ニッポ゚ンクサカケ゛ロウ (Chrysoperla nipponensis) 幼虫	1 区 4 頭 10 反復			,	無処理区: 2.5 % 処理区 : 30.0 %
急性	キイロタマコ゛ハ゛チ (Trichogramma dendrolimi) 成虫	1区15頭以上 4反復		25 ppm の希釈液を 1 cm ² 当たり 2 μL の割合で散布した		無処理区: 1.4 % 処理区 : 98.8 %
(接触)	タイリクヒメハナカメムシ (<i>Orius strigicollis</i>) 成虫	1 区 4 頭 8 反復	原体	ガラス板に供試生物を間接接触暴露	死亡率(5 d)	無処理区: 6.3 % 処理区 : 65.6 %
	ๆ้" *‡⊐モリク ๊ モ (Pardosa astrigera)	1区10頭 3反復			死亡率(3 d)	無処理区: 0% 処理区 : 3.3%

2.7 薬効及び薬害

2.7.1 薬効

(1) ブロフレア SC

キャベツ、はくさい、だいこん、かぶ、ブロッコリー、カリフラワー、こまつな、チンゲンサイ、みずな、レタス、ねぎ、だいず、かんしょ及びきくについてブロフレア SC (ブロフラニリド 5.0 %水和剤) を用いて実施した薬効・薬害試験の報告書を受領した。

試験設計概要を表 2.7-1 に示す。

各試験区において、試験対象とした各害虫に対して無処理区と比べて効果が認められた。

表 2.7-1: ブロフレア SC の薬効・薬害試験設計概要

	ロノレア SC の条効・楽書訊映設記		試験条件		
作物名	対象害虫	希釈倍数 (倍)	使用濃度* (kg ai/hL)	使用方法	試験数
	コナカ゛	2,000	0.0025		6
	2770	4,000	0.0013		3
	an.	2,000	0.0025		6
	アオムシ	4,000	0.0013		3
	and the	2,000	0.0025		6
	ハスモンヨトウ	4,000	0.0013		3
+ 1. atm	71.4127	2,000	0.0025	##* -/	6
キャベツ	ヨトウムシ	4,000	0.0013	散布	3
	LLH > _ L >	2,000	0.0025		6
	オオタハ゛コカ゛	4,000	0.0013		3
	 	2,000	0.0025		7
	ウワバ類(タマナギンウワバ、イラクサギンウワバ)	4,000	0.0013		3
	ハイマタ゛ラノメイカ゛	2,000	0.0025		7
	/MX9	4,000	0.0013		3
	コナカ゛	2,000	0.0025		6
	2) //	4,000	0.0013		3
	アオムシ	2,000	0.0025		6
	7449	4,000	0.0013		3
	war val d	2,000	0.0025		6
はくさい	ハスモンヨトウ	4,000	0.0013	散布	3
17/91,	ታ ኮሶ አ	2,000	0.0025		6
	31.747	4,000	0.0013		3
	オオタハ゛コカ゛	2,000	0.0025		6
	447/ 4	4,000	0.0013		3
	ハイマダ゛ラノメイカ゛	2,000	0.0025		6
	/M×9 // // / //	4,000	0.0013		3

ブロフラニリド - II. 審査報告 - 2. 審査結果

			試験条件		
作物名	対象害虫	希釈倍数	使用濃度*	使用方法	試験数
		(倍)	(kg ai/hL)		_
	コナカ゛	2,000	0.0025		6
		4,000	0.0013		3
	ヨトウムシ	2,000	0.0025		6
		4,000	0.0013		3
	ハイマタ゛ラノメイカ゛	2,000	0.0025		6
だいこん		4,000	0.0013	散布	3
	キスシ゛ノミハムシ	2,000	0.0025	10.1	6
		4,000	0.0013		3
	カブ゛ラハハ゛チ	2,000	0.0025		6
	<i>***</i>	4,000	0.0013		3
	アオムシ	2,000	0.0025		6
	7,444	4,000	0.0013		3
かぶ	コナカ゛	2,000	0.0025	散布	7
73-23	2//	4,000	0.0013	取布	3
	コナカ゛	2,000	0.0025		6
		4,000	0.0013		3
	アオムシ	2,000	0.0025	散布	7
	7447	4,000	0.0013		3
	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	2,000	0.0025		6
ブロッコリー	ハスモンヨトリ	4,000	0.0013		3
	-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1	2,000	0.0025		6
	ヨトウムシ	4,000	0.0013		3
	1.16.5.48	2,000	0.0025		6
	オオタハ゛コカ゛	4,000	0.0013		3
	113	2,000	0.0025		6
, ,, , = = =	コナカ゛	4,000	0.0013	#1 / .	3
カリフラワー		2,000	0.0025	散布	7
	アオムシ	4,000	0.0013		3
		2,000	0.0025		2
	コナカ゛	4,000	0.0013		2
		2,000	0.0025		3
こまつな	アオムシ	4,000	0.0013	散布	2
		2,000	0.0025		2
	キスシ゛ノミハムシ	4,000	0.0013		3
	_]	,			_

			試験条件		
作物名	対象害虫	希釈倍数	使用濃度*	使用方法	試験数
		(倍) 2,000	(kg ai/hL) 0.0025		2
	コナカ゛	4,000	0.0023		2
		2,000	0.0013		2
チンゲンサイ	アオムシ	4,000	0.0023	散布	2
		2,000	0.0013		3
	キスシ゛ノミハムシ	4,000	0.0023		2
		2,000	0.0025		2
	コナカ゛	4,000	0.0023	-	2
		2,000	0.0025		2
みずな	アオムシ	4,000	0.0023	散布	2
		2,000	0.0025		2
	キスシ゛ノミハムシ	4,000	0.0013		2
		2,000	0.0025		6
	ハスモンヨトウ	4,000	0.0013		3
		2,000	0.0025		6
	ヨトウムシ	4,000	0.0013		3
レタス		2,000	0.0025	散布	6
	オオタハ゛コカ゛	4,000	0.0013		3
	ウワハ゛類(タマナキ゛ンウワハ゛、 イラクサキ゛ンウワハ゛)	2,000	0.0025		6
		4,000	0.0013		3
	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	2,000	0.0025		6
la de	ネキ゛コカ゛ 	4,000	0.0013	#1	3
ねぎ		2,000	0.0025	散布	6
	シロイチモシ゛ヨトウ	4,000	0.0013		3
	war val A	2,000	0.0025		7
だいぞ	ハスモンヨトウ	4,000	0.0013	# <i>h-</i>	3
だいず	オオタハ゛コカ゛	2,000	0.0025	散布	6
	4427	4,000	0.0013		3
	ハスモンヨトウ	2,000	0.0025		7
かんしょ	\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	4,000	0.0013	散布	3
ハーハレム	ナカシ゛ロシタハ゛	2,000	0.0025	IIVAB	6
	1/// -4//-	4,000	0.0013		3
	ハスモンヨトウ	2,000	0.0025		7
きく	7.700 21/	4,000	0.0013	散布	3
C \	オオタハ゛コカ゛	2,000	0.0025	BV.1li	6
* · 右効成分濃度		4,000	0.0013		3

^{*:}有効成分濃度

(2) ブロフレア 20SC

キャベツについてブロフレア 20SC (ブロフラニリド 20.0 %水和剤) を用いて実施した薬 効・薬害試験の報告書を受領した。

試験設計概要を表 2.7-2 に示す。

各試験区において、試験対象とした各害虫に対して無処理区と比べて効果が認められた。

表 2.7-2: ブロフレア 20SC の薬効・薬害試験設計概要

作物名	対象害虫	希釈倍数	使用濃度*	使用方法	試験数
		(倍)	(kg ai/hL)	及用力伍	
キャベツ	ハスモンヨトウ	8,000	0.0025	散布	7
777	/ \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	16,000	0.0013	拟彻	4

^{*:}有効成分濃度

2.7.2 対象作物への薬害

(1) ブロフレア **SC**

ブロフレア SC について、表 2.7-1 に示した薬効・薬害試験において薬害は認められなかった。

キャベツ、はくさい、だいこん、かぶ、ブロッコリー、カリフラワー、こまつな、チンゲンサイ、みずな、リーフレタス、レタス、ねぎ、だいず、かんしょ及びきくについて、ブロフレア SC を用いて実施した限界薬量薬害試験の報告書を受領した。

結果概要を表 2.7-3 に示す。限界薬量薬害試験の結果、薬害は認められなかった。 以上から、申請作物に対する薬害について問題がないことを確認した。

表 2.7-3: ブロフレア SC の限界薬量薬害試験結果概要

	試験場所		試懸	食条件		
作物名	実施年度	希釈倍数 (倍)	使用濃度* (kg ai/hL)	使用時期	使用方法	結果
	千葉	1,000	0.005			いずれの試験区も茎葉に薬
+ 1. 200	H27	2,000	0.0025	3-4 葉期	##J	害は認められなかった。
キャベツ	滋賀	1,000	0.005	結球始期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬
	H27	2,000	0.0025	和场外列		害は認められなかった。
	千葉	1,000	0.005	5-6 葉期		いずれの試験区も茎葉に薬
	H27	2,000	0.0025	3-0 来朔		害は認められなかった。
はくさい	滋賀	1,000	0.005	2 葉期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬
19/01.	H26	2,000	0.0025	2条例	HX/III	害は認められなかった。
	滋賀	1,000	0.005	結球始期		いずれの試験区も茎葉に薬
	H27	2,000	0.0025	小日 2/1×7日 79]		害は認められなかった。
	千葉	1,000	0.005	4-5 葉期		いずれの試験区も茎葉に薬
だいこん	H27	2,000	0.0025	4-5 来朔	散布	害は認められなかった。
/CV . CN	滋賀	1,000	0.005	2 葉期	HX7[]	いずれの試験区も茎葉に薬
	H26	2,000	0.0025	4 未朔		害は認められなかった。

	試験場所 試験条件					
作物名	実施年度	希釈倍数	使用濃度*	使用時期	使用方法	結果
		(倍)	(kg ai/hL)	(2/11/11/91	(X/11/3/IZ	
	千葉	1,000	0.005	5 葉期		いずれの試験区も茎葉に薬
	H27	2,000	0.0025	5 716774		害は認められなかった。
かぶ	滋賀	1,000	0.005	3 葉期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬
	H26	2,000	0.0025	5 71077	15.11.	害は認められなかった。
	滋賀	1,000	0.005	2 葉期		いずれの試験区も茎葉に薬
	H27	2,000	0.0025	2,14.74		害は認められなかった。
	千葉	1,000	0.005	3 葉期		いずれの試験区も茎葉に薬
	H27	2,000	0.0025			害は認められなかった。
	滋賀	1,000	0.005	2.5-3 葉期	#:L	いずれの試験区も茎葉に薬
ブロッコリー	H26	2,000	0.0025		散布	害は認められなかった。
	滋賀	1,000	0.005	北本水子知知		いずれの試験区も花蕾及び
	H27	2,000	0.0025	花蕾形成初期		茎葉に薬害は認められなかった。
	 千葉	1,000	0.005			いずれの試験区も茎葉に薬
	H27	2,000	0.0025	3-4 葉期		害は認められなかった。
カリフラワー	滋賀	1,000	0.005		散布	いずれの試験区も茎葉に薬
	H26	2,000	0.0025	3-3.5 葉期		害は認められなかった。
	千葉	1,000	0.005	++-11-0		いずれの試験区も茎葉に薬
In . In	H27	2,000	0.0025	4-5 葉期	#1	害は認められなかった。
こまつな	滋賀	1,000	0.005	2 # #	散布	いずれの試験区も茎葉に薬
	H26	2,000	0.0025	3 葉期		害は認められなかった。
	千葉	1,000	0.005	5 / 英田		いずれの試験区も茎葉に薬
チンゲンサイ	H27	2,000	0.0025	5-6 葉期	散布	害は認められなかった。
7 2 7 2 9 4	滋賀	1,000	0.005	3 葉期		いずれの試験区も茎葉に薬
	H26	2,000	0.0025	3 来朔		害は認められなかった。
	千葉	1,000	0.005	6 葉期		いずれの試験区も茎葉に薬
みずな	H27	2,000	0.0025	0 76793	散布	害は認められなかった。
, , ,	滋賀	1,000	0.005	草丈 15cm	154 114	いずれの試験区も茎葉に薬
	H26	2,000	0.0025			害は認められなかった。
	千葉	1,000	0.005	3-4 葉期		いずれの試験区も茎葉に薬
リーフレタス	H27	2,000	0.0025	- , , .	散布	害は認められなかった。
	滋賀	1,000	0.005	2 葉期		いずれの試験区も茎葉に薬
	H27	2,000	0.0025			害は認められなかった。 いずれの試験区も茎葉に薬
	千葉	1,000	0.005	4-5 葉期		害は認められなかった。
レタス	H27 滋賀	2,000	0.0025		散布	古は認められなかった。いずれの試験区も茎葉に薬
	公員 H26	1,000 2,000	0.005 0.0025	2 葉期		害は認められなかった。
	 千葉	1.000	0.0023			いずれの試験区も茎葉に薬
	H27	2,000	0.003	草丈 15cm		害は認められなかった。
ねぎ		500	0.01		散布	
	滋賀	1,000	0.005	草丈 20-40cm	DX 113	いずれの試験区も茎葉に薬
	H27	2,000	0.0025			害は認められなかった。
	千葉	1,000	0.005	古士 25, 20		いずれの試験区も茎葉に薬
だいず	H27	2,000	0.0025	草丈 25-30cm	散布	害は認められなかった。
/CV 19	滋賀	1,000	0.005	草丈 30cm	fX/1门	いずれの試験区も茎葉に薬
	H26	2,000	0.0025	平人 SUCIII		害は認められなかった。
	千葉	1,000	0.005	草丈 20-25cm		いずれの試験区も茎葉に薬
かんしょ	H27	2,000	0.0025	+× 20-23cm	散布	害は認められなかった。
,,,,,,,,	滋賀	1,000	0.005	草丈 50cm	IDV: 114	いずれの試験区も茎葉に薬
	H26	2,000	0.0025	>C 500m		害は認められなかった。

	試験場所		試퉶	食条件		
作物名	実施年度	希釈倍数	使用濃度*	使用時期	使用方法	結果
		(倍)	(kg ai/hL)			
	千葉	1,000	0.005	開花期		いずれの試験区も花に薬害
きく	H27	2,000	0.0025	用16朔	散布	は認められなかった。
2 \	滋賀	1,000	0.005	開花期	FX7[1]	いずれの試験区も花に薬害
	H26	2,000	0.0025	州16州		は認められなかった。

^{*:}有効成分濃度

(2) ブロフレア 20SC

ブロフレア 20SC について、表 2.7-2 に示した薬効・薬害試験において薬害は認められなかった。

キャベツについて、ブロフレア 20SC を用いて実施した限界薬量薬害試験の報告書を受領した。

結果概要を表 2.7-4 に示す。限界薬量薬害試験の結果、薬害は認められなかった。 以上から、申請作物に対する薬害について問題がないことを確認した。

表 2.7-4: ブロフレア 20SC の限界薬量薬害試験結果概要

			試脈			
作物名	試験場所 実施年度	希釈倍数 (倍)	使用濃度* (kg ai/hL)	使用時期	使用方法	結果
	千葉	4,000	0.005	2 4 莊期		いずれの試験区も茎葉に薬害
キャベツ	H27	8,000	0.0025	3-4 葉期	3-4 果期 散布	は認められなかった。
7717	滋賀	4,000	0.005	2-2.5 葉期	取り	いずれの試験区も茎葉に薬害
	H27	8,000	0.0025	2-2.3 条州		は認められなかった。

^{*:}有効成分濃度

2.7.3 周辺農作物への薬害

(1) 漂流飛散による薬害

① ブロフレア SC

いんげんまめ、きゅうり、たかな、なす及び稲について、ブロフレア SC を用いて実施 した漂流飛散による薬害試験を受領した。

結果概要を表 2.7-5 に示す。試験の結果、薬害は認められなかった。

以上から、漂流飛散による薬害について問題ないと判断した。

表 2.7-5: ブロフレア SC の漂流飛散による薬害試験結果概要

	試験場所	試験条件					
作物名	実施年度	実施年度 希釈倍数 処理濃度* 処理時期 処理方法		結果			
		(倍)	(kg ai/hL)	70.3.1791	7C.±7712		
1. () (E) 4.L	千葉	1,000	0.005	草丈 30cm	散布	いずれの試験区も茎葉に薬害は	
	H27	2,000	0.0025	早入 50CIII	BX411	認められなかった。	
いんげんまめ	滋賀	1,000	0.005	2 葉期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬害は	
	H27	2,000	0.0025	2 条朔	₩ HX 1111	認められなかった。	
	千葉	1,000	0.005	3-4 葉期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬害は	
きゅうり	H27	2,000	0.0025	3-4 未朔	BX411	認められなかった。	
	滋賀 1,000	0.005	1.5-2 葉期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬害は		
	H27	2,000	0.0025	1.3-2 朱州	₩ 111	認められなかった。	

	試験場所		試懸	食条件		結果	
作物名	実施年度	希釈倍数	処理濃度*	処理時期	処理方法		
	3 3	(倍)	(kg ai/hL)	沈连时别 沈连刀伝			
	千葉	1,000	0.005	4 葉期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬害は	
たかな	H27	2,000	0.0025	4 未朔	月又7月1	認められなかった。	
101114	滋賀	1,000	0.005	3.5-4 葉期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬害は	
	H27	2,000	0.0025	3.3-4 条朔	取7[]	認められなかった。	
	千葉	1,000	0.005	4 葉期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬害は	
なす	H27	2,000	0.0025	4 未朔	₹X1 1	認められなかった。	
14 9	滋賀	1,000	0.005	草丈 150cm	散布	いずれの試験区も茎葉及び果実	
	H27	2,000	0.0025	早入 150cm	取り	に薬害は認められなかった。	
	千葉	1,000	0.005	2.5 葉期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬害は	
稲	H27	2,000	0.0025	2.3 条朔	取り	認められなかった。	
	滋賀 H27	1,000	0.005	3 葉期	散布	いずれの試験区も茎葉に薬害は	
	(XX 貝 H 2/	2,000	0.0025	3 柴朔	取和	認められなかった。	

^{*:}有効成分濃度

② ブロフレア 20SC

ブロフレア 20SC の漂流飛散による薬害試験は、その組成及び使用方法からブロフレア SC の試験成績で評価可能と判断した。

このことから、漂流飛散による薬害について問題ないと判断した。

(2) 水田水の流出による薬害

ブロフラニリドの用途は殺虫剤であるため、試験実施は不要と判断した。

(3) 揮散による薬害

ブロフラニリドの用途は殺虫剤であるため、試験実施は不要と判断した。

2.7.4 後作物への薬害

ほ場土壌残留試験 (2.5.2.2 参照) におけるブロフラニリドの 50%消失期 (DT_{50}) は畑地土壌では火山灰壌土で 29日、沖積壌土で 25日であり、100日を超えないため、試験実施は不要と判断した。

別添1 用語及び略語

	2310 I 713 HD 2	ОРДИН
ACTH	adrenocorticotropic hormone	副腎皮質刺激性ホルモン
ADI	acceptable daily intake	許容一日摂取量
AEC	acute effect concentration	急性影響濃度
ai	active ingredient	有効成分
ALP	alkaline phosphatase	アルカリホスファターゼ
ALT	alanine transaminase	アラニンアミノトランスフェラーゼ
ARfD	acute reference dose	急性参照用量
AUC	area under the curve	薬物濃度曲線下面積
BCF	bioconcentration factor	生物濃縮係数
CAS	Chemical Abstracts Service	ケミカルアブストラクトサービス
Chol	cholesterol	コレステロール
CMC	carboxymethyl cellulose	カルボキシメチルセルロース
C_{max}	maximum consentration	最高濃度
DMF	N,N-dimethylformamide	N,N-ジメチルホルムアミド
DSC	differential scanning calorimetry	示差走査熱量分析
DT ₅₀	dissipation time 50 %	50 %消失期
EC ₅₀	median effect concentration	半数影響濃度
ESTI	estimated short-term intake	短期推定摂取量
ErC ₅₀	median effect concentration deriving	速度法による半数生長阻害濃度
- 50	from growth rate	
F_1	first filial generation	交雑第1代
FOB	functional observational battery	機能観察総合検査
FSH	Follicle stimulating hormone	卵胞刺激ホルモン
GAP	good agricultural practice	使用方法
GGT	γ-glutamyltransferase	ガンマグルタミルトランスフェラーゼ
GLP	Good Laboratory Practice	優良試験所規範
Hb	hemoglobin	ヘモグロビン (血色素量)
HPLC	high performance liquid chromatograph	高速液体クロマトグラフ
hL	hectoliter	ヘクトリットル (100 L)

Ht	hematocrit	ヘマトクリット値
ISO	International Organization for	国際標準化機構
	Standardization	
IRAC	Insecticide Resistance Action Committee	殺虫剤抵抗性対策委員会
IUPAC	International Union of Pure and	国際純正応用化学連合
	Applied Chemistry	
JIS	Japanese Industrial Standards	日本工業規格
K^{ads} F	freundlich adsorption coefficient	吸着係数
K^{ads} Foc	organic carbon normalized Freundlich	有機炭素吸着係数
	adsorption coefficient	
LC	and the late to a second at the	半数致死濃度
LC ₅₀	median lethal concentration	一致女兄張及 液体クロマトグラフ質量分析計
LC-MS	liquid chromatography with mass	似件クロドドクノノ貝里刀切回
LC-MS-MS	spectrometer liquid chromatography with tandem	液体クロマトグラフタンデム型質量分
LC-MB-MB	mass spectrometer	析計
LD_{50}	median lethal dose	半数致死量
LH	luteinizing hormone	黄体形成ホルモン
LLNA	local lymph node assay	マウス局所リンパ節増殖試験
LOQ	limit of quantitation	定量限界
LSC	liquid scintillation counter	液体シンチレーションカウンター
	1	
MCV	mean corpuscular volume	平均赤血球容積
		+1/
NA	not analysis	実施せず
ND	not detected	検出限界未満
NOAEL	no observed adverse effect level	無毒性量
NOEC	no observed effect concentration	無影響濃度
NOEL	no observed effect level	無影響量
OC	organic carbon content	有機炭素含有量
OECD	organic carbon content Organisation for Economic Co-	経済協力開発機構
OLCD	operation and Development	15.77.1 M3.7.3 IVII フロルX:11サ
OM	organic matter	有機物含有量
OIVI	organic manci	

P	parental generation	親世代
Pa	pascal	パスカル

PEC predicted environmental concentration 環境中予測濃度

pH pH-value pH値

PHI pre-harvest interval 収穫前使用禁止期間

pKa dissociation constant 解離定数

Pow partition coefficient between n-octanol n-オクタノール/水分配係数

and water

ppm parts per million 百万分の1 (10⁻⁶)

r correlation coefficient 相関係数
RBC red blood cell 赤血球数

Retreticulocyte網状赤血球数rpmrotation per minute回転毎分

RSD relative standard deviation 相対標準偏差

RSDr repeatability relative standard deviation 併行相対標準偏差

s second 秒

SF safety factor 安全係数

T_{1/2} half-life 消失半減期

TAR total applied radioactivity 総投与(処理)放射性物質

T.Bil total bilirubin 総ビリルビン
TG triglyceride トリグリセリド
TLC thin layer chromatograph 薄層クロマトグラフ
TMDI theoretical maximum daily intake 理論最大一日摂取量
T_{max} time at maximum concentration 最高濃度到達時間

TRR total radioactive residue 総残留放射性物質濃度

UV Ultraviolet 紫外線

WBC white blood cell 白血球数

別添2 代謝物等一覧

	別旅2 代謝物等一覧					
	名称 略称	化学名	構造式			
	ブロフラニリド	N-[2-ブロモ-4-(ペルフルオロプロパン-2-イル)-6-(トリフルオロメチル)フェニル]-2-フルオロ-3-(N-メチルベンズアミド)ベンズアミド				
В	DM-8007	3-ベンズアミド- <i>N</i> -[2-ブロモ-4-(ペルフルオロプロパン-2-イル)-6-(トリフルオロメチル)フェニル]-2-フルオロベンズアミド	NH F CF ₃ CF ₃ CF ₃			
С	S(PFP-OH)-8007	N-[2-ブロモ-4-(1,1,1,3,3,3-ヘキサフルオロ-2-ヒドロキシプロパン-2-イル)-6-(トリフルオロメチル)フェニル]-2-フルオロ-3-(N-メチルベンズアミド)ベンズアミド	O CH ₃ F HZ CF ₃ OH CF ₃			
D	AB-oxa	N-{2-フルオロ-3-[6-(ペルフルオロプロパン-2-イル)-4-(トリフルオロメチル)-1,3-ベンゾオキサゾール-2-イル]フェニル}-N-メチルベンズアミド	F CF ₃			

	名称 略称	化学名	構造式
Е	DC-DM-8007	3-アミノ- <i>N</i> -[2-ブロモ-4-(ペルフルオロプロパン-2-イル)-6-(トリフルオロメチル)フェニル]-2-フルオロベンズアミド	
F	馬尿酸	馬尿酸	O N OH
G	DM-(C4-OH)-8007	N-[2-ブロモ-4-(ペルフルオロプロパン-2-イル)-6-(トリフルオロメチル)フェニル]-2-フルオロ-3-(4-ヒドロキシベンズアミド)ベンズアミド	NH
Н	S(Br-OH)-8007	2-フルオロ- <i>N</i> -[2-ヒドロキシ-4-(ペルフルオロプロパン-2-イル)-6-(トリフルオロメチル)フェニル]- 3-(<i>N</i> -メチルベンズアミド)ベンズアミド	
I	DM-(C34-diOH)-8007	N-[2-ブロモ-4-(ペルフルオロプロパン-2-イル)-6-(トリフルオロメチル)フェニル]-3-(3,4-ジヒドロキシベンズアミド)-2-フルオロベンズアミド	HO CF ₃

別添3 審査資料一覧

1. 基本情報

審査報告書	+11 #- #-	表題、出典(試験施設以外の場合)	## III **	
項目番号	報告年	試験施設、報告書番号	提出者	
欠日田力		GLP適合状況(必要な場合)、公表の有無		
		農薬登録申請見本検査書(ブロフレアSC)	二共ルツ	
II.1.3.6	2018	三井化学アグロ株式会社	三井化学	
		未公表	アグロ(株)	
		農薬登録申請見本検査書(ブロフレア20SC)	二十八份	
II.1.3.6	2018	三井化学アグロ株式会社	三井化学	
		未公表	アグロ(株)	
		農薬の組成、製造方法等に関する報告書(ブロフレアSC)	++ /1 , 224	
II.1.3.6	2018	三井化学アグロ株式会社	三井化学	
		未公表	アグロ(株)	
		農薬の組成、製造方法等に関する報告書(ブロフレア20SC)	++ /1 , 224	
II.1.3.6	2018	三井化学アグロ株式会社	三井化学	
		未公表	アグロ(株)	

2. 物理的化学的性状

4. 初进印灯	7-1-H21	T-V\	
審查報告書項目番号	報告年	表題、出典(試験施設以外の場合) 試験施設、報告書番号 GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	提出者
II.2.1.2.1	2017	MCI-8007 (BAS 450 I) (Pure Grade) Physico-chemical Properties Envigo CRS Limited、MUY0026 GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.1.2.1	2017	MCI-8007 (BAS 450 I) Water Solubility Envigo CRS Limited、MUY0011 GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.1.2.1	2016	Hydrolysis of [¹⁴ C]MCI-8007 at pH 4, 7 and 9 PTRL West、2499W GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.1.2.1	2017	Direct Aqueous Photodegradation of [14C]MCI-8007 (also known as [14C]broflanilide or [14C]BAS 450 I) EAG Laboratories、2579W GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.1.2.2	2018	農薬の物理的化学的性状に関する検査結果報告書(ブロフレアSC) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.1.2.2	2018	農薬の物理的化学的性状に関する検査結果報告書(ブロフレア20SC) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
П.2.1.2.3	2018	農薬の経時安定性に関する検査結果報告書(ブロフレアSC) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.1.2.3	2018	農薬の経時安定性に関する検査結果報告書(ブロフレア20SC) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)

3. 分析法

3. JIVIT	^		
審査報告書	+0 #- #-	表題、出典(試験施設以外の場合)	#B 111 +V
項目番号	報告年	試験施設、報告書番号	提出者
		GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	
H 2 2 1	2016	Validation of analytical methods for MCI-8007 Chemicals Evaluation and Research Institute、84291	三井化学
II.2.2.1	2016	·	アグロ(株)
		GLP、未公表	
H 0 0 1	2017	Content Analysis of MCI-8007 Chemicals Evaluation and Research Institute、84294	三井化学
II.2.2.1	2017	GLP、未公表	アグロ(株)
		Content Analysis of MCI-8007	
II.2.2.1	2017	Chemicals Evaluation and Research Institute, 84589	三井化学
11.2.2.1	2017	GLP、未公表	アグロ(株)
		農薬登録申請見本検査書(ブロフレアSC)	
II.2.2.2	2018	三井化学アグロ株式会社	三井化学
11.2.2.2	2016	未公表	アグロ(株)
		農薬登録申請見本検査書(ブロフレア20SC)	
II.2.2.2	2018	三井化学アグロ株式会社	三井化学
11.2.2.2	2016	未公表	アグロ(株)
		農薬の見本の検査結果報告書(ブロフレアSC)	
II.2.2.2	2018	三井化学アグロ株式会社	三井化学
11.2.2.2	2010	未公表	アグロ(株)
		農薬の見本の検査結果報告書(ブロフレア20SC)	
II.2.2.2	2018	三井化学アグロ株式会社	三井化学
11.2.2.2	2010	未公表	アグロ(株)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル ねぎ作物残留試験	→ 11. n . 224
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C277	三井化学
		GLP、未公表	アグロ(株)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル ねぎ作物残留試験	- 41. // <u>22</u>
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C129	三井化学
		GLP、未公表	アグロ(株)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル かんしょ作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C118	アグロ(株)
		GLP、未公表	プラロ(1水)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル かんしょ作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2016	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2015C299	アグロ(株)
		GLP、未公表	ノ / L (1水)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル だいこん作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2014	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C275	アグロ(株)
		GLP、未公表)) = (pk)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル だいこん作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C124	アグロ(株)
		GLP、未公表	7 7 (FII)
		作物残留試験結果報告書[だいこん(つまみ菜)]	三井化学
II.2.2.3	2017	株式会社化学分析コンサルタント	アグロ(株)
		未公表	7 (11)
		作物残留試験結果報告書[だいこん(間引き菜)]	三井化学
II.2.2.3	2017	株式会社化学分析コンサルタント	アグロ(株)
		未公表	/
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル かぶ作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C125	アグロ(株)
		GLP、未公表	. ,
H 0 0 0	2015	MCI-8007(MIE-1209)フロアブル はくさい作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C273	アグロ(株)
<u> </u>		GLP、未公表	

ブロフラニリド - 別添3 審査資料一覧

		表題、出典 (試験施設以外の場合)	
審査報告書	報告年	試験施設、報告書番号	提出者
項目番号	和口牛	GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	1定山名
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル はくさい作物残留試験	
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C120	三井化学
11.2.2.3	2015		アグロ(株)
		GLP、未公表 MCI-8007(MIE-1209)フロアブル キャベツ作物残留試験	
H 2 2 2	2014		三井化学
II.2.2.3	2014	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C274	アグロ(株)
		GLP、未公表 MCL 2007/AUE 1200)ファファブルーナル SW/佐州市 577計略	
	2017	MCI-8007(MIE-1209)フロアブル キャベツ作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C119	アグロ(株)
		GLP、未公表	
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル こまつな作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C126	アグロ(株)
		GLP、未公表	, ,
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル ブロッコリー作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C276	アグロ(株)
		GLP、未公表	(,
		作物残留分析報告書(たかな)	三井化学
II.2.2.3	2015	株式会社化学分析コンサルタント、26-128	アグロ(株)
		未公表	
		作物残留分析報告書(みずな)	三井化学
II.2.2.3	2015	株式会社化学分析コンサルタント、26-127	アグロ(株)
		未公表	7 7 (117)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル 結球レタス作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2014	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C278	アグロ(株)
		GLP、未公表	, , (11)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル 結球レタス作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C121	アグロ(株)
		GLP、未公表	7 7 . (210)
		作物残留分析報告書(サラダ菜)	三井化学
II.2.2.3	2015	株式会社化学分析コンサルタント、26-123	アグロ(株)
		未公表)) F (VK)
		作物残留分析報告書 (リーフレタス)	三井化学
II.2.2.3	2015	株式会社化学分析コンサルタント、26-122	アグロ(株)
		未公表)) L(VK)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル えだまめ作物残留試験	三井化学
II.2.2.3	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C117	アグロ(株)
		GLP、未公表	/ / H (V/K)
		MCI-8007(MIE-1209)FL: 土壤残留試験(畑地)	三井化学
II.2.2.4	2015	一般財団法人残留農薬研究所、26-土004	アグロ(株)
		未公表	/ / 中(水)

4. 毒性

4. 毋性			
審査報告書 項目番号	報告年	表題、出典(試験施設以外の場合) GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	提出者
П.2.3.1.1	2017	MCI-8007 (BAS 450 I, Broflanilide): Metabolism and Pharmacokinetics in Rats after Single Oral and Intravenous Doses GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.1	2017	MCI-8007 (BAS 450 I, Broflanilide): Biliary Excretion in Rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.1	2017	MCI-8007 (BAS 450 I, Broflanilide): Tissue Depletion in Rats after Single Oral Doses GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.1	2017	MCI-8007 (BAS 450 I, Broflanilide): Metabolism and Pharmacokinetics in Rats after Repeat Oral Doses GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.2	2012	MLP-8607: Acute Oral Toxicity Study in the Female Rat (Up and Down Method) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.2	2012	MLP-8607: Acute Dermal Toxicity Study in the Rat GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.2	2014	An Acute Inhalation Toxicity Study of MCI-8007 in Rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.2	2017	MCI-8007 Acute oral neurotoxicity study in Wistar rats Administration by gavage GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.2	2012	MLP-8607: Assessment of Ocular Irritation GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.2	2012	MLP-8607: Assessment of Skin Irritation GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.2	2012	MLP-8607: Local Lymph Node Assay in the Mouse GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.2	2015	MCI-8007: Skin Sensitization Study in Guinea Pigs - Maximization test - GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.3	2017	MCI-8007 Repeated-dose 90-day toxicity study in Wistar rats including a recovery period of 4 weeks Administration via the diet GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.3	2015	Determination of MCI-8007 (Reg.No.5672774) and its metabolite DM-8007 (Reg.No.5856361) in rat plasma sampled during the course of Project No.50C0219/10S117 GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.3	2016	MCI-8007: 13 Week Toxicity Study in the Mouse for Dose Range Finding GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.3	2016	MCI-8007 Repeated-dose 90-day oral toxicity study in Beagle dogs Oral administration (capsule) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.3	2015	MCI-8007 Repeated dose 28-day dermal toxicity study in Wistar rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.3	2017	MCI-8007 Repeated dose 28-day inhalation toxicity study Wistar rats with recovery period; dust exposure GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.3	2015	MCI-8007 Repeated Dose 90-day Oral Neurotoxicity Study in Wistar Rats Administration via the Diet GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)

審査報告書 項目番号	報告年	表題、出典 (試験施設以外の場合) GLP 適合状況 (必要な場合)、公表の有無	提出者
II.2.3.1.4	2011	LS5672774 SALMONELLA TYPHIMURIUM / ESCHERICHIA COLI REVERSE MUTATION ASSAY (STANDARD PLATE TEST AND PREINCUBATION TEST) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.4	2010	CHROMOSOME ABERRATION TEST WITH MLP-8607 IN CULTURED MAMMALIAN CELLS GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.4	2013	MLP-8607 MICRONUCLEUS TEST IN BONE MARROW CELLS OF THE MOUSE GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
П.2.3.1.4	2014	MCI-8007 IN VITRO GENE MUTATION TEST IN CHO CELLS (HPRT LOCUS ASSAY) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.5	2017	MCI-8007 Repeated-dose 12-months toxicity study in Beagle dogs Oral administration (capsule) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.5	2017	MCI-8007 Combined Chronic Toxicity/Carcinogenicity Study in Wistar Rats Administration via the Diet up to 24 Months GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.5	2016	MCI-8007:78Week Oral (Dietary) Administration Carcinogenicity Study in the Mouse GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.6	2017	MCI-8007 Two-Generation Reproduction Toxicity Study in Wistar Rats Administration via the Diet GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.6	2016	MCI-8007 Prenatal Developmental Toxicity Study in Wistar Rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.6	2018	MCI-8007 Prenatal Developmental Toxicity Study in New Zealand White Rabbits Oral Administration (Gavage) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.7	2015	MCI-8007:Pharmacology Study GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.8	2017	MCI-8007:90-Day Investigative Toxicity Study in Wistar Rats by Dietary Administration GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.8	2017	An Immunohistochemistry Study to Detect Luteinzing Hormone Expression in the Pituitary Gland of Rats 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.8	2015	MCI-8007 Immunotoxicity study in male Wistar rats Administration via the diet for 4 weeks GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2015	Acute Oral Dose Toxicity Study of DM-8007 in Wistar Rats (Up-and-Down Procedure) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2015	Acute Oral Dose Toxicity Study of S(PFP-OH)-8007 in Wistar Rats (Up-and-Down Procedure) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2017	Reg.No.5959600 (Metabolite of BAS 450 I) = AB-oxa Acute oral toxicity study in rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)

	1		T
審査報告書 項目番号	報告年	表題、出典(試験施設以外の場合) GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	提出者
II.2.3.1.9	2016	Acute Oral Dose Toxicity Study of MFDBA in Wistar Rats (Up and Down Procedure) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2016	Acute Oral Dose Toxicity Study of BBPA in Wistar Rats (Up and Down Procedure) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2016	Acute Oral Dose Toxicity Study of MDFP in Wistar Rats (Up and Down Procedure) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2016	Acute Oral Dose Toxicity Study of MFBA in Wistar Rats (Up and Down Procedure) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2015	Bacterial Reverse Mutation Test of DM-8007 GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2015	Bacterial Reverse Mutation Test of S(PFP-OH)-8007 GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2017	Reg.No.5959600 (Metabolite of BAS 450 I) = AB-oxa SALMONELLA TYPHIMURIUM / ESCHERICHIA COLI REVERSE MUTATION ASSAY GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2016	Bacterial Reverse Mutation Test of MFDBA GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2016	Bacterial Reverse Mutation Test of BBPA GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2016	Bacterial Reverse Mutation Test of MDFP GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2017	Bacterial Reverse Mutation Test of MFBA GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2017	Chromosomal Aberration Study of MFBA in cultuted Mammalian Cells GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2017	Bone Marrow Micronucleus Assay of MFBA in Rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.9	2017	A 28-Day Repeated Dose Oral Toxicity Study of MFBA in rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2014	Acute Oral Dose Toxicity Study of RSA/FL-05E in Sprague-Dawley Rats (Acute Toxic Class Method) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2014	Acute Dermal Dose Toxicity Study of RSA/FL-05E in Sprague-Dawley Rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2015	RSA/FL-05E: Acute Inhalation Toxicity Study in Sprague-Dawley Rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2014	Skin Irritation Study of RSA/FL-05E in New Zealand White Rabbits GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2014	Eye Irritation Study of RSA/FL-05E in New Zealand White Rabbits GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2014	Skin Sensitization Study of RSA/FL-05E in Hartley Guinea Pigs (Buehler Test) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2014	Acute Oral Dose Toxicity Study of RSA/FL-20B in Sprague-Dawley Rats (Acute Toxic Class Method) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2014	Acute Dermal Dose Toxicity Study of RSA/FL-20B in Sprague-Dawley Rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)

ブロフラニリド - 別添3 審査資料一覧

審査報告書 項目番号	報告年	表題、出典(試験施設以外の場合) GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	提出者
II.2.3.1.10	2015	An Acute Inhalation Toxicity Study of MCI-8007 20%SC in Rats GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2014	Skin Irritation Study of RSA/FL-20B in New Zealand White Rabbits GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2014	Eye Irritation Study of RSA/FL-20B in New Zealand White Rabbits GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.3.1.10	2014	Skin Sensitization Study of RSA/FL-20B in Hartley Guinea Pigs (Buehler Test) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)

5. 残留性

5. 发笛性			· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
審査報告書		表題、出典(試験施設以外の場合)	_
項目番号	報告年	試験施設、報告書番号	提出者
		GLP適合状況(必要な場合)、公表の有無	
		[14C]Broflanilide, also known as [14C]MCI-8007 and [14C]BAS 450 I:Metabolism in	
II.2.4.1.1	2017	Japanese Radish	三井化学
11.2.4.1.1	2017	The Institute of Environmental Toxicology、IET 13-8015	アグロ(株)
		GLP、未公表	
		A Metabolism Study with [14C]Broflanilide, also known as [14C]MCI-8007 and	
II.2.4.1.1	2017	[14C]BAS 450 I (2 radiolabels) in Tea (Camelia sinensis)	三井化学
11.2.4.1.1	2017	EAG Laboratories、2510W	アグロ(株)
		GLP、未公表	
		A Metabolism Study with [14C]Broflanilide, also known as [14C]MCI-8007 and	
II.2.4.1.1	2017	[14C]BAS 450 I (2 Radiolabels) in Tomato (Lycopersicon esculentum)	三井化学
11.2.4.1.1	2017	EAG Laboratories、2431W	アグロ(株)
		GLP、未公表	
		A Metabolism Study with [14C]Broflanilide, also known as [14C]MCI-8007 and	
II.2.4.1.1	2017	[14C]BAS 450 I (2 Radiolabels) in Cabbage (Brassica oleracea)	三井化学
11.2.4.1.1	2017	EAG Laboratories、2429W	アグロ(株)
		GLP、未公表	
		A Metabolism Study with [14C]Broflanilide, also known as [14C]MCI-8007 and	
II.2.4.1.1	2017	[14C]BAS 450 I (2 Radiolabels) in Soybean (Glycine max)	三井化学
11.2.4.1.1	2017	EAG Laboratories、2430W	アグロ(株)
		GLP、未公表	
		[14C]Broflanilide, also known as [14C]MCI-8007 and [14C]BAS 450 I:Metabolism in	
II.2.4.1.1	2017	Rice	三井化学
11.2.4.1.1	2017	The Institute of Environmental Toxicology、IET12-8004	アグロ(株)
		GLP、未公表	
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル ねぎ作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C277	一 ガ ルチ アグロ(株)
		GLP、未公表	プラロ(4水)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル ねぎ作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C129	ー ガ に子 アグロ(株)
		GLP、未公表	プラロ(4水)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル かんしょ作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C118	ーゲルチ アグロ(株)
		GLP、未公表)) L (1/k)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル かんしょ作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2016	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2015C299	ー/ LLチ アグロ(株)
		GLP、未公表)) - (//K)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル だいこん作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2014	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C275	一开ルチ アグロ(株)
		GLP、未公表)) - (VK)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル だいこん作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C124	ー/ LLチ アグロ(株)
		GLP、未公表)) - (VK)
		作物残留試験結果報告書 [だいこん (つまみ菜)]	三井化学
II.2.4.2.1	2017	株式会社化学分析コンサルタント	アグロ(株)
	<u> </u>	未公表	/ / - (NN)
		作物残留試験結果報告書 [だいこん (間引き菜)]	三井化学
II.2.4.2.1	2017	株式会社化学分析コンサルタント	一开に子 アグロ(株)
		未公表	/ / H (1/h)
	1	MCI-8007(MIE-1209)フロアブル かぶ作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C125	二 ガ 化子 アグロ(株)
		GLP、未公表	/ / H (1/N)

ブロフラニリド - 別添3 審査資料一覧

		表題、出典(試験施設以外の場合)	
審査報告書	報告年	試験施設、報告書番号	提出者
項目番号	和口牛	GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	走山有
	1	MCI-8007(MIE-1209)フロアブル はくさい作物残留試験	
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C273	三井化学
11.2.4.2.1	2015	GLP、未公表	アグロ(株)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル はくさい作物残留試験	
H 0 4 0 1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C120	三井化学
II.2.4.2.1	2015		アグロ(株)
		GLP、未公表MCI-8007(MIE-1209)フロアブル キャベツ作物残留試験	
	2011	i '	三井化学
II.2.4.2.1	2014	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C274	アグロ(株)
		GLP、未公表	
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル キャベツ作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C119	アグロ(株)
		GLP、未公表	
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル こまつな作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C126	アグロ(株)
		GLP、未公表	(, ,
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル ブロッコリー作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C276	アグロ(株)
		GLP、未公表	7 7 (117)
		作物残留分析報告書(たかな)	三井化学
II.2.4.2.1	2015	株式会社化学分析コンサルタント、26-128	アグロ(株)
		未公表	7 7 (114)
		作物残留分析報告書(みずな)	三井化学
II.2.4.2.1	2015	株式会社化学分析コンサルタント、26-127	アグロ(株)
		未公表	7 7 · (PN)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル 結球レタス作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2014	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2013C278	アグロ(株)
		GLP、未公表)) = (VK)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル 結球レタス作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C121	アグロ(株)
		GLP、未公表)) L (1/K)
	1	作物残留分析報告書(サラダ菜)	三井化学
II.2.4.2.1	2015	株式会社化学分析コンサルタント、26-123	ー ガ ルチ アグロ(株)
		未公表	アグロ(株)
		作物残留分析報告書 (リーフレタス)	三井化学
II.2.4.2.1	2015	株式会社化学分析コンサルタント、26-122	二升化字 アグロ(株)
		未公表	ノクロ(1木)
		MCI-8007(MIE-1209)フロアブル えだまめ作物残留試験	三井化学
II.2.4.2.1	2015	一般社団法人日本植物防疫協会、JP2014C117	
	1	GLP、未公表	アグロ(株)

6. 環境動態

0. 垛児别尼	7		
審査報告書	却开左	表題、出典(試験施設以外の場合)	担山本
項目番号	報告年	試験施設、報告書番号 GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	提出者
		[14C]MCI-8007:Metabolic Fate in Aerobic Soil	三井化学
II.2.5.2.1	2017	The Institute of Environmental Toxicology、IET13-8017 GLP、未公表	アグロ(株)
II.2.5.2.1	2017	[A-ring-U- ¹⁴ C]MCI-8007:Metabolic Fate in Aerobic Soil (Supplemental) The Institute of Environmental Toxicology, IET 14-8006	三井化学
11.2.3.2.1	2017	GLP、未公表	アグロ(株)
		MCI-8007(MIE-1209)FL: 土壤残留試験(畑地)	三井化学
II.2.5.2.2	2015	一般財団法人残留農薬研究所、26-土004	二 ガ ル子 アグロ(株)
		未公表	アクロ(1/A)
		Soil Adsorption/Desorption of [14C]MCI-8007 (also known as [14C]broflanilide or	
II.2.5.2.3	2017	[14C]BAS 450 I) by the Batch Equilibrium Method	三井化学
11.2.3.2.3		EAG Laboratories、2580W	アグロ(株)
		GLP、未公表	
	2016	Hydrolysis of [14C]MCI-8007 at pH 4, 7 and 9	三井化学
II.2.5.3.1		PTRL West、2499W	アグロ(株)
		GLP、未公表	, , (117)
		Direct Aqueous Photodegradation of [14C]MCI-8007 (also known as [14C]broflanilide	11 # NA
II.2.5.3.2	2017	or [14C]BAS 450 I)	三井化学
	2017	EAG Laboratories、2579W	アグロ(株)
		GLP、未公表	
	2010	農薬の水産動植物被害予測濃度算定結果報告書:ブロフレアSC	三井化学
II.2.5.3.4	2018	三井化学アグロ株式会社	アグロ(株)
		未公表	
H 2 5 2 4	2010	農薬の水産動植物被害予測濃度算定結果報告書:ブロフレア20SC	三井化学
II.2.5.3.4	2018	三井化学アグロ株式会社	アグロ(株)
		未公表 農薬の水質汚濁予測濃度算定結果報告書	
II.2.5.3.5	2018	辰衆の小貝の側子側辰及昇に福米報音音 三井化学アグロ株式会社	三井化学
11.2.3.3.3	2016	一大にチケダロ体科会社	アグロ(株)
L		IN MAN	I

7. 環境毒性

/ 、	L		
審査報告書 項目番号	報告年	表題、出典 (試験施設以外の場合) 試験施設、報告書番号 GLP 適合状況 (必要な場合)、公表の有無	提出者
II.2.6.1	2016	Northern Bobwhite (<i>Colinus virginianus</i>) Acute Oral Toxicity Test (LD ₅₀) with BAS 450 I GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.1	2015	BAS 450 I (Reg.No.5672774, MCI-8007) Acute Toxicity in the Mallard Duck (Anas platyrhynchos) after single oral administration (LD50) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.1	2017	BAS 450 I (MCI-8007): A Dietary LC50 Study with the Northern Bobwhite GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.1	2017	BAS 450 I (MCI-8007): A Dietary LC50 Study with the Mallard GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.1	2016	MCI-8007 TECHNICAL (BROFLANILIDE): A 96-HOUR STATIC-RENEWAL ACUTE TOXICITY TEST WITH THE COMMON CARP (Cyprinus carpio) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.1	2016	MCI-8007 TECHNICAL (BROFLANILIDE): A 96-HOUR STATIC-RENEWAL ACUTE TOXICITY TEST WITH THE BLUEGILL (Lepomis macrochirus) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.1	2016	MCI-8007 TECHNICAL (BROFLANILIDE): A 96-HOUR STATIC-RENEWAL ACUTE TOXICITY TEST WITH THE RAINBOW TROUT (Oncorhynchus mykiss) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.1	2016	MCI-8007 (BAS 450 I): A 48-HOUR STATIC-RENEWAL ACUTE TOXICITY TEST WITH THE CLADOCERAN (Daphnia magna) EAG Laboratories、236A-171 GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.1	2017	MCI-8007 のユスリカ幼虫急性遊泳阻害試験 株式会社エスコ、ES2016-B11CH GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.1	2017	MCI-8007 (BROFLANILIDE): A 96-HOUR TOXICITY TEST WITH THE FRESHWATER ALGA (Raphidocelis subcapitata) EAG Laboratories、236P-108 GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.3	2016	MIE-1209FL のコイ急性毒性試験 GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.4	2017	MCI-8007 (BAS 450 I, Broflanilide): Bioconcentration study in the Rainbow Trout (Oncorhynchus mykiss) GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.3	2016	MIE-1209FL のオオミジンコ急性遊泳阻害試験 株式会社エスコ、ES2015-B09D GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.3	2016	MIE-1209FL の藻類生長阻害試験 株式会社エスコ、ES2015-B09S GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.3	2016	MIE-1405FL のコイ急性毒性試験 GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.2.3	2016	MIE-1405FL のオオミジンコ急性遊泳阻害試験 株式会社エスコ、ES2015-B10D GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)

ブロフラニリド - 別添3 審査資料一覧

審査報告書項目番号	報告年	表題、出典(試験施設以外の場合) 試験施設、報告書番号 GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	提出者
II.2.6.2.3	2016	MIE-1405FL の藻類生長阻害試験 株式会社エスコ、ES2015-B10S GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
П.2.6.3.1	2015	Acute toxicity of MCI-8007 (BAS 450 I) to the honeybee <i>Apis mellifera</i> L. under laboratory conditions BioChem agrar、15 10 48 096 B GLP、未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.3.2	2014	MIE-1209 原体のカイコに対する急性摂食毒性試験 一般社団法人日本植物防疫協会、BET13 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.3.3	2014	MIE-1209 原体のニッポンクサカゲロウに対する影響試験 一般社団法人日本植物防疫協会、BET14 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.3.3	2014	MIE-1209 原体のキイロタマゴバチに対する影響試験 一般社団法人日本植物防疫協会、BET15 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.3.3	2014	MIE-1209 原体のタイリクヒメハナカメムシに対する影響試験 一般社団法人日本植物防疫協会、BET16 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.6.3.3	2014	MIE-1209 原体のウヅキコモリグモに対する影響試験 一般社団法人日本植物防疫協会、BET17 未公表	三井化学 アグロ(株)

8. 薬効・薬害

8. 架刻 •	米 吉		
審査報告書 項目番号	報告年	表題、出典(試験施設以外の場合) 試験施設、報告書番号 GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	提出者
II.2.7.1 II.2.7.2	2013	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (キャベツ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (キャベツ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (キャベツ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2016	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(キャベツ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2013	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(はくさい) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(はくさい) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(はくさい) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2016	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(はくさい) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2013	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (だいこん) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (だいこん) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (だいこん) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2016	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (だいこん) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(かぶ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(かぶ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2013	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (ブロッコリー) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (ブロッコリー) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)

審査報告書項目番号	報告年	表題、出典(試験施設以外の場合) 試験施設、報告書番号 GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	提出者
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (ブロッコリー) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (カリフラワー) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(カリフラワー) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(こまつな) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(こまつな) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(チンゲンサイ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (チンゲンサイ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(みずな) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(みずな) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(こまつな) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(こまつな) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (チンゲンサイ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (チンゲンサイ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2013	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (レタス) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(レタス) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (レタス) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)

審査報告書 項目番号	報告年	表題、出典(試験施設以外の場合) 試験施設、報告書番号 GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	提出者
II.2.7.1 II.2.7.2	2016	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (レタス) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2013	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(ねぎ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(ねぎ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(ねぎ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2016	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(ねぎ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (だいず) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (だいず) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(かんしょ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(かんしょ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2016	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(かんしょ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績 (きく) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの薬効薬害試験成績(きく) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2014	ブロフレア20SCの薬効薬害試験成績(キャベツ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.1 II.2.7.2	2015	ブロフレア20SCの薬効薬害試験成績(キャベツ) 一般社団法人日本植物防疫協会 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績(キャベツ) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (はくさい) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)

		表題、出典(試験施設以外の場合)	
審査報告書 項目番号	報告年	試験施設、報告書番号	提出者
没口留力		GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績(はくさい) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (だいこん) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (だいこん) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (かぶ) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (かぶ) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (ブロッコリー) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (ブロッコリー) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (カリフラワー) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (カリフラワー) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (こまつな) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (こまつな) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (チンゲンサイ) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (チンゲンサイ) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績(みずな) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績(みずな) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (リーフレタス) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)

審查報告書項目番号	報告年	表題、出典(試験施設以外の場合) 試験施設、報告書番号 GLP 適合状況(必要な場合)、公表の有無	提出者
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (レタス) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (レタス) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績(ねぎ) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (だいず) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績 (だいず) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績(かんしょ) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績(かんしょ) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2014	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績(きく) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレアSCの限界薬量薬害試験成績(きく) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.2	2015	ブロフレア20SCの限界薬量薬害試験成績 (キャベツ) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.3	2015	ブロフレアSCの漂流飛散による薬害試験成績 (いんげんまめ) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.3	2015	ブロフレアSCの漂流飛散による薬害試験成績(きゅうり) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.3	2015	ブロフレアSCの漂流飛散による薬害試験成績 (たかな) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.3	2015	ブロフレアSCの漂流飛散による薬害試験成績(なす) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)
II.2.7.3	2015	ブロフレアSCの漂流飛散による薬害試験成績(水稲) 三井化学アグロ株式会社 未公表	三井化学 アグロ(株)